

おしほ
の
木
よ

戦中戦後 ひとつ校舎に六年間
川越高校第三期生 還暦の文集

あの頃のアルバムから

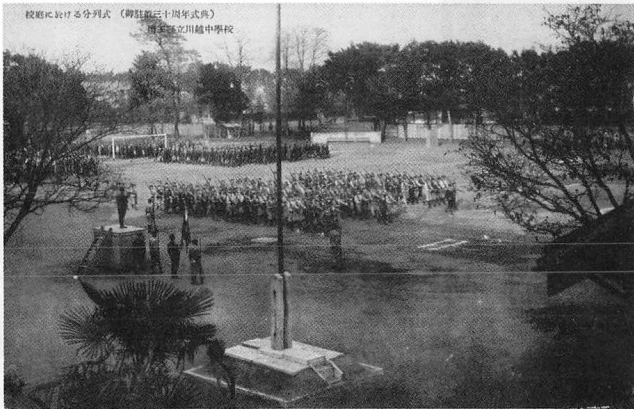
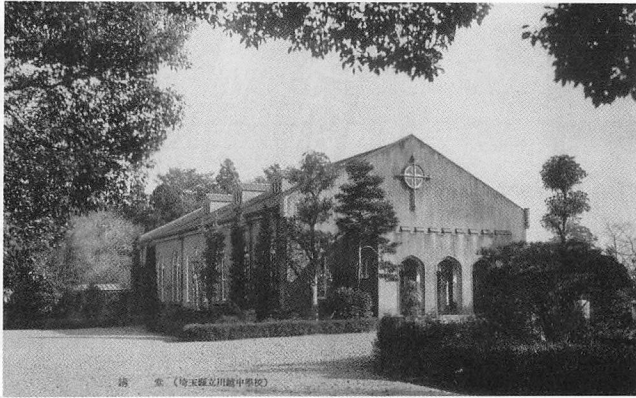
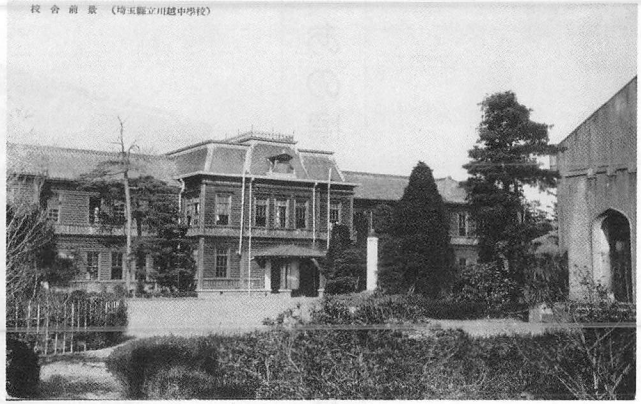


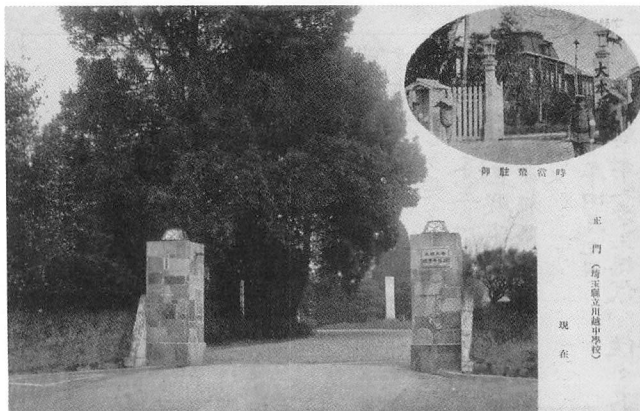
●版画：松平静江
(松平夫人。市報「川越」に毎号版画を掲載)

大正天皇・御駐輦記念絵葉書

大正天皇御駐輦三十周年記念

埼玉縣立川越中學校



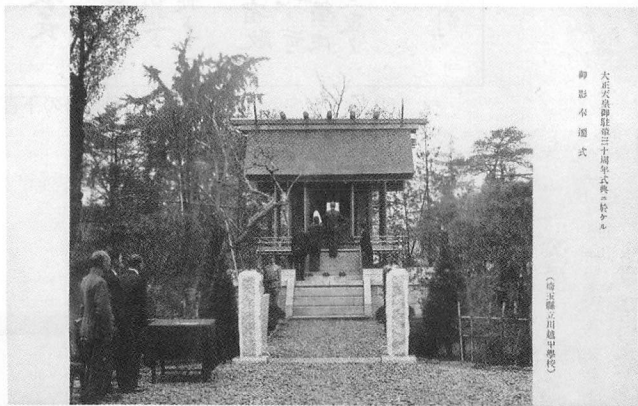


御駐營時

正門

(埼玉県立川越中学校)

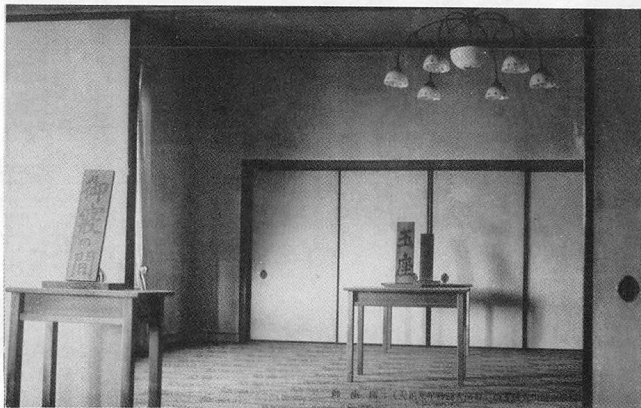
現在



大正天皇御駐營三十周年式典を以て
御影本遷式

(埼玉県立川越中学校)

我々の入学以前に作られたものだが
我々が入ったときもほとんどこのま
まだった。奉安殿、行在所など戦時
下の母校の姿を垣間見ることのでき
る貴重な写真だと思ふ。



宣誓

宣誓書

今回私達二百三名幸ニ多敷ノ志願者中ヨリ選バレテ本日茲ニ入学ヲ許可セラレマシタコトハ誠ニ光榮ノ至リテ御座イマス
 今日カラハ熾烈ナル戦時下ノ學徒トシテ校長先生始メ諸先生方ノ御教養ヲ固ク肝ニ銘ジ上級生諸兄ノ御指導ニ従ヒ一意専心心身ノ錬磨修養ト勤勞トニ努力精進シ
 光輝アル本校ノ名譽ヲ揚ゲルヤウ學徒トシテ本分ヲ充ウスル覺悟デ御座イマス
 入学書司ヲ受ケマシタ上ハ元氣一杯デ宿敵米英日本本土ノ一端ニ侵攻シテ來タ此ノ苛烈ナル大東亞戰爭ヲ勝ち抜クタメニ學徒トシテ生活ヲ根限り頑張ルコトヲ茲ニ堅ク宣誓シ致シマス

昭和二十年四月九日
 第一學年入學生總代 佐々木雄司

昭和20年4月9日入学。
 8月15日までは戦争中だった。

入学式總代宣誓書の下書き (佐々木・雄)



献金に対する感謝状 (東)



よい子の貯蓄が
 荒鷲を造る
 第一徴兵

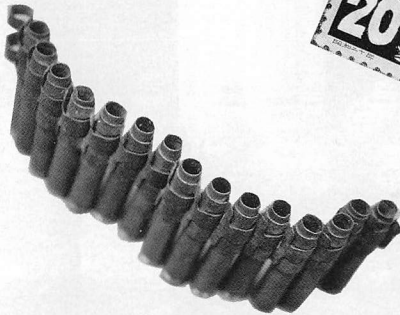
消炎鎮痛
 500円
 第一徴兵

「週刊少国民」の裏表紙 (沼田)

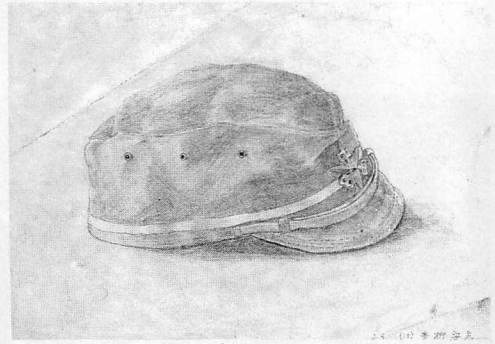


楠の木も見ていた……

大空を覆う
 ビヤ樽のようなグラマンの大群。
 後世の人には絶対に
 見てほしくないあの風景。
 楠の木もそう思っていただろう。
 (イラスト 松岡章次)



松岡の拾った葉莢



白線の戦闘帽 (S.21. 図工時間の作品・青柳)

将校型、斉藤恒の姉さんが
 大勢の帽子を作った時のモデル

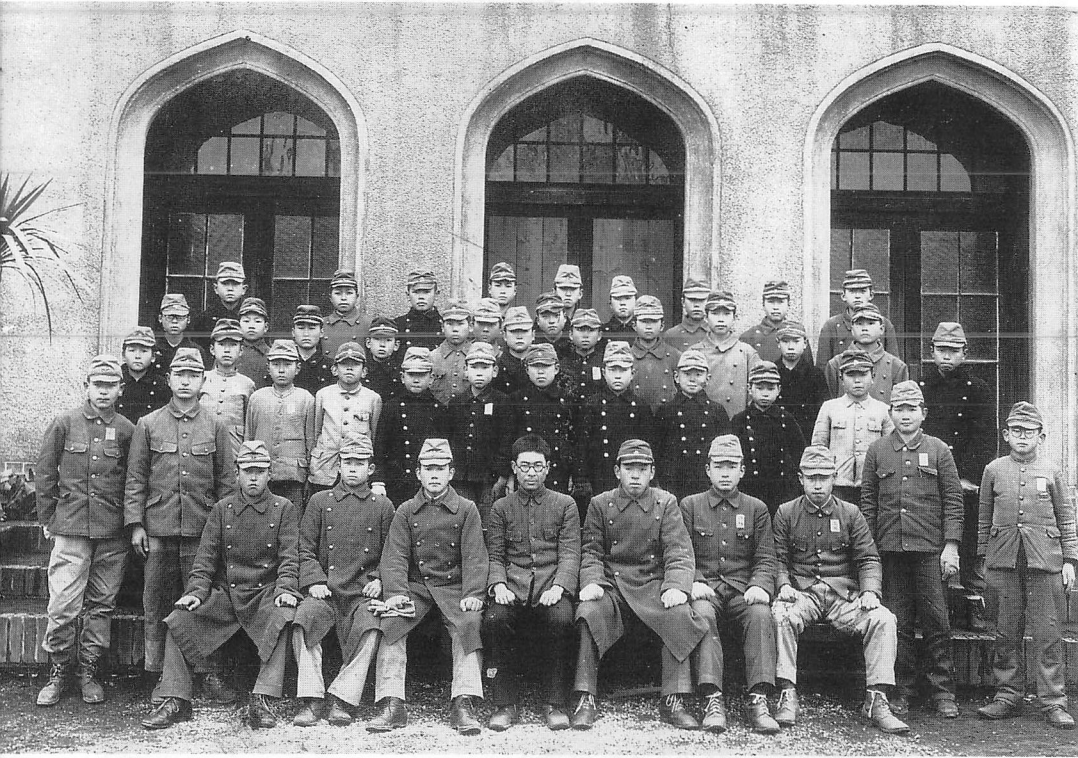


「週刊少国民」の表紙になった沼田
 (本文「芋小」の題名の由来)



戦時中の本 (復刻版・青柳)

戦争は終わったが、何もかも手探りだった。



(上)生物班先輩卒業記念写真

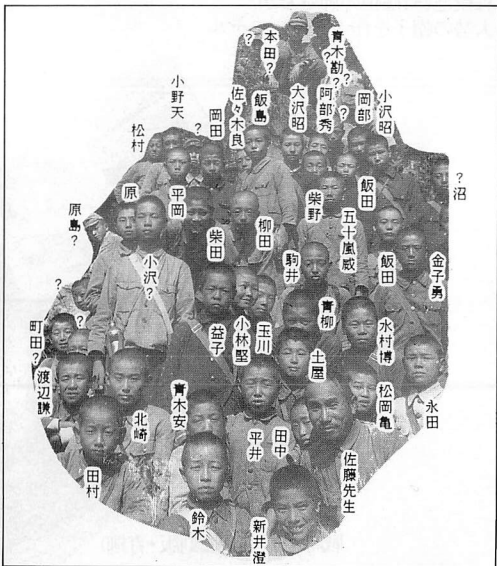
横田ゲジ先生の左は井関先輩。右は橋本トラさん。後列左→原、細淵、青柳
後2列左→4人目原島、右へ斎藤(忠)
新藤、宮崎(義)、2人おいて岡部、○○
富沢エックス大人、前2列左→3人目
岩澤(富)、大山、田村、○○、山本(スコ)、
加藤(康)、山田(和夫)、豊田

(S. 21.3 講堂前で)

(左)武蔵嵐山遠足

第1回、稲荷山は行軍だった。2回目の武蔵嵐山は初めての電車による遠足。
2年E組を中心に佐藤先生が持参のカメラとセルフタイマーで撮影。服装も
マチマチ、鞆も斜め掛けの時代。

(S. 21.10.10 嵐山の岩場で)



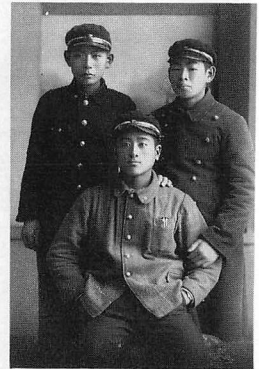
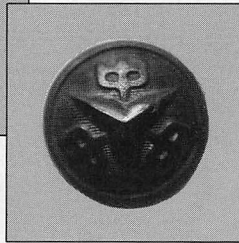
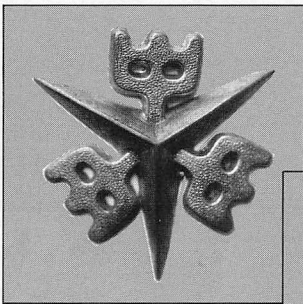
本田? 青木助? 小沢昭 岡部 小沢昭 沼
大沢昭 阿部秀 飯田 飯田 五十嵐 飯田 飯田 金子勇
飯島 柴野 柳田 駒井 青柳 土屋 水村博 松岡亀 水田
佐々木良 原 平岡 柴田 柳田 小林堅 玉川 田中 佐藤先生
小野天 松村 原 小沢? 益子 鈴木安 北崎 田村 鈴木
原島? 町田? 渡辺謙

ラヂオ班先輩卒業記念写真

(S.23.2 講堂前で)



那須先生→〇〇、大島、中沢 中右←村山、大山
後右←平岡(義)、水村。当時はラヂオ班と書いた。

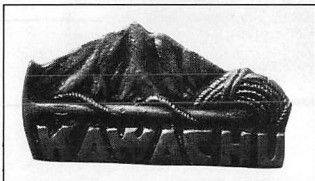


当時の服装

後左：小沢(孝)戦後学生制服
後右：橋本 戦前川中外套
前：金子(勇)戦時型学生服
当時はまだ払い下げ軍服や国民服改造など、カーキ色の生地が主流だった。

帽章、ボタンもやっと金属製のものができた。部のバッジ作りも盛んになった。

(S.22~23 提供・松村)



戦後初めて作られた山岳部のバッジ (S.22~23 提供・松村)

郷土班はエライ！

後に川越の周辺を掘りまくり「ここ掘れ川高」の名を高めた郷土班。S.21年という、モノのないころに、ガリ版刷りながら、もうこんなものを作っていた。この本自体が郷土の貴重な文化財、いや母校の埋没文化財？ となることを予知していたんだったら、本当にエライ!? (提供 松村)



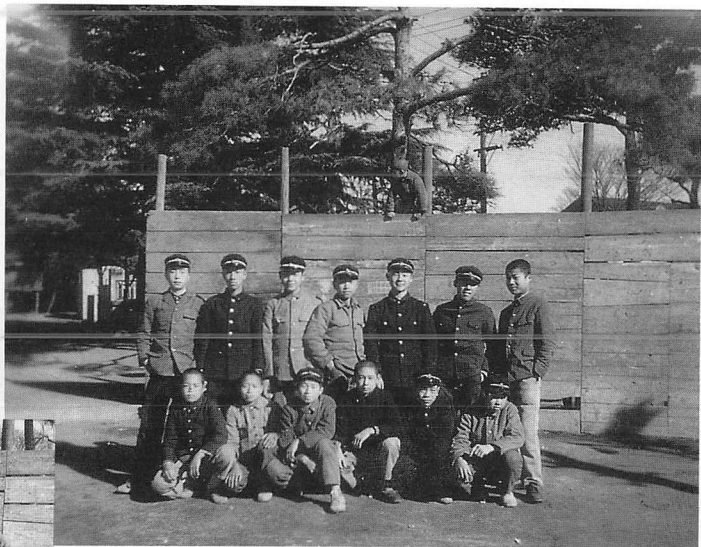
柔道部

山口、寺島テンカイ先生と。2～4列目の柔道着は、ほとんど同期生。市村、高梨、大沢(弘)、水村(博)、荒田、松村小峰、西川など……。柔、剣道部はS.20.11の禁止令により廃部となった。愛好者たちが柔道は武徳殿、剣道は間中道場などで非公式に稽古をした時期も……。お別れは盛大な“棒倒し”でエネルギーを発散させた。

映画部もエライ！

東宝撮影所見学。中央の美女はニューフェイスの女優さん。娘1人にムコ15人だが、当時としてはウラヤマシイ写真だ。左端メガネ、斎藤(守) 前左→阿部(新)、岡田、○○ ○○/後右2人目、新井(貞) (S.23.3.31)

“六三制、野球ばかりが強くなり”



ブルドッグス

後左→堀、須永、阿部(秀)、柴野、水村
竹内、松村。/前左→益子、松平、岡田(立)
斎藤(弘)、府瀬川、中沢(S.21? 一小で)
ブルドッグス・クリーンナップ
左→阿部(秀)、中沢、岡田(立)、松村
(S.21? 一小グラウンドで)



〈あの頃・豆事典〉

野球……戦後

「六三制、野球ばかりが強くなり」という川柳があった。教育方向の定まらぬ中で、野球以上には生徒の心を掴むほどの授業が行われていなかったことを示すものかもしれない。

しかし、終戦直後の我々の野球知識はゼロに等しかった。グラブやバットなどの野球用具も怪しげなものが多かったし、ルールも三角ベースに全国ルールがあったわけでもないから、いろいろローカルルールがあったのだろう。足の遅いランナーがなかなか進塁できずに、次のランナーが入って来てしまえば、アウトだなどとモメる風景もあった。

石川アツバク先生が何かの本を見ながら、「グラウンドに線を引き、その線を越えたら三塁打。三塁打の線を越えたら三塁打」なんてこわごわ講義した時代だから仕方がないだろう。ただ、そういう中にも松村、堀、須永などの「野球博士」がいて、その影響か、あつという間に野球知識は普及していった。

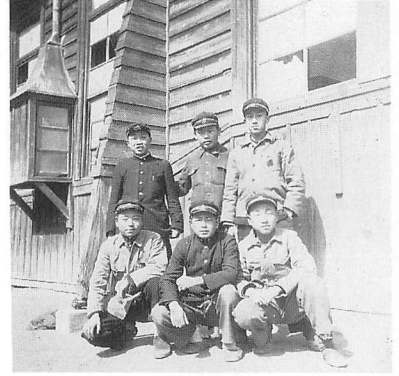
写真は、その松村、堀たち、当時の「野球博士」たちが作ったブルドッグスチームの勇姿。

バットやボールはもう正規のものを使っているが、腰の手ぬぐいに時代の香りが……。

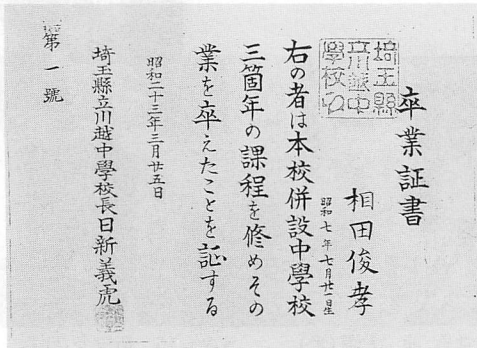
わけも分からず、ただ駆け抜けた中学時代だった。



S.22? 講堂前/手前から小林(洋)、市村、長谷川、君塚、村山(祥)、野口、西海、〇〇、吉川



(S.23.3)階段教室南



卒業証書

相田俊孝

昭和七年七月廿五日

右の者は本校併設中學校
三箇年の課程を修めその
業を卒業したことを証する

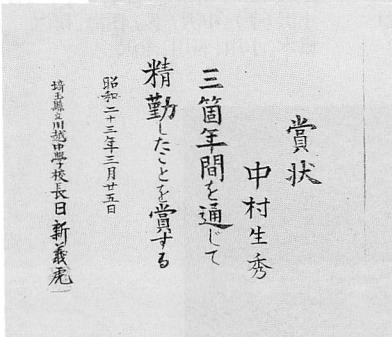
昭和二十三年三月廿五日

埼玉縣立川越中學校長日新義虎

第一號



講堂裏



賞状

中村生秀

三箇年間を通して

精勤したことを賞する

昭和二十三年三月廿五日

埼玉縣立川越中學校長日新義虎

併設中学の卒業証書
書(川中の校長が発行)



中庭新校舎東端

精勤賞

中・高通算6年間受賞者は
大澤米吉、斉藤 恒、岩澤富世

(右上)後左→岡田(時)、青柳、須永
前左→柳沢、木村、柴野

(中)左→中沢、府瀬川、青柳、木村、
柳沢、柴野、岡田(時)、須永
(下)左→堀、柳沢、青柳、柴野、須永
岡田、/後左→府瀬川、中沢

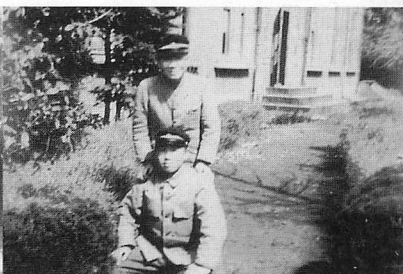
高校生活は、10学年という名で始まった。



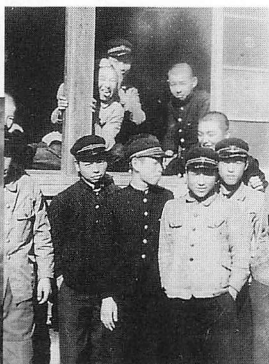
S.23.10 「高等学校併設中学」の看板の前で
左→柴野、柳沢、小川(司)、青柳、永沢、橋本



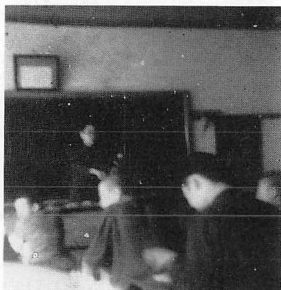
御岳山/左から 大川、松岡、内海、
浅見、藤田、正木、柳田



講堂裏/前 大澤(米)、
後 松岡(章)



S.23.10 新校舎/柱右：中村(喜)
小沢(孝)、中沢/下：西海、柳沢
橋本、小川、石川、永沢



授業隠し取り (左から 佐藤先生/野口先生/野村先生と大澤・米/望月先生)

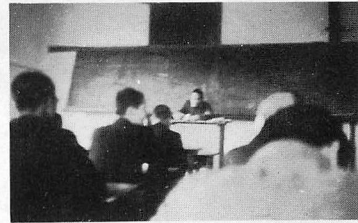
10年B組と先生たち。

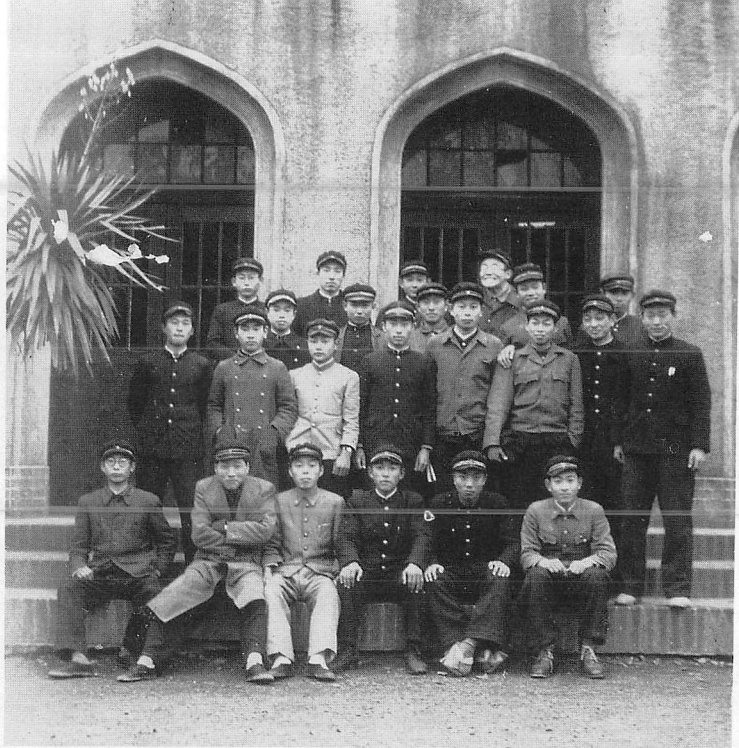


何となく撮ろうということになって、朝久野写真館に頼んだ。受験転出者送別写真らしい。

(S.24.3学期 玄関前植込みで)

前左→忍田、横田、掛原、佐藤、木村(冉)、日新本橋、木村(信)、石川、野口、望月、の諸先生
2列左→芳村先生、西川先生。田口、白井先生
新藤、配島、阿川、半田、君塚、市村、金子、大山原(泰)、柴崎、〇〇、原田先生 後列中央、背の高いのは佐々木(雄)。その他後列に武長、杉本、平岡、小峰、田中(修)、小鷹(邦彦)中島中段に岡田(立)、松村、綿貫、水口、豊田、土金細谷など





(S.24) 11C /前左→村山(英)、新藤、宮崎(敏)、松本、伊藤、田口
二列左→小林(洋)、田中(崇)、金子(武)、越?、小沢、橋本、駒井、西海
後列左→岸、畑、竹内、加畑、斎藤(弘)、岩澤、杉本、桃井、神田?



(S.23.10 講堂裏)
籠球部 左→峰岸、新井(治)、石田、比留間



陽だまりで；前左→中島、田口、岸(昌)
後左→半田、吉武

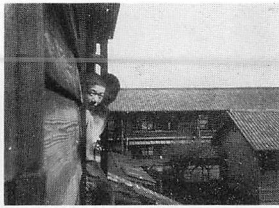
11年A組 記念写真。



(S.24.6.1.講堂前で)

- | | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 新井(途) | 新井(澄) | 鈴木(俊) | 大島 |
| 松岡 | 高橋(元) | 水野 | 森下 |
| 大川 | 氏家 | 高梨 | 鈴木(洋) |
| 菅木 | 菅間 | 山崎 | 中(義) |
| 齋藤(清) | 小野 | 木村 | |
| 内海 | 青柳 | 谷 | 高井 |
| 青木(勲) | 松本 | 阿部 | 佐藤(先生) |
| 鎌田 | 奥富 | 柳田 | |
| 大野(卷) | 水村(博) | 小畑 | 山田(和宏) |
| 正木(茂) | 伊藤(純) | 浅見 | 中村(生) |
| 府瀬川 | 石川 | 藤田 | |
| 根本 | 佐々木(良) | 清水(良) | |

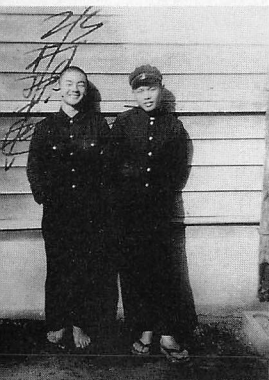
担任を含めて結構名物男が揃っている。



(年不詳)井戸端上の窓から新校舎、寄宿舎を望む。先生を見張っているのは松岡



(S.24頃?)
左→喜多、北野先生、豊田
松岡、牛窪、前→小島



(S.23)水村(哲)と青柳
なぜか水村はハダシ

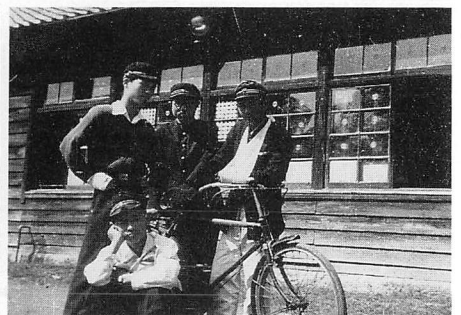
(24.3) 麻雀党の梁山泊? 学校近くの高橋(光)宅で
左→ 斎藤、青柳、高橋(光)
岡部(麻雀をしない人も大勢集まった。幻のラグビ一部創設計画もここから)



(S.24.3学期) 10B/ 前列左→佐々木
新藤、佐藤先生、松村、吉武 後列左
→大澤、岡田、斉木、飯田



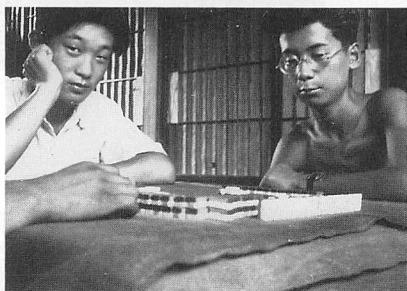
正門、川越高等学校の表札を
バックに、 左→加畑、宮崎(敏)、
田中(崇)、西川、金子(武)、森田(利)



(S.25春) 爆発事件直後の化学部。
ガラスが割れてベニヤ張り、正木
松岡(左右)は負傷。(前)双木(後)
浅見 (窓ガラスの川高シールは
ガラス盗難予防のため)



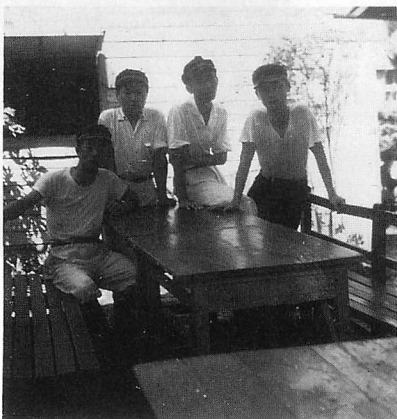
(S.23.夏)大川、松岡



(S.24.8.23)前田宅で/深井、前田



(S.24.8.8)入間川七夕の朝/青木(勲)宅前
青木、前田、深井、牧田(青柳)の徹マン組



図書部夏休み旅行

館山にて/前左→小林(堅)
佐々木先生、12・飯野、大江
五十嵐(威)、後左→長谷川
12・山口、根岸、堀、12・田中
(S.24.8.2)



(S.25.9) 赤間川で/斉木、駒井、橋本

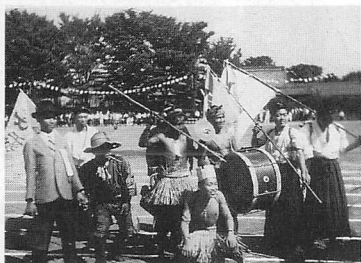
(S.23~24? .8)入間川七夕で氷屋を出して
大儲けの柳田、牧田、新井(宗)、松岡
他にも藤田、小野、青木なども参加?

いろいろな夏にも
出会った、高校時代。

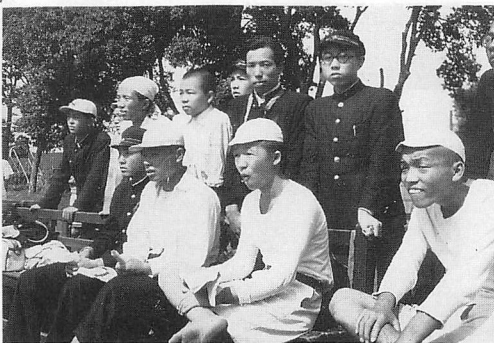
秋季大運動会。(S.25.10.7の写真を中心に)



仮装行列(山のかなた)
沼田、稲生、他
沼田、この一発で名物男に…



仮装行列(冒険ダン吉?)



3C応援席/左→有山、伊藤(明)、原、斉藤(恒)、
中沢、橘田、比留間、浅見、小熊、斎藤(守)



自転車遅乗り競技の職員(中央、本橋、その奥、掛原両先生)



5000メートル競走のスタート



ムカデ競走、職員チーム
(頭は佐藤先生)



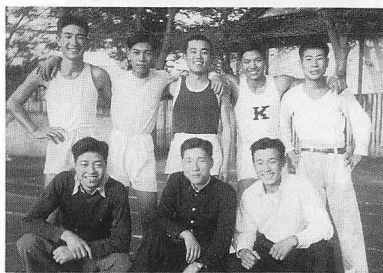
S.23頃、
一等賞のバッジ (提供・松村)



応援席/有山、原、斉藤(恒)、伊藤(明)、浅見



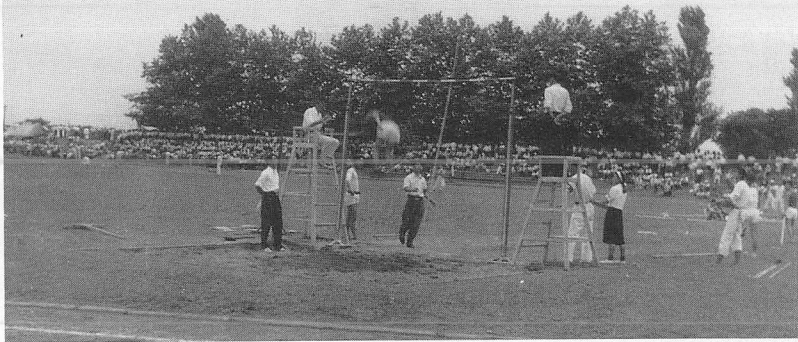
役員席の河盛先生。後方、雨天体操場の荒廃！



3C 800リレーのメンバーを中心に
後左→小野、神田、平岡、新井(澄)、川合
前左→沼田、新藤、西海

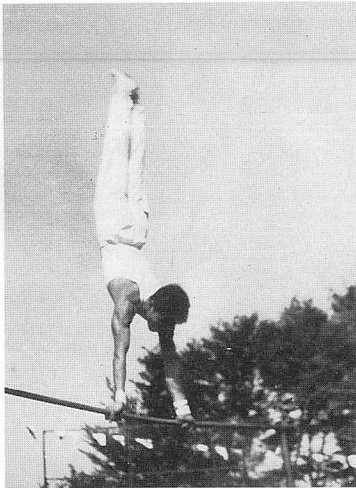


特別公開！
当時撞れたオケンの運動会。
彼女たちもテニスコートの
柵の外から我々の運動会を
応援してくれていたっけ。
(S.24.10.22 提供誰だ?)

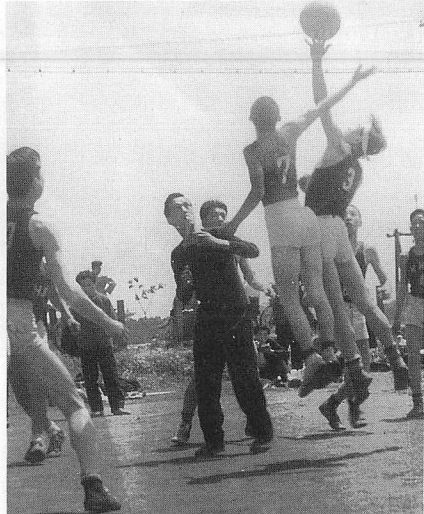


たまたま写真を
残してくれた
SPORTS
HERO!!

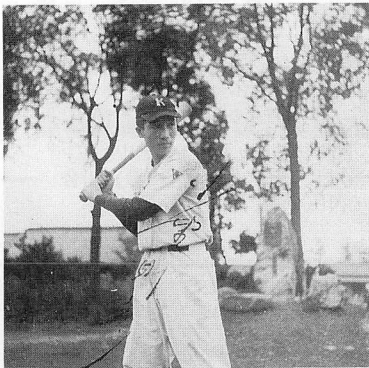
(S.25.7 水戸) 五十嵐(統)関東大会、棒高に優勝



国体選手、ターザンこと新井(澄)
この年にオリンピックがなかった
のは痛恨!



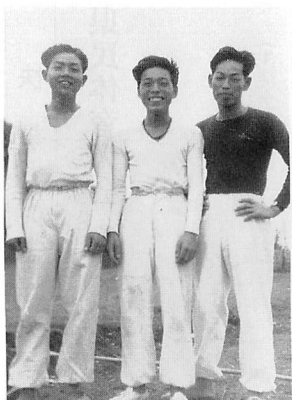
(S.25.6) バスケット部、26-25で浦高を下し
学徒総体に優勝



強打者小野。小野テンのテンは
天狗にあらず天才の天なり



陸上万能選手(本職は110ハードル)橋本の正面跳び



陸上競技部 五十嵐、宮崎、橋本



岡田・芹沢組日本一! (提供・岡田)



(S. 25. 12. 18)陸上競技部卒業記念
前2列目左→東、大川、小峯、橋本、松本先生、荒井校長
石川先生、平岡、中島、五十嵐、宮崎



(S. 23. 11)競技部部室の前で
前左2人目、宮崎、〇〇、五十嵐(竹村氏、右端、紫藤)
中央=木村、松本両先生、後左→平岡、橋本、右3人目、中島



排球部左→阿部、中田、西海、桃井

快拳！

県民体育大会 兼 国体予選総合優勝

(昭和二十五年秋)

(生徒会々報第二号より)

優勝旗

学校長 荒井 実

優勝旗が表徴するものそれは力だ。団体の凝結した力だ。

この旗に相貌があり、魂魄がこもる。それは正しく威風凛たる覇者の風貌だ。

その白銀にきらめく尖頭には満々たる剛志が見え、重く垂れた旌旗には枚を含んで命を待つ兵馬のおもかげがある。

見よ、濃紫と金色との配色の美を。

これを捧げ持つ者は感激を新にし、見る者をして奪起せしめずにおかない。

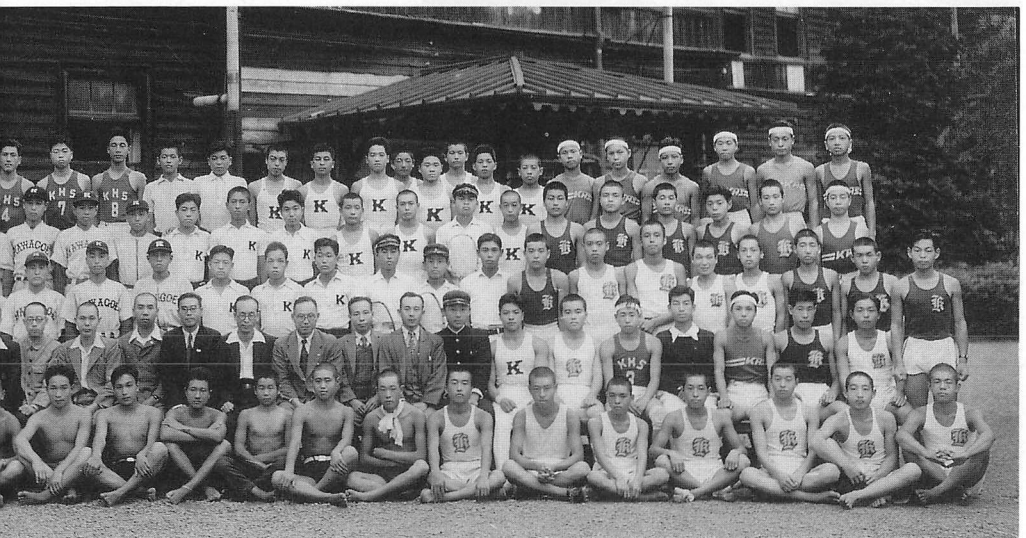
この秋我が校が県民体育大会において、総合優勝を勝ち得たのは、意外に似て実はそのではない。過ぐる夏の体育研究発表の際提示された様に、『基礎能力を基調とした本校の体育経営』方針が、全生徒の気分とマツチして、体育の全面的なレベルを向上させ得たことを思い合せればよいのである。優勝旗の獲得だけを目的とするならば、その手段となる鍛錬は苦痛であり、目的のためには手段を選ばなくなる。それは体育の邪道だ。わが校の場合はその様なものでなかつた

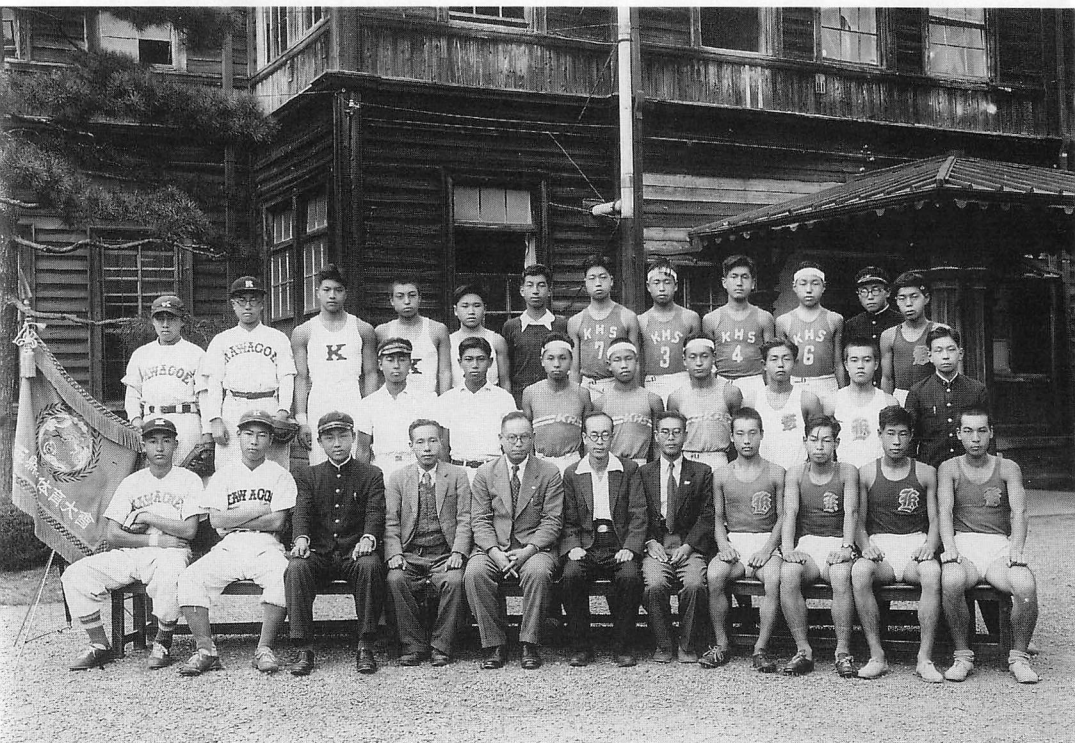


ところに誇と喜とがある。眞の優勝旗は、かくて、愛てわれわれは優勝旗そのものいかなる場合でもわれわれはという確信と襟度とを失いた

○ 学徒の勉学と運動とは両立れる。だが学徒本来のあり方は、こんな事を問題にする。勉学は学徒の特権だ。学徒の様に、知性の糧をわざわざ取り、それを敢てしないのるか、特権行使の努力をした失うならば悔を千歳に残すのわれわれはこの辺で『中学それは、興えられるのを待つる意欲を燃やすことである。拙な努力が必要だ。そして其は平々坦々たるものがあつてすることとなる。自分で校予モノを言うだ。

しかも眞理は平凡の中にあ





3年生の記念写真
(略号は競技種目)

| | | | | | | | | | | |
|-------------|------------------|--------------|--------------|------------------|------------------|------------------|-------------|------------------|-------------|-------------|
| 野 浅 井 | 野 谷 新 井 | 体 長 江 | 体 牧 田 | 庭 沼 田 | 籠 岡 田 | 籠 新 井 | 籠 石 田 | 籠 平 井 | 籠 杉 本 | 陸 宮 崎 |
| | (澄) | | | 庭 津 坂 | 庭 神 田 | 排 桃 井 | 排 西 海 | 陸 五 十 嵐 | 卓 平 岡 | 卓 奥 田 |
| 野 小 野 | 野 東 合 | 役 須 先生 | 那 須 先生 | 荒 井 校 長 | 石 川 先 生 | 本 橋 先 生 | 陸 大 川 | 陸 橋 本 | 陸 中 島 | 陸 小 峰 |



体育関係全員の記念写真

2列左5人目→山口、矢口、野口、近藤、掛原、石川、本橋、荒井、那須、松本各先生

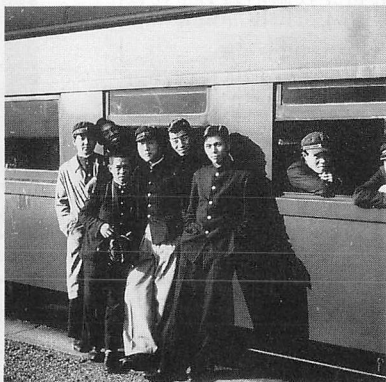
関西方面・修学旅行 (S.25.11.14~18 伊勢・奈良・京都)



(11.15) 猿沢池 (後方はオケンの宿舎、吉田屋)



(11.16) 清水寺/上↓峰岸
槽谷、市村、柳下



(11.14) 四日市駅で 原(泰)、中田、浅井
新藤、岡田、神田、○○

へあの頃・豆事典◇ 修学旅行
 高三の十一月、伊勢、奈良、京都へ修学旅行に行った。日光、鬼怒川組もあった。関西組は憧れのオケン、それにハンG(飯能女高)もいっしょで楽しかった。奈良、京都の旅館で酒を飲み、町へ繰り出した。と云っても学生服のお上りさんに何ができるというものでもなかった。祇園も歩くだけ。ワルと言っても、真面目で純情な学生さんでありました。金閣寺は七月に焼けた直後、京都駅は私達の帰京直後に焼失した。



(11.16) 清水の舞台/→青木、小野



(11.16) 知恩院下/左→柳沢、中(秀)
2号車のバスガイド、豊泉、塩野



(11.16) 京都東本願寺前、高田屋旅館



(11.15 夜)高田屋13号室にて3Cグループ
後左→加藤、比留間、小熊、浅見、小野、新藤
神田、青柳、柴田。前左→西海、沼田、平岡
伊藤(明)、川合(20秒静止で撮影!)



(11.15 夜)3Dグループ/後左→柳下
奥隅、斎藤、中(秀)、秀ちゃん、峰岸、市村
前左→高山、木村先生、宮崎、松本



嵐山、渡月橋前で
(11.16)

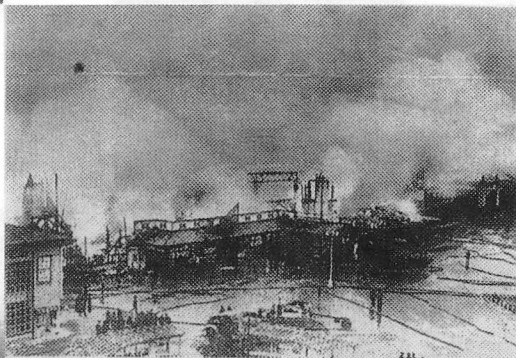
後列左→ 小野、牛窪、神田
岡田、新藤、青柳、伊藤、斉木
比留間、橋本、横田、渡辺(幹)
沼田、平岡、柴田、鈴木(俊)
渡辺、〇〇、竹内、加藤
浅見、市村、加藤、畑、大野
佐々木先生、谷、越、奥平
小熊、川合、斉藤、青木
木村先生、笛木、前田、有山
塩野、中、小川
前列(座っている)
左→高梨、西海、掛原先生
粕屋、丹沢、白井、大沢、鈴木
加畑、伊藤、浅井、竹沢、柳下
原(泰)、細谷、柳沢、豊泉

(11.16) 平安神宮で





(11.16) 渡月橋前/後左→新藤、比留間、西海、岡田
小野、青木、川合。前左→平岡、小熊、柴田、谷、神田



焼け落ちる京都駅
=昭和25年11月

当時の新聞から(提供・松岡)

(左)焼失前の京都駅(11.16 橋本写す)

修学旅行・日光組 (11.14~16)



大枚二千円を親に奮発させた関西旅行組にくらべれば、こっちは六百元に米五合、親孝行な日光組だった。奈良・京都はもう見飽きたとか、芭蕉の詫びを喜ばんとか、プライド上の理屈はつけてみても、こうしてみるとやっぱり生涯忘れられない仲良し同士のワンパク道中。
 日光は「もう結構」でそっちのけ、温泉ではお定まりの「較べ合い」やら、「フトン蒸し計画（未遂?）」やらの大ハシヤギ。ねむり猫も泣き龍も、心なしか寒さに震えている11月の日光で、ゴテゴテの陽明門にスキヤキの温かさを思い出し、一同元気に帰路についた。

(左)陽明門で
 前左→奥田、小泉先生、秋山
 中(義)、益子、西川先生
 白い襟は金子(武)
 (下)バスの前で
 左→奥田、松岡、大井、佐々木(良)



日光の宿屋で
 後左→佐久間、深井、大澤、鈴木
 大井。前左→金子(武)、松岡



そして、それぞれの卒業記念 (S.26.2~3月)



文芸部/後左→中村、平岡、齋藤(清)/前左→鈴木(俊)、木島先生、佐々木先生、根本



郷土部/後左→松本(英)、中島、畑、小林(洋)、加畑
前左→田中(崇)、金子(武)、深井



畑グループ/後左→長谷川、畑、森田(賢)
前左→原島、中(秀)、守谷

「おーい、楠の木よ」…元気でな。
(卒業式はS.26.3.6 だった)



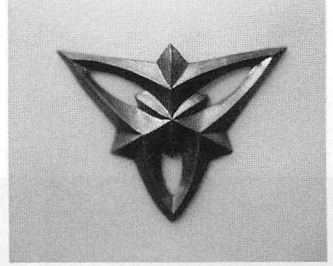
門柱の上の悪童ども
前左へ時計回りに/糟谷、松岡
村山、中沢、吉野



校門で 左→松岡、村山、長谷川、中沢、糟谷、吉野、東
内沼、〇〇、水村、青木。前→木島先生



書道部 前左→山崎、浅見、佐々木(良)、鈴木(洋)
大沢先生、清水、堀、峰岸、鈴木、半田



川高の帽章と金ボタン
(提供・松村)



3 C 前左→新井、平岡、中、小野、原、比留間
後左→秋山、斉藤、中村、小畑、青柳、加藤、神田(S. 25.10)



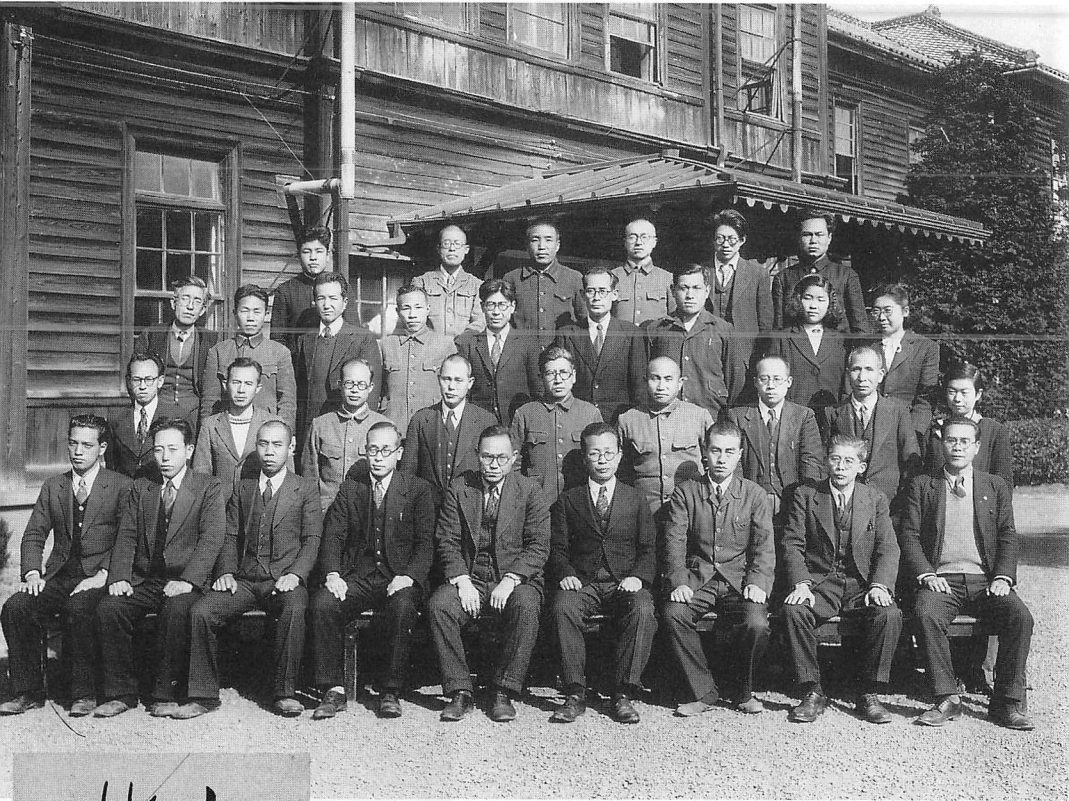
左→末広先生、宮崎、五十嵐、中

排球部

前左→3人目=小畑、遠藤
西海、石川先生、阿部(新)
桃井、吉田(景)。/右上=中田



卒業記念(職員)



(S.26.2.2)



荒井校長の色紙 (平岡 泰)
 「文質彬彬」アンシツヒンピンは論語
 「文質彬彬然後君子」(文と質が兼ね
 備わって初めて君子となる)より。

| | | |
|------------|---------|-------|
| (職員氏名・敬称略) | (事務中島?) | 石川正男 |
| (事務?) | 忍田豊作 | 西川喜四郎 |
| 北野茂夫 | (事務石田) | 野口邦雄 |
| 河盛銳治 | 山口利道 | 佐藤徳四郎 |
| 矢口 久平 | 正夫 | 木村信寿 |
| (仲 良雲) | 関根正司 | 横田稲吉 |
| ? | 那須大輔 | 近藤鉄城 |
| (事務?) | 田中正雄 | 野村尚良 |
| 岡田幹雄 | 松本利雄 | 本橋信治 |
| 木島平治郎 | 石川正明 | 掛原俊雄 |
| | 小泉 功 | 佐々木太郎 |
| | | 荒井 実 |
| | | 佐々木信治 |

卒業記念・3年A組

(担任・佐々木信治先生)

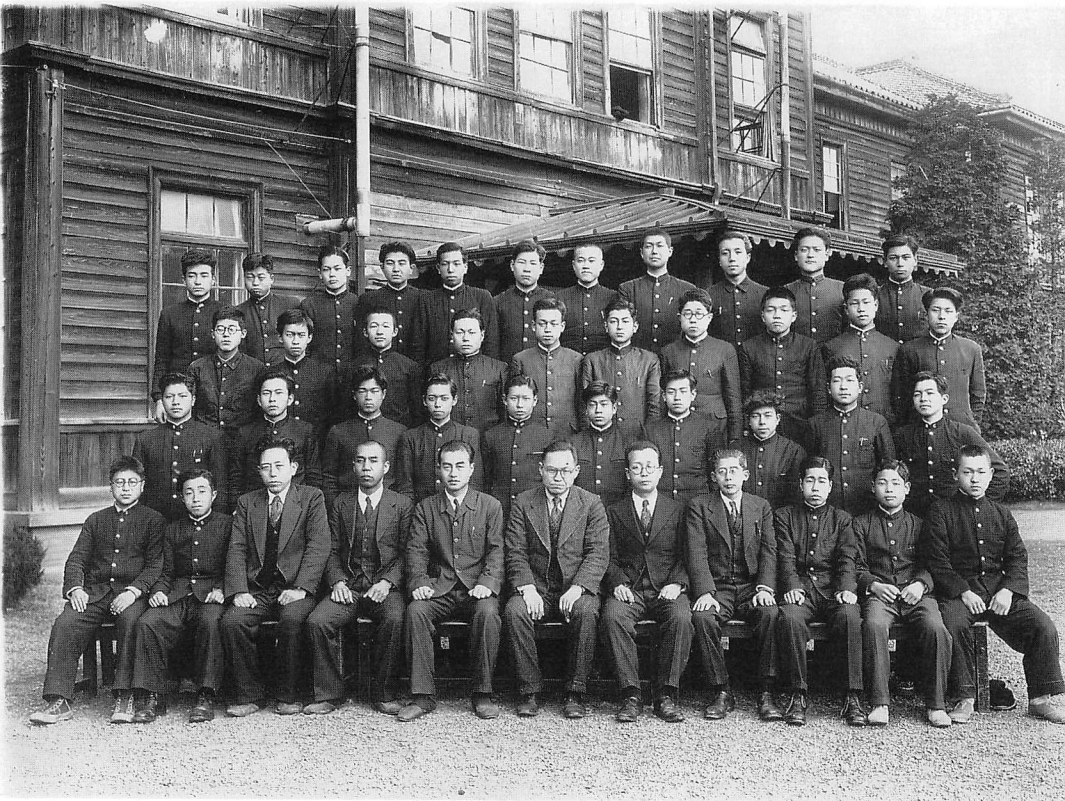


菅間

| | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| 田島 | 野口 | 塩入 | 松岡 |
| 稲生 | 新井(貞) | 藤田 | 正木(茂) |
| 島田(真) | 柳田 | 中義 | 双木 |
| 飯田 | 丸田 | 五十嵐(甫) | 西川先生 |
| | 森田(重) | 沢田 | ◎佐々木先生 |
| | 高橋(幸) | | |
| 関根 | 齋藤(守) | 大井 | 荒井校長 |
| 水野 | 島田(実) | 竹内(春) | |
| 中田 | 北崎 | | 掛原先生 |
| 中島(喜) | 五十嵐(威) | 加藤(康) | 佐々木先生 |
| 遠藤 | 大澤(米) | 江原 | 木村先生 |
| 金島 | 君塚 | 牧田 | 山田(和宏) |
| | 松村(久) | 西 | 鈴木(洋) |

卒業記念・3年C組

(担任・木村信寿先生)

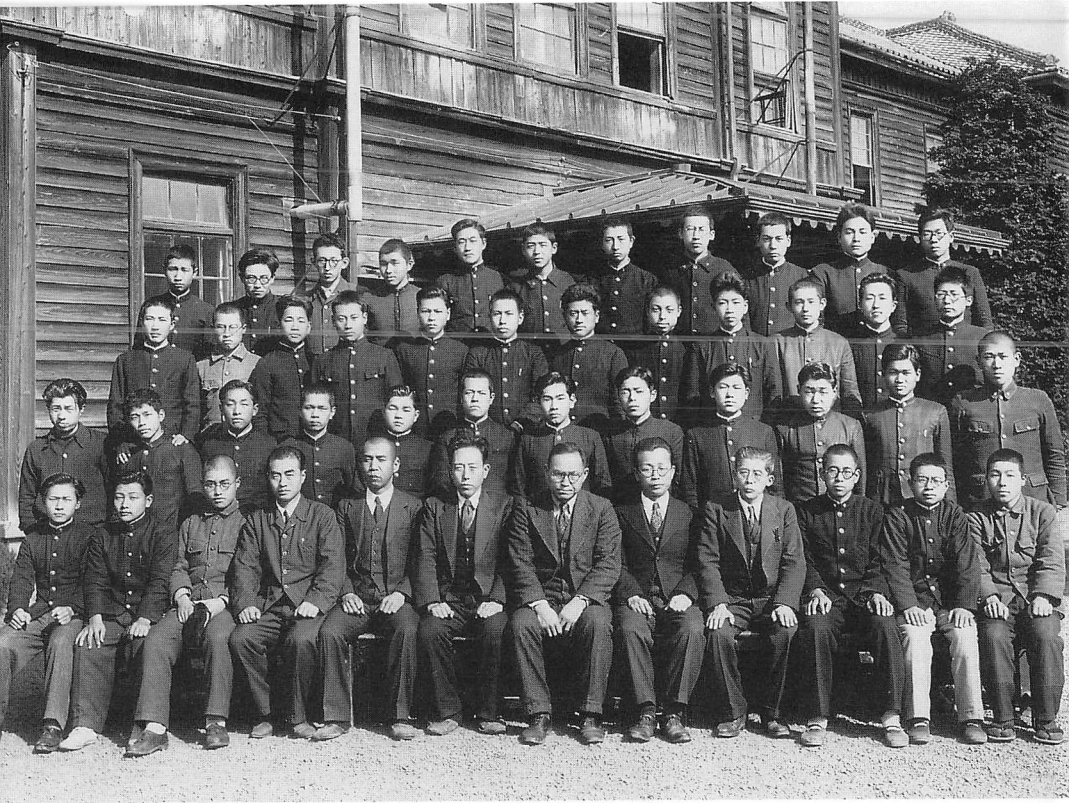


- | | | | | | | | | | | |
|----|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 小野 | 沼田 | 青柳 | 原 | 比留間 | 川合 | 平岡(泰) | 柴田 | 伊藤(明) | 加藤(健) | 神田 |
| | 山崎 | 小畑 | 橋田 | 齊藤(恒) | 有山 | 廣沢 | 有山 | 浅見 | 小熊 | 大島 |
| | 新井(澄) | 新井(宗) | 丹沢 | 粕屋 | 加畑 | 白井 | 渡辺(謙) | 安田 | 高梨 | 松本 |
| | 中村(喜) | 佐々木(良) | 佐々木先生 | 掛原先生 | ◎木村先生 | 荒井校長 | 西川先生 | 佐々木先生 | 鈴木(美) | 秋山 |

欠席=新藤、西海 休学=内海

卒業記念・3年D組

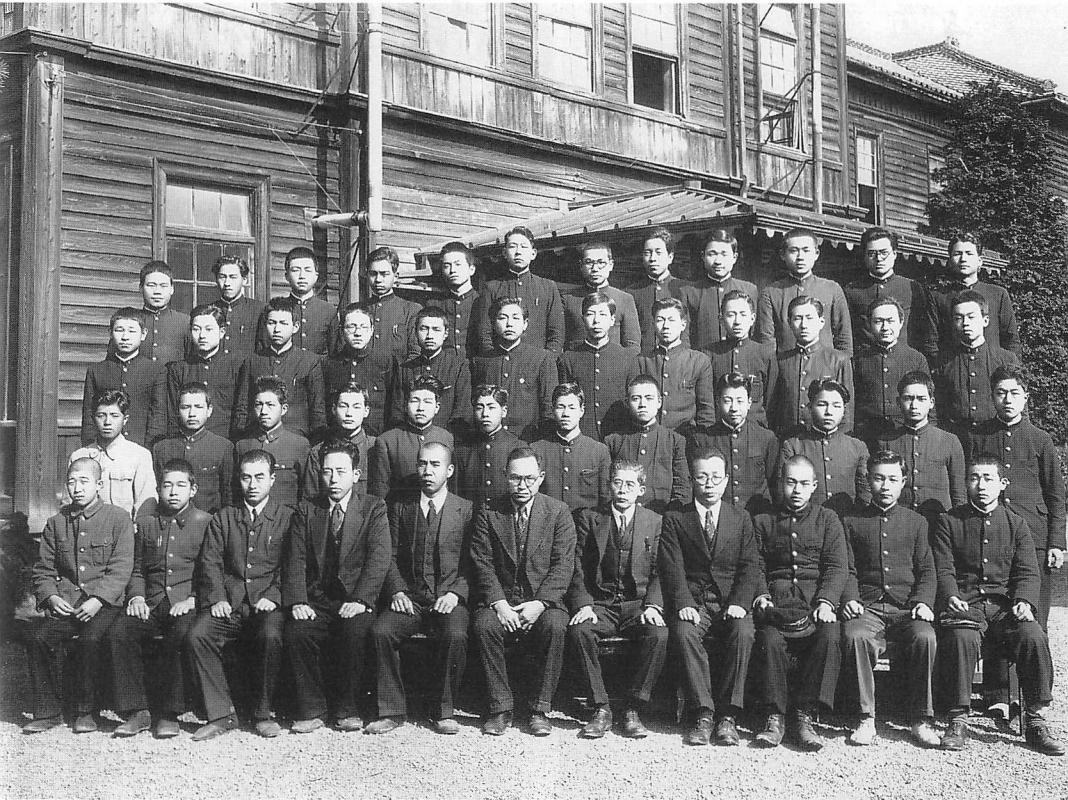
(担任・佐々木太郎先生)



| | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 川崎 | 杉本 | 齋藤(賢) | 奥富 | 浦部 | 森岡 | 松本 | 小峰 | 宮崎 | 齋藤(義) | 村山(英) | 平岡(義) | 高橋(敏) |
| 朝久野 | 土金 | 田村 | 大川 | 峰岸 | 阿部(秀) | 金子(男) | 中(秀) | 奥隅 | 高山 | 村山(英) | 角谷 | 小林(洋) |
| 田中(修) | 西川 | 松本(英) | 豊田 | 森田(利) | 益子 | 田中(崇) | 山下 | 奥隅 | 齋藤(弘) | 平井 | 村山(利) | 挂原先生 |
| | 金子(武) | 清水 | 木村先生 | 荒井校長 | ◎佐々木先生 | 佐々木先生 | 西川先生 | 佐々木先生 | 阿部(新) | 山下 | 西川先生 | 木村先生 |

卒業記念・3年E組

(担任・西川喜四郎先生)



| | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------|--------|-------|--------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 水村 | 本田 | 堀 | 長島 | 氏家 | 奥田 | 佐久間 | 府瀬川 | 糟谷 | 東 | 相田 | 大野(春) |
| 関口 | 内沼 | 中沢 | 武田 | 三友 | 五十嵐(統) | 薮島 | 一色 | 田口 | 岩澤(富) | 高橋(信) | 吉野 |
| 柴崎(明) | 長谷川 | 青木(安) | 小鷹(邦彦) | 小林(堅) | 半田 | 守谷 | 荻野 | 吉田 | 加藤(敏) | 石川 | 武長 |
| 永島 | 大山 | 木村先生 | 佐々木先生 | 掛原先生 | | | ◎西川先生 | 佐々木先生 | 諸橋 | 村山(祥) | 岸(智) |
| | | | | | | | 荒井校長 | | | | |

夢
大器
入
向
利
奇

相田に贈られた寄せ書き
(右上より時計回りに読むと何やら
意味ありげに思えるが……?)

沙入
Takeo
小峰忠夫

志
新

人
花
幸
あ

望

東京都北多摩郡番米町前

佐久間綾雄

一日の生活の中に
五言をとりつれらるゝ下
御多幸と祈ります

末弘有子

夢

人生を達し水戸

望玉

特選新選合部三徳倉村野良

田口陽吉

川崎市野町一ノ二

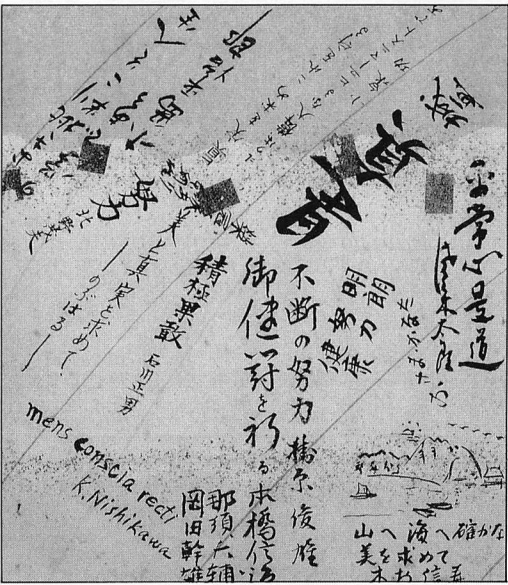
青木安雄

信念を持つて!

成功を祈る

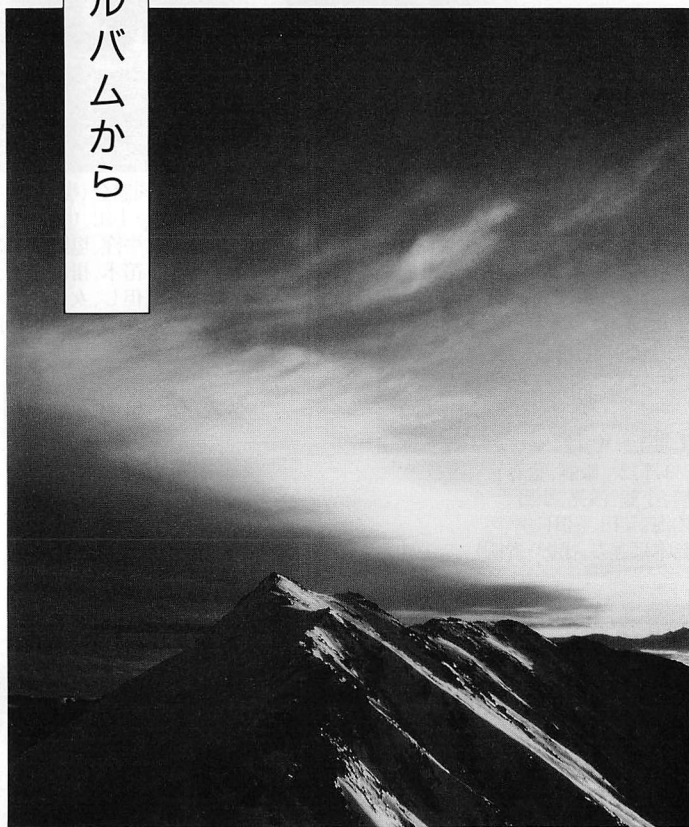
崎玉川越市北沢町多丸八

一色勉



先生方のサイン色紙(平岡 泰)

還暦までのアルバムから



悪童たちは大学へ、社会へと飛び出した。
……しかし、社会はまだ戦後の混乱を引きずってもいたし、いろいろ厳しかった。
みなそれぞれの青春に多忙だったと見えて、川高同窓生達との集団写真は少ない。

●写真・柴崎建治



3 B同窓会(掛原先生を囲んで)
 後左→小川、中村、畑、根本、竹内、青木
 柳沢、牛窪、塩野、豊泉。前左→越、
 大沢、笛木、掛原先生、〇〇、橋本、市村
 柳下(但し、女性は除く)
 (S.30前後? 川越にて)

みんな、まだ「充分に」若かった。



3 C同窓会(S.29.1.2 飯能、金春)
 後左→加藤、山崎、小熊、浅見、小野
 前左→比留間、内海、柴田、沼田
 (白井、斎藤忠、鈴木は遅参。撮影・青柳)



(S.26.5 池袋) 合格間もない立教勢
 後→〇〇、石田、西海、橋本、竹内



(S.26.5) 稲荷山公園/後左→峰岸、橋本
 西海、〇〇/前右、石田

川越がいちばん遠く見えた時代。
でも、結構やっていましたネ



むらさき会；宮崎夫妻、結婚祝い (S.33)
後左→大澤(米)、益子、斎藤(賢)、中村、高橋(幸)
松平、畑/前左→塩入、山崎、宮崎夫妻、田中(崇)



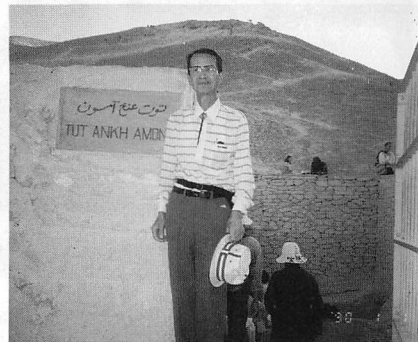
(S.26.5 頃) 卒業後、高麗川に内海を見舞う。/左→松岡、内海、藤田、双木



むらさき会；大澤(米)夫妻結婚祝い (S.36)
後左→田中、畑、宮崎、根本、斎藤(賢)、小島、中村
柳田、益子



(H.1.4.3 武蔵野GC) 川中20会ゴルフ
後左→山田、石田、原島、沼田、内海、加藤(健)、新井(宗)、糟谷
加藤(博)、高橋、奥田、小島、宇都野、丸田(邦)
前左→小熊、浅見、小沢、中村、森田、深井、新井(治)



(H.2.1.1) 元旦早々、エジプト、ツタンカーメンの墓を見学する大野(春)

おい、「還暦」って何だ!?
還暦無用の元気者たち



田村の篆刻作品「狂篇酔句」「五濫皆空」



正統江戸流“かっぱれ”を踊る
正兵衛こと田村(北海道)



(H.4.9.20)「みちのく五人旅」塩原篇
左→山崎、柳田、益子、大澤、宮崎
(大澤ヨネさんも元気だった)



(H.5.7.20 神田) 蓮馨寺読書会、
「小熊の還暦・定年を肴に飲む?会」
後左→丸田(邦)、斎藤(弘)、宇都野
前左→青柳、松村、長島、小熊、益子



(H.5.9.16 武蔵野GC)川中20会ゴルフ
後左→小沢、高橋(幸)、森田(重)、柳沢、小島、斎藤(清)、加藤(健)
前左→中村、新井(治)、山田、浅見、益子、加藤(博)、青木、原島、
沼田、竹沢、宮崎。(前列の2人以外、みんな帽子を被って
いますが、全員アタマが薄いわけではありません)

還暦とは、60年のキャリアを
持った青年になることデアル。
……そうだよな! クマさん?

文集制作のアルバムから



● 型染・大野良三

(H. 3.10.27. 川越プリンスホテル)



この会の席上、金島から
文集制作の動議が出され、
幹事、及び出席者の同意
が得られた。
(松村、タッチの差で遅刻)



| | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|----|
| 齋藤清 | 松岡 | 佐々木雄 | 内海 | 新井滄 | 吉野 | 西川 | 新井治 | 遠藤 | 朝久野 | 金島 | 大沢弘 | 森田(重) | 菅間 |
| 伊藤(純) | 竹沢 | 青柳 | 福田 | 柳田 | 平岡(泰) | 小沼 | 宮崎(敏) | 沼田 | 君塚 | 加藤(康) | 西 | 齊藤(恒) | 長島 |
| 堀 | 中(秀) | 森田(利) | 村山(英) | 柴崎 | 新井(貞) | 守谷 | 原島 | 半田 | 岩澤(富) | 水口 | 大澤(米) | 石井 | 田島 |
| 青木 | 小林(洋) | 山下 | 牧田 | 府瀬川 | 糟谷 | 加藤(健) | 丸田(謙) | 山田(和宏) | 吉田 | 村山(利) | 橋本 | 深井 | 稲生 |
| 金子(武) | 松本(英) | | | 豊泉 | 奥田 | 丸田(邦) | | | 赤田 | 川合 | | 小熊 | |

佐々木(雄)教授退官記念

(H.4.2.21. 東大 山上会館)



宇都野 金子
 中村 柳田
 小熊 野口
 沼田 村山
 根岸 青柳
 桃井
 加藤 丸田 小林(洋)
 松村 大澤(米)
 西川 松村
 槽谷
 小沢 槽谷
 福田 佐々木
 水口
 青木 中(秀)長島
 武長 宮崎 朝久野
 益子

この会の本音は、滅多に入れない「東大」を見ようという野次馬根性だったかも知れないが、ともかくも我等が東大教授の退官の集いは盛大だった。そして、この席上で文集が正式にスタートした。



挨拶する佐々木「教授」
 左→槽谷、中、中村、大澤(米)

文集刊行発起人新年会

平成4年

(H.5.1.23 川越市アトレ7F「華冠」にて)



川越高校第3回卒業生還暦記念文集作成について (S20年～S26年中・川高在校の同級生諸兄へ)

終戦を目前にした昭和20年4月、憧れの川越中学に入学を果たした
紅顔の少年たち、その後疎開や進学などの事情で転入・転出校した仲間
たち全員が、来年の3月までに満60歳、還暦を迎えることとなります。

昨年川越での同期会で、還暦記念の文集を作ろうとの話が持ち上がり
有志が集まって発起人の名前を挙げ、その中から編集準備委員を選んで
会合を重ねた結果、いよいよ計画が具体化する運びとなりました。

編集準備委員の中には、出版、印刷関係の専門家もあり、折角作るの
なら出来るだけ立派なものにしたい、それぞれの手許にある当時の資料
なども載せて、戦争末期から戦後混乱期の一面を写し出す記録になれば
などと、夢は大きく膨らんでいます。

つきましては、転校（転入・転出）の方も含む同期生全員の皆さんか
ら原稿をお寄せ頂くとともに、不況のさなかに恐縮ではありますが、文
集作成経費に関し、格段のご支援をよろしくお願いしたいと思います。

平成4年12月吉日

発起人代表
中村生秀

追伸)この夏、2年上の先輩が「速い飛行機翼」という素晴らしい文集
を作り、朝日新聞、読売新聞などにも紹介されました。僅か2年で私た
ちは時代に対するスタンスがかなり違いますが、私たちも私たちなり
の特徴を出した良い文集を作ろうではありませんか。

後左→松岡、山崎、新井、松村、正木、江原、
大沢、朝久野、中村、柴崎、水口、糟谷、加藤、
沼田、清水、小熊、宇都野、大澤、桃井、平岡、
前左→青木、菅間、斉藤、西川、宮崎、新井、
水村、奥田、堀、青柳、山田

寄稿呼びかけ状
(起草・菅間)

編集会議

編集会議は、平成4年の春から川越駅前アトレ地下・(株)川越都市開発会議室、市駅前・喫茶ラブ、菅原町・尾張屋等で2か月に3回くらいの割合で集まった。分担テーマごとに分科会も行われた。

(H.5.1.23) 株川越都市開発会議室にて第三回目の編集会議。新年会当日のため珍しい顔も見える(撮影・青柳)

左後→新藤、大澤、清水、水口、村山(利) 桃井、奥田、小熊、平岡、宮崎、/前左→中村、斉藤、菅間、松岡、堀、松村

(H.5.4.4) 浅草桜橋上で、蓮馨寺読書会の花見会でも、いろいろなデータが提供された。

左→斎藤、長島、丸田、小熊、益子、青柳、宇都野

(H.5.6.22) 新富町の酒場で飛び入りの丸田(謙)

文集座談会終了後

(H.5.7.3. 川越市「登茂恵」にて)

後左→堀、水口、正木、清水、平岡、西川 青柳、小野、宮崎、 前左→大野、松岡 沼田、小熊、金島、斉藤、朝久野(前)

(青木、阿部、内海、新藤、菅間、長島 中村、東、山田は撮影前に帰宅)



写真説明中氏名は敬称抜き、姓のみとした。同姓の場合は、カッコ内に区別のできる最初の文字までを記入した。

現在氏名の変った人の在学中の写真は当時の氏名で表示した。

氏名には最大の注意を払ったが、写真不鮮明、記憶違い(本人変貌?)等により間違いがあったらご容赦願いたい。

集合写真中で、氏名の分からない人や他学年の人は〇〇と表示したところもある。

先生には親愛の情をこめて、一部アダ名で表記した場合もあるがご容赦ください。

左→とあるのは「向かって左から」の意である。

撮影者、提供者名は資料関係のみにとどめた。

記念誌の発刊を祝う

川越高等学校同窓会長

渋谷 健

川越高校第三回卒業生の皆様が、今回、還暦を機に記念誌を刊行されます由、心よりのお慶びを申し上げます。その文集中には、川中・川高時代の想い出も多く含まれているとの事、青春時代をあの忌わしい戦争の混乱期に終始し、現代高校生とは比較にならない多くの苦難を乗り越えてこられたご苦勞を思う時、同時期に川中に学んだ私にとりましても、往時を偲び感無量なものを覚えます。

さて、母校も一九九九年には創立百周年を迎えます。その準備の為の委員会がこの程結成され、私達同窓会がその中核として参画することになり、連帯意識を一段と強める必要性を痛感いたしました。時恰も、三回生の絆の強さを示す成果の刊行を眼の当りにいたし、嬉しさは勿論、確信が湧き、勇気百倍いたしました。また、この記念誌には、今日の飽食の時代に満ち足りた生活をしている後輩（子供達）への教訓やメッセージもあり、戦後の混乱の中から立ち上がり、昨今の繁栄に至る原動力ともなった昭和一桁の生きざまも含まれている模様、きつと多くの同窓生諸氏の共感を得られることと信じます。同時に、母校百周年記念誌の一翼を担う貴重な資料としても活用させていただきたく思います。

更に、懐かしい恩師のエピソード等も多く述べられて居るようですが、当時の先生方の多くが、夫々特

徴を持ち、個性豊かでしかも熱血漢、忘れられない存在であります。これらの名物先生の教えを受けた私達世代は、何と幸せな事かと思えます。特に、教職について、最後を母校の校長として勤務した私にとって、自らの反省を含め、恩師の偉大さを改めて再確認させていただいた次第です。

学窓を巣立って四十年余、社会の各方面に活躍されて居られる皆様方のご多幸を祈り、併せて、この刊行にお骨折りいただいたご関係の各位に敬意を表し、母校同窓会への一層のご支援をお願いいたし、刊行のご祝辞に代えさせていただきます。

発刊を祝して

川越高等学校長

鈴木良栄

川越高等学校第三回卒業生の還暦を記念して文集が刊行されますことをお喜び申し上げます。

川越高校も皆様が卒業されて以来四十年余の年月を経過して大きく変わってきました。

校舎は総て鉄筋化されて往時の面影は全く残っておりません。生徒数も一学年十クラスで生徒総数一三七〇名を数えるようになりました。変わらないのは校門正面の楠の木で一回り大きくなり、先日、測定したところ目どおり四・三五メートルありました。

私も、学校は異なりますが学童疎開を経験し、昭和二十一年に中学校に入学、併設中学校、新制高等学

校と六年間在学した旧制最後の生徒です。

当時を振り返ってみると、戦後の混乱期で食糧難の中、よく生き延びてきたものだと思います。中学生になったといっても、学生帽もなく、頭には戦闘帽、足にはぶかぶかの軍靴、背中には背囊という出で立ちで満員電車のステップにぶら下がって通学していました。教科書も時折新聞紙のようなものが配布され、自分で折って糸でかがって使ったことも記憶にあると思います。

昼はジャムをつけたコッペパン、学校帰りに腹がすくと、駅前露店でふかしイモを買って空腹をみたしました。最も悩まされたのは、連夜の時を選ばぬ停電で、一夜漬けを予定していた試験前などはローソクの明かりで悪戦苦闘した覚えがあります。

そんな時代であっても若さという貴重な財産と悪友に恵まれ青春を十二分に楽しみました。

かつての悪友八人、高校卒業以来四十年、毎年正月元旦に顔を合わせます。紅顔の美少年も頭は薄くなり、話題も健康のことになりがちですが、懐かしき良き時代を振り返る時には口角泡を飛ばすこともあります。

貧しい時代であっても、青春は懐かしいものだと思います。

終わりに、諸兄のますますのご健康を祈念いたしましたしてお祝いのことばといたします。

今、ここに、川越高校第三期生還暦の記念文集『おーい、楠の木よ』が完成した。

私たちの出会いは昭和二十年四月（一九四五年）に、埼玉県立川越中学校に入学したときである。大東亜戦争の末期ともいふべき、三月十日の東京大空襲の後、日夜の空襲を警戒しながらも、川越近辺の市町村から一々数名の選ばれた紅顔の少年達が入学してきて、それに疎開などによる転校生が加わり、学友は二百名余となった。以来、終戦を告げる八月十五日のラジオ放送を直接聞く体験をはさんで、学制改革による埼玉県立川越高等学校を昭和二十六年三月に卒業するまでの六年間、学生生活を共にした。この間の体験は、空襲、軍事教練、勤労働員、広島・長崎原爆投下、マッカーサー進駐、無条件降伏調印、新憲法、新円切替えなど、戦前・戦後の価値観の一変した社会の動きをまともに反映したものであった。しかし、基本的には、平和と、民主主義・自由主義の洗礼を受けて、戦後の復興を直接見聞し、体験してきたものである。

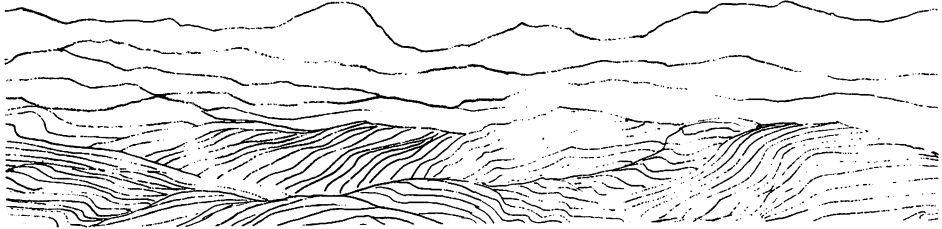
川越高校を卒業してからの進路は多方面にわたり、数年に一度位の同窓有志の集りもたれていたものの、平成四年から五年にかけて、かつての少年たちも還暦を迎えることになり、誰いうともなく、記念文集を作ろうということになった。そして、出版・印刷関係に進んだ専門家を含めて編集委員を選出し、発起人を結集して平成四年十二月吉日に、同期生諸君に表題の記念文集の作成を呼びかけた。同期生の反応も十分であり、編集委員を中心に、同期生諸君の物心両面の支援と協力により、予想をはるかに上廻る原稿、資料が集まり、編集委員はその整理に忙

殺されたようである。しかし、一年余りで完成にこぎつけることができたことは、ひとえに、献身的な編集委員の努力によるもので感謝に耐えない次第である。

私達の二年上の先輩（川越高校第一回生）が平成四年八月に『遠い飛行機雲』という素晴らしい文集を作り、朝日・読売新聞などに紹介され、反響を呼んだ。僅か二年で、私達とは時代に対するスタンスがかなり違うのは、それだけ世の中の変化が激しかったからだろう。

本書の表題の『おーい、楠の木よ』というのは六年間を過ごした木造校舎も、その頃は立派に思えた講堂も、すでに無く、五階建の鉄筋校舎や図書館に変貌しているの、学校の正門脇に、昔ながらに、大きく繁茂している二本の楠（樟）に、私達の青春の思いを寄せたものである。

私達は、昭和七年（一九三二年）四月から昭和八年（一九三三年）三月までに生まれた者を中心とする、いわゆる昭和一ケタ人間であり、昭和・平成の激動の社会と生存を共にし、高度成長下の日本国において、働き蜂で、縁の下の力持ち的な役割を背負いながら、今では、急速な高齢化社会を迎えて、先行き不透明な平成不況下に、数年後の二十一世紀を展望しつつある世代にある。本書は一読していただければわかるように、このような貴重な体験を、大勢の者が発表した同窓史であり、平和の大切さを物語る記録である。これを完成させた編集委員、発起人、同期生諸君と共に本書の発刊を喜びたい。



戦中戦後ひとつ校舎に六年間
川越高校第三期生 還暦の文集

おいしい、楠の木よ 目次

口絵 (アルバム)

記念誌の発刊を祝う 川越高校同窓会長 …………… 渋谷 健

発刊を祝して 川越高等学校長 …………… 鈴木良栄

まえがき 発起人代表 …………… 中村生秀

川越高校校歌・応援歌

第一部 特集・I

●大澤ヨネさんを悼む

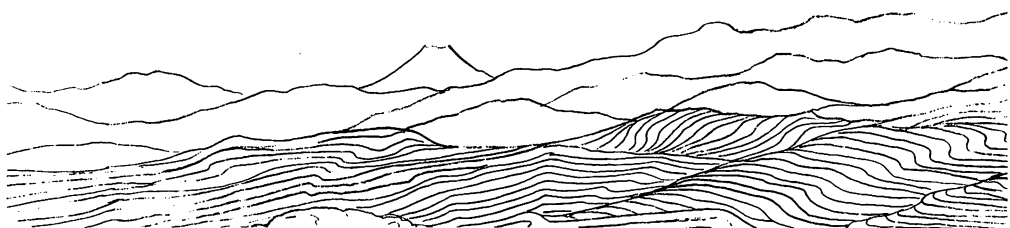
「むらさき会」今昔 (遺稿) …………… 故・大澤米吉 24

大澤米吉さんを偲んで …………… 宮崎敏昭 26

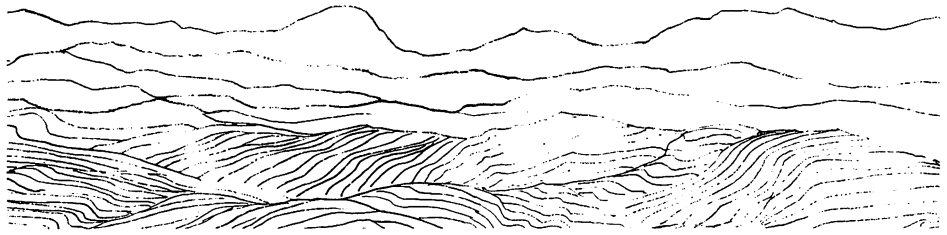
むらさき会追記 追想 追悼 …………… 益子弘道 27

●亡友に捧ぐ

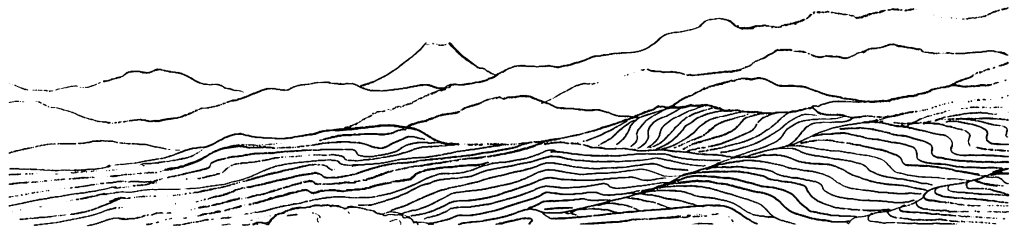
詩 (遺稿) …………… 故・原 武 29



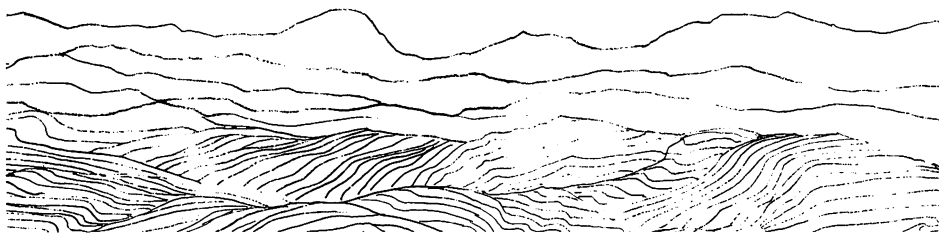
| | | | |
|-------------------|-------|--------|-----|
| 原 武のこと | | 原 悦子 | 33 |
| 海外便り(遺稿) | | 故・大島和道 | 35 |
| いつかある日(遺稿) | | 故・三友善夫 | 39 |
| 三友・岸・竹内君のこと | | 松村祐二 | 40 |
| 円空仏 | | 島田真三 | 43 |
| 亡友寸描 | | 青柳安彦 | 46 |
| 思い出すままに | | 福田 實 | 56 |
| 耳順雑感 | | 吉田景美 | 59 |
| 川中時代のこと | | 金子勇二 | 64 |
| 想い出いろいろ | | 金島壮行 | 68 |
| 一本の糸 | | 小鷹文子 | 72 |
| ●座談会「あの日、あの時」 | | 小野則彦・他 | 74 |
| ●川高悪童風雲録 | | 松岡章次 | 84 |
| 第二部 青嵐篇——川越時代の私たち | | | |
| (戦争) | | | |
| あの日あの頃 | | 東 敏雄 | 108 |



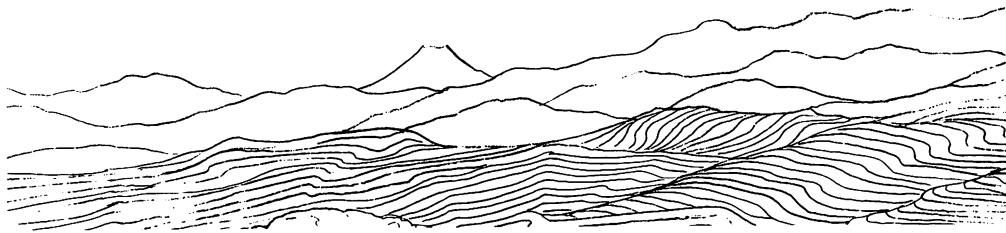
| | | |
|--------------|-------|-----|
| 境遇が激変した昭和二十年 | 森田重敏 | 113 |
| 川中時代の思い出 | 中内洋一 | 118 |
| 昭和二十年の冬から夏 | 根本暎男 | 120 |
| 空腹・空襲の青春 | 丸田謙三 | 124 |
| 初期青春時代と還暦の今と | 畑喜千松 | 129 |
| 川中入学の頃 | 松村祐二 | 133 |
| 思い出二題 | 水野洋策 | 137 |
| 終戦雑感 | 柴崎建治 | 140 |
| (疎開・引揚げ・転校) | | |
| 今となりては懐かしき | 清水良平 | 144 |
| わが青春と「川越」 | 高橋幸男 | 149 |
| 逆境に勝る教育なし | 鈴木淳一 | 151 |
| 私と戦争の思い出 | 朝久野貞郎 | 155 |
| 卒業と転学 | 小熊忠三郎 | 160 |
| 私の中学・高校時代 | 大山勝地 | 164 |
| 時に厚味はあるか | 斎藤賢治 | 167 |



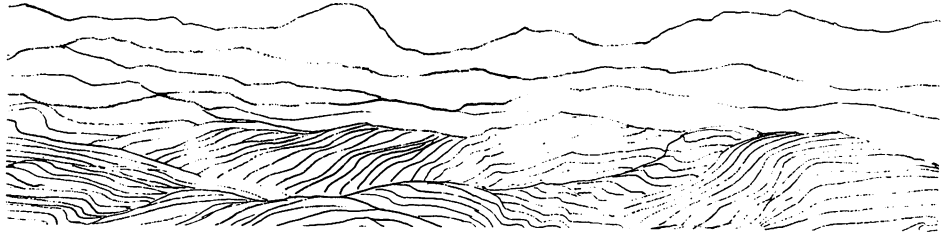
| | | | |
|-------------|-------|-------|-----|
| うまいはなし | …………… | 武長洋平 | 173 |
| 当時の思い出 | …………… | 小林堅造 | 175 |
| 川越・胸の底の思い出 | …………… | 村山英夫 | 177 |
| (思い出) | | | |
| 川越高校卒業まで | …………… | 永島俊三郎 | 180 |
| 思い出と近況 | …………… | 小川章 | 187 |
| 思い出 | …………… | 西川博 | 189 |
| S 君 | …………… | 野口八郎 | 192 |
| 麦秋の頃 | …………… | 遠藤公平 | 193 |
| 私はかく学んだ | …………… | 松村久 | 199 |
| 川中・川高時代の思い出 | …………… | 君塚功 | 201 |
| 川高生になって | …………… | 田島晃夫 | 203 |
| 入間川同期生 | …………… | 竹沢靖 | 206 |
| 老化——断片的な思い出 | …………… | 松平理 | 210 |
| 断片的青春のページより | …………… | 村山祥男 | 212 |
| 戦争が終わって・四題 | …………… | 斎藤弘行 | 213 |



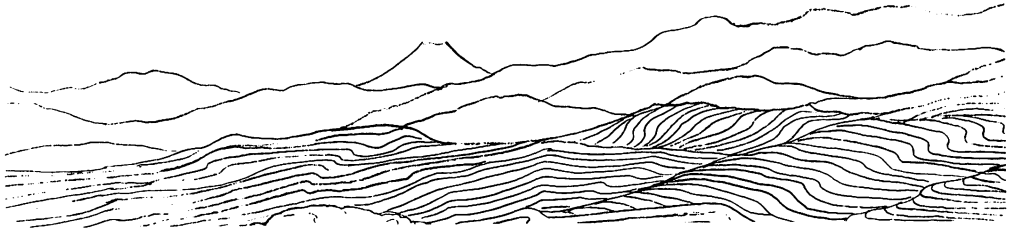
| | | |
|------------------|-------|-----|
| あこがれの白線帽 | 岸智 | 218 |
| たまげた話 | 宮崎敏昭 | 222 |
| 旧校舎での情景 | 丸田邦夫 | 225 |
| 川中と私 | 青山幹 | 227 |
| 思いつくままに | 大野良三 | 228 |
| スカチンのひとりごと | 山田和宏 | 232 |
| スーさんの走馬灯 | 田中崇 | 234 |
| 中・高六年間の生活に感謝して | 中秀男 | 236 |
| カムカム英語 | 新井淙平 | 241 |
| 思い出の川越の学び舎 | 中義智 | 243 |
| 当時の思い出 | 吉野正武 | 245 |
| あの日あの頃 | 中島喜三郎 | 248 |
| 芋小、芋中、芋高出と呼ばれ続けて | 沼田芳造 | 250 |
| つれづれの思い出 | 双木貞夫 | 251 |
| 青春時代の追憶 | 飯田清司 | 253 |
| 若さで切りぬけた時代 | 塩入亮善 | 256 |



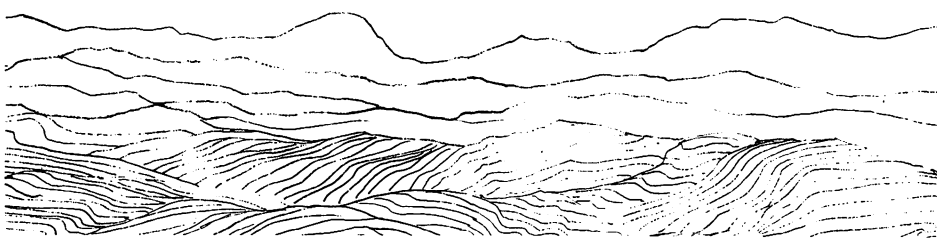
| | | |
|------------------|-----------|-----|
| 休学 | 菅間昭 | 257 |
| 当 時 | 加畑 栄 | 261 |
| 私の秘密 | 松本英男 | 262 |
| ツネさん | 小沢孝志 | 263 |
| ●昭和二十四年の日記より | 相田俊孝 | 265 |
| ●昭和二十五・二十六年の日記から | 小熊忠三郎／編集室 | 269 |
| (通学) | | |
| 学生時代 | 新藤邦泰 | 278 |
| ガソリン・カー通学の思い出 | 五十嵐 甫 | 281 |
| 自転車通学の思い出 | 関根保雄 | 283 |
| 自転車部隊 | 半田 登 | 285 |
| 川中の思い出など | 小沢昭治 | 287 |
| 思い出の記 | 小林洋左 | 290 |
| 高麗の里からの痛、学物語 | 佐々木良祐 | 294 |
| 「私の通学遍路」から | 内海俊郎 | 297 |
| 終戦前後の思い出 | 赤田康二 | 305 |



| | | | |
|--------------|-------|------|-----|
| 稲荷山公園通学路 | | 加藤 博 | 308 |
| ある日の下校 | | 柳沢 隆 | 310 |
| 初めてアメリカ兵を見る | | 豊泉正次 | 311 |
| ゲートル会 | | 浅見茂男 | 312 |
| 四十五年ぶりのコール | | 吉田浩一 | 315 |
| 自転車通学北面隊 | | 笛木勇三 | 316 |
| (部活動) | | | |
| 川高庭球部卒 | | 岡田立彦 | 320 |
| 追憶と祈り | | 谷 巖 | 323 |
| たった一度のホームラン | | 川合敬三 | 324 |
| 尾 瀬 | | 豊田 孜 | 327 |
| 野球生活一色 | | 浅井敏彦 | 329 |
| 「バスケづけ」回想の記 | | 新井治雄 | 330 |
| 「太郎さん」と図書部 | | 宮寺 威 | 332 |
| 懐かしき川中・川高郷土部 | | 沢田 明 | 335 |
| 我が師 小泉 功先生 | | 金子武司 | 339 |



| | | |
|----------------|-------|-----|
| 当時の思い出 | 齋藤守弘 | 343 |
| 山岳部時代 | 柳下 満 | 344 |
| 野球部の思い出、その他 | 柴田五郎 | 345 |
| 籠球部 | 石田照男 | 348 |
| バスケットボールとの心中 | 平井 功 | 351 |
| 演劇部の思い出 | 根岸 宏 | 353 |
| ●音楽部 | | 355 |
| ●郷土部 | | 356 |
| (先生) | | |
| 断片集 | 喜多 弘 | 358 |
| 思い出の断片 | 比留間和夫 | 365 |
| NHKラジオ | 府瀬川忠芳 | 368 |
| 「馬鹿たれ！」たちの中学生活 | 松村祐二 | 370 |
| 慈顔愛語 | 細谷哲夫 | 372 |
| 返せ！青春の一頁を!! | 森田利寛 | 374 |
| 忍天の円 | 荻野英夫 | 376 |



処分が論じられたあの頃……………平岡泰之 377

あの頃……………桃井良之 383

衝撃の中学一年生……………早川昇一 389

されどわれらが日々……………長島恒雄 391

「徳さん」を偲んで……………水村博光 396

徳さんの「顔洗って来い」……………水口重雄 399

思い出の先生……………山下文司 401

徳門十哲の一人として……………山崎孝雄 403

思い出……………浦部俊久 406

はるかなり異彩……………秋山輝一 408

佐藤徳さんのその後の思い出……………江原襄 409

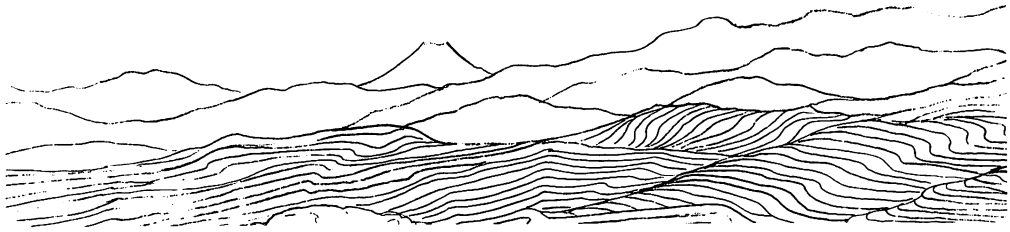
(文芸・音楽)

秋 蜂……………益子弘道 412

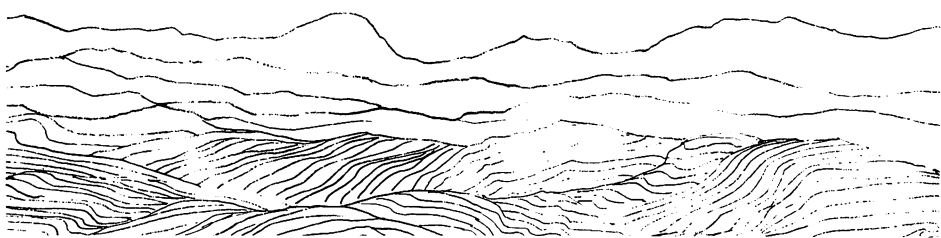
その時の色彩……………伊藤明 414

俳 句……………加藤敏一 417

一 句……………田中修 417



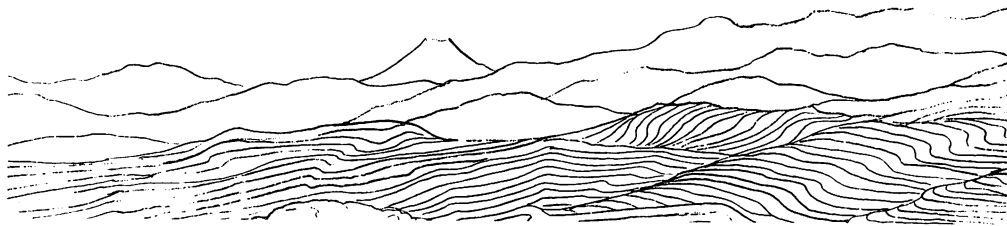
| | | |
|------------------|-----------|-----|
| ● 詩 二篇 | 畑 喜千松 | 419 |
| 俳 句 三芳野 | 宮崎敏昭 | 423 |
| 森田先生のレコード・コンサート | 小畑温治 | 424 |
| 咆哮マイ・ミュージック | 道又正達 | 426 |
| 俳 句 | 宮崎義宣 | 430 |
| ● 俳句クラブ・獺祭 | | 432 |
| 第三部 特集・II | | |
| ● わが街 川越 | | |
| やっぱり川越っ子 | 佐々木雄司 | 436 |
| 私の川越物語 | 正木一男 | 439 |
| 小江戸 川越 | 堀 陽 | 443 |
| 雑 感 | 小鷹邦夫 | 448 |
| ● 復元マップ「あの頃の川越市」 | | 450 |
| 「あの頃の川越市」マップについて | 青柳安彦 | 452 |
| ● 年表 川越と母校の歴史 | 編 集 室 | 458 |
| ● 談話 沈澱党始末記 | 高梨昌夫／松岡章次 | 460 |



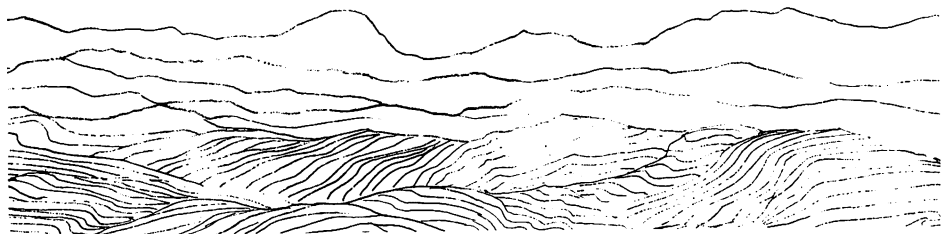
第四部 華甲篇——還暦までの私たち

(回想・近況)

| | | |
|----------------|-------|-----|
| 交友抄 | 中村生秀 | 470 |
| ハイスクールの頃 | 森岡昇 | 474 |
| 体操馬鹿の五十年 | 新井澄夫 | 477 |
| もう・まだ | 中島正博 | 481 |
| このごろ | 斉木敏雄 | 482 |
| 感謝 | 小川司郎 | 483 |
| 同窓三代 | 小高省三 | 487 |
| あの世からの生還 | 吉崎聰 | 487 |
| 随筆二題 | 関根憲治 | 489 |
| 定年退職を迎えて | 石井精治 | 493 |
| 冬景色 | 五十嵐統祥 | 496 |
| ひとりなり霜枯れ道はなお続き | 齋藤清一 | 502 |
| ゴルフ人生 | 新井貞夫 | 505 |
| 我がさすらいの旅 | 大野春雄 | 507 |

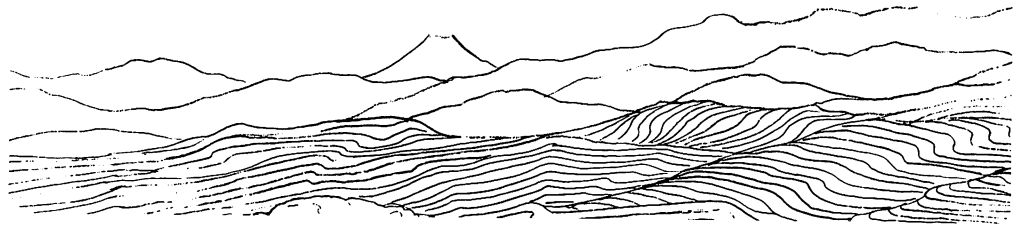


| | | | |
|---------------|-------|-------|-----|
| 悪ガキ | | 青木 勘輔 | 510 |
| 学校と私 | | 宇都野正章 | 511 |
| 回想四題 | | 水村 博光 | 515 |
| 来し方を顧みて | | 関口 英輔 | 522 |
| 随 想 | | 橋本 正一 | 524 |
| おじいちゃんのパソコン修業 | | 阿部 新一 | 526 |
| そばに合う酒を求めて | | 加藤 康夫 | 532 |
| 米ぬか健康法 | | 岩澤 富世 | 534 |
| ささやかな哀歓の一こま | | 守谷 互 | 537 |
| 京で五年 | | 内沼 一雄 | 542 |
| 私の履歴書 | | 伊藤 純夫 | 545 |
| 雑 憶 | | 川崎 匡 | 546 |
| 我が学生記 | | 松木 信 | 550 |
| 工房人生 | | 高山 恵介 | 554 |
| 道のり | | 奥平 守男 | 556 |
| でもしか先生 | | 奥隅 英夫 | 560 |



| | | |
|-----------------|-------|-----|
| 昭和二十年夏の思い出 | 佐久間幾雄 | 564 |
| 思い出すまま、比べてみれば | 加藤 健 | 566 |
| 私と海釣り | 奥田 誠 | 570 |
| 近況報告と思い出 | 小沼達之助 | 573 |
| 蝦夷風来坊抄伝 | 田村武男 | 574 |
| 挫 折 | 柳田径伸 | 581 |
| はらきり記 | 小島一雄 | 582 |
| 甲子園からの便り | 中田仁成 | 583 |
| 卒業以来 | 潟沼 稔 | 585 |
| 自然災害の恐さを知る | 糟谷 熊 | 589 |
| 川越中学の思い出 | 森田 賢 | 591 |
| 川高思い出雑感 | 大川 解 | 593 |
| 友を敬愛し(追記・川中二〇会) | 斉藤 恒 | 598 |

「あの頃・豆事典」…………… 青柳安彦



第五部 特集・III

●職員室

阿部新一 川合敬三 小林洋左 西川 博
水口重雄 / 清水良平 青柳安彦

610

●キタ・セクスアリス川中 …… ショージ・MATSUOCA

618

第六部 資料篇

初期の地図情報 学校地図 学校年中行事
学校文書 学制改革 クラス編成 タイトル案
あの頃・キーワード 級友名簿 電算分析

637

●編集後記

編集室

題字・青木勲輔／装丁・大野良三／見返しイラスト・松岡章次／A・D・口絵レイアウト・青柳安彦

校 歌

古谷喜十郎 作詞

内田糸太郎 作曲

Moderato

むらさきにおうむさしののて
 していのじょうしこまやかーにせ
 んよもふかーきかわごえーにかし
 っしのゆうーぎまたあつーくかー
 えのにわのーき深ひろくいしずえすえしーまな
 びにはしらすじつにつきちをたがやしてーとく
 びやはちちおのみねーのゆるぎなー
 をしくわがこらふうーはみよしのー
 くいとまのみずーのすえながーしり
 のしとうのうめーとかおるなーり

一、紫匂う武蔵野の

天与も深き川越に

教えの庭の規模広く

礎据えし学舎は

秩父の嶺の揺るぎなく

入間の水の末長し

二、師弟の情思濃かに

切徳の友誼亦厚く

華美にはしらず実に著き

智を耕して徳をしく

我が校風は三芳野の

社頭の梅と薫るなり

三、蛍に搜る鳥の跡

雪に尋ぬる文の道

大和心に西の才

雄飛の翼養いて

高き誉を初雁の

城址の月と輝かせ

応援歌

「昔古城の」

新井利一 作詞

昔、古城の楠の木に、頼ほくれないの若人が
 勝利のぞみの明日語らいつ、仰ぐ希望に力あり
 ああ初雁の健児等が、欣ごんぐ求不斷の精進に
 覇業はげの栄ばえと忍しの徒との、臥が竜りゆうに飾る五十年。

城址がの月がと雁がの、澄める自然に生い立ちし、
 我が精銳がの行くところ、○○○○○○○

君等がが血潮に勇みなば、我等がに血あり涙あり
 友おのこよ男子のの意気あらば、

勝利ひらかて止むべきや。

(記憶 菅間、大川 他)

応援歌 (昔古城の)

新井利一 作詞

力強く.....

むかしこはーの くすのぎに ほくれないーの めこーぞが
 のぞみのーあしたかたらいつ あかきほーにさからあり
 あーはつーかりのけんじら が ぞんぐふだんーの(ほーじん)に
 ほとよーの ほーえとにんじゆうの が ほーにのさーるごじゆうねん

この歌は戦後の川越の文学運動の中
 で、当時一高生だった詩人・新井利一
 先輩(四十四期)が作ったものだと
 われています。かなり格調高い文句で、
 当時の我々にも難解とさえ思われる部
 分がありました。

しかし、今見ると結構捨て難い味
 があるようにも思われます。上級生の指
 導で行われた講堂での歌唱指導も懐か
 しいですね？

ところがこの歌は『遠い飛行機雲』
 や、平成元年名簿 八十年記念誌にも
 載っていません。それどころか、私た
 ちの卒業後の昭和二十六年に「奮え友
 よ」という歌の他、二篇が、第一、第
 三応援歌として選定されたそうですが
 その中にも入っていない。つまり、公式
 の帳面からは抹消されたらしいのです。
 そこで、ゼヒ我々の文集でと思い、
 皆さんの記憶を集めて復活させてみま
 した。(一部はどうしても出ません)

ややレトロ口過ぎる感じもするこのメ
 ロデイもどこの旧制高校の寮歌の借
 り物らしく、決まった譜面があるわけ
 でもないので、一人ひとりの記憶にも
 かなりのバラつきがありました。

数人で歌ってみて、まあこれかな？
 というものをテープに録り、採譜した
 ものです。

協力||松岡、森田重、小熊、水口
 大川、菅間/採譜||比留間、内海

応援歌

「奮え友よ」

山本 明作詞
牧野 統作曲

奮え友よ
奮い立て今
初雁の
校旗はためく
武蔵野に
鍛えし我等
栄光の伝統守り
熱血の闘魂高く
今こそ誇れ
勝利の王座
勝利の王座
川高 川高
川高 川高
おお我が川越高校

応援歌 (奮え友よ) 山本 明作詞
牧野 統作曲

力強くおたらかに

Musical score for '応援歌 (奮え友よ)'. It consists of five staves of music with lyrics written below. The lyrics are: 奮え友よ 奮い立て今 初雁の 校旗はためく 武蔵野に 鍛えし我等 栄光の伝統守り 熱血の闘魂高く 今こそ誇れ 勝利の王座 勝利の王座 川高 川高 川高 川高 おお我が川越高校

埼玉県立川越女子高等学校

校歌

逸見 宮吉作詞
片山 眞太郎作曲

原形に [J=96]

Musical score for the school song. It consists of four staves of music with lyrics written below. The lyrics are: 1. つもゆたけきむさしののの
2. きよいきいるまののの
3. ゑみにゆかりはつかりのの
く一さもみながらはゆるまんでの
た一ゆるとまなびのはんじんあめで
せしそをむねとせむらひらさきつの
したんときあせむらひらさきつの
はみのかたかくわれきかむじ
みちひとあすあわれれまか
そのにねあつけれれまか

埼玉県立川越女子高等学校校歌
逸見宮吉・作歌

一 露もゆたけき むさし野の
草も皆がら はゆるまで
質素をむねと むらさきの
花の香高く われ咲かむ

二 清きいる間の せせらぎの
絶ゆる時なき 勤勉の
尊き汗を たたへつつ
道ひと筋に われ践まむ

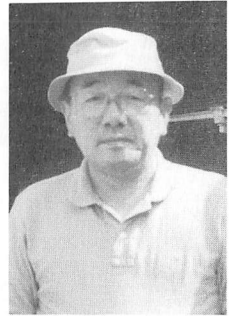
三 文にゆかりの はつかりの
里にまなびの 庭しめて
誠実かをる なでしこの
その種あつく われ播かむ

こんなところになぜオケンの歌が? なんて思うなかれ。当時彼女たちはみんな川高の校歌を知っていたんだそうです。我々がオケンの校歌を知らないんでは義理を欠くというもの。お孫さん? のピアノで「よく読めるように、よく歌えるように、暗唱して」ください。

第一部「特集・I」

大澤ヨネさんを悼む／亡友に捧ぐ
座談会「あの日、あの時」／川高悪童風雲録

大澤ヨネさんを悼む



「むらさき会」今昔（遺稿）

昭和三十三年というと大学を卒業し三年目になった年、「むらさき会」の初めての会が浅草松屋のすみだ結婚式場で開かれた。

「むらさき会」とは言わずもがな、わが懐かしの校歌から拝借した名前である。当時は同窓会もA組卒が熊野神社の社務所を借りてやったぐらいで、あまり大きな集まりはなかった様と思う。

その頃、都内に就職した仲間の中から誰言うともなく、お互いに結婚したら、みんなでお祝いをしようということ出来たのがこの会発足の趣旨である。最初のお客様は宮崎敏昭君夫妻であった。会場は豪華で格安、参加者の評判もよかったので、設営してくれた益子君の好意に甘えて当分の間お世話になることにした。小生も三年後になんとか招待されたくちである。

会のメンバーは二十名から三十名でかなりまとまっております、会長は中村君に無理をお願いしていた。大事なお客様をさかんに飲んだり、騒いだりして、毎度お開きの前には、お互い肩を組み合い、校歌を思いっきりうたった感激は今でも変わらない。

故大澤米吉

一回り結婚祝いも終ると、みな忙しい世代にもなり、会のやり方も変って自然と回数が少なくなっていく様子がする。同窓会もクラス別にやる段階でもなくなり、現在の様な学年全体の会に移行し、二、三年に一回位恩師を招いて開かれていたと思うが、幹事によつては大分間隔があいたこともあったのは知る人ぞ知るである。「むらさき会」は首都圏に限られてはいたが、年一回程度は持たれていたもので、同窓会を補完する役割を果たして来たといえるかも知れない。

十年程前からは時間的に余裕が出来たせいも、希望により年二回やることも多い。会場も内幸町の「せびあ」を借り切つて、回りに気兼ねすることなく楽しい一時を過している。

昨年二月には佐々木（雄）君の絶大なるお骨折りにより、東大の山上会館で盛大に会を開くことが出来、忘れがたい思い出となった。

定年、還暦とやつぎばやに大きな人生の節目を迎え、今後を如何に充実した第二の人生として生きてゆくか一抹の不安もある。

川中、川高と六年間も多感な少年期を共にし、裸のつきあいをして来た仲間がこうした会に積極参加して発展させていければ、生きがいの一助にもなるのではないかと考えている。現在世話人としては、益子、宮崎（敏）、柳田、大澤の四名が当たっているが運営が安定しており、メンバーが増えても対応出来ると思う。

今後、みなさんのご意見を大いに取り入れ、「むらさき会」をより親密な会にしてゆきたいものである。

（大澤米吉さんは平成五年五月十六日、心不全のため急逝された）

大澤米吉さんを偲んで

宮崎敏昭

米吉さんは本年五月十五日（土）午前十時に東京専売病院に入院して、翌十六日（日）の正午過ぎに不帰の人となつてしまった。なんと人生とは呆気なく悲しいことだろう。常に我々の先にたつて面倒みてくれた米吉さんが先に逝ってしまうなんて！

米吉さんは本年三月末風邪をこじらせて同病院に入院したのでした。四月九日にお見舞いに行つたところ、糖尿病気味なので点滴のみで体重を減らし、七十キロを切つたと元気に話し、翌週退院したのでした。五月五日に電話したところ、「風邪は治つたが腹の調子がよくないので、これが治つたら一杯やろう」と言つて別れたのが最後になってしまいました。

思い返せば「むらさき会」の最初の会に、私の結婚祝いをしていたこと、また、富国生命埼玉支社長時代（昭和四十年頃）、私の母が北浦和の救急病院へ入院した翌早朝、付添いの人達の食料を街で探している所へ、たまたま車で通りかかり、一緒にパン屋を探していただいたこと。最近では平成三年、四年に米吉さんを先頭に山崎・益子・柳田たちと「みちのく五人旅」と称して、盛岡・田沢湖・那須・塩原方面へ旅して、酒を飲んでの句会のことなど忘れられない思い出が沢山あります。

この文集作成の企画編集会議には、三月十三日の会議まで毎回岩槻から川越の会議場に出席して、貴重なご意見を沢山いただきました。しかし完成を見ずに他界されてしまい残念ななりません。

只今ご家庭では、奥様仁子さんの下、ご子息の一人さんかずととご息女の良子さんりょうこが立派に成長されて、それぞれお仕事に

就かれております。

どうぞ安らかにお休みください。謹んでご冥福を御祈りいたします。

「せいふくきん」追記、追想、追悼

益子 弘道

昭和三十三年の暑氣日毎に加わる頃であったと思うが、浅草への通勤途上、蒸し暑い東上線の車中で偶然、三年振りに大澤米吉君にお逢いした事があった。大澤君は富国生命の大宮支社に就職されたので、昭和三十年の春頃から大宮駅の近くの「酒」と大きく書かれた赤提灯の屋台店に時々さそわれ堅い話、柔かい話に花を咲かせていたが、小生東武鉄道の沿線開発を担当する東武興業に就職していたので、間もなく赤城山に転勤を命ぜられ二年半ばかりの間に鬼怒川、日光、天神平、蔵王と転々とし、ドサ廻りから帰ってすぐにお逢いしたものであった。正に目に見えないむらさきの糸で結ばれていたのであろう。本社転勤の連絡が遅れた事を詫びることから始まって、お互いの空白期間の話の終りに、東京や近郊に勤めている連中で「一度逢おうや」という事になった。実行力、行動力抜群、そして友人に対して常に思い遣りを忘れない大澤君は、早速案内状の原稿と連絡先名簿を送付して来た。小生往復葉書に印刷を手配し郵送した。東武興業の本社は浅草東武駅ビル（大部分を松屋デパートに賃貸している）の六階にあり、結婚式場、貸し劇場、食堂等を経営していたので昭和三十三年の木々の葉が黄ばみ始めた頃、小生の設営で結婚式場の一室を借りて第一回の会合を開催した。出席者は大澤、中村（生）、宮崎（敏）、松平、福田、森田（重）、塩入、小島（二）、高橋（幸）、金子（武）、畑田中（崇）、根本の諸君と小生であったと思う。戦中戦後に中学・高校時代を共に過ごした仲間として思い出を、そして将来を語り合ったものである。この席で今後はすみだ結婚式場を利用し、結婚したカップルを招待し皆でお祝いをしよ

うという事になり、会の名前も大澤君の発案で「むらさき会」とし、会長を中村生秀君にお願ひした。

最初の結婚祝いは宮崎敏昭君夫妻を囲んで賑やかに行き、それから順次お祝ひの会合をもった。十年程経過したところで畑君の紹介で湯島の小料理屋（正一合の店）に集まった事があつたが、この後同期の桜達も中堅幹部として働き盛りの域に達し忙しい日々となつた事もあり、特に大澤君が支社長として地方に栄転されたので一時中断の状態となつたが、昭和五十五年頃大澤君が、富国生命本社幹部として東京に戻られたのをきっかけに復活した。小生勤務先を替えた事もあつて、大澤君の紹介で富国生命ビル地階の「せびあ」というスナックを借り切つて年二回程のペースで開催して来た。大澤君から仲間をもつと増やそうということになり、中村会長とも相談し五十名の諸君に声を掛け、常時三十名程の参加を得て盛り上つて来たところである。幹事も大澤、宮崎、柳田、益子を常任にした。平成五年の二月下旬、日本橋本町の飲み屋で次回の「むらさき会」開催を話し合いながら、大いに歓を尽くした。

この日が大澤君と逢つた最後の機会にならうとは思わなかつた。五月十六日訃報に接したのである。通夜、葬儀に多くの仲間達と共に焼香させて頂き、菊の花に彩られた、大澤君の苦しみを乗り越えた安らかな寝顔に別れを告げた。悲しみの極みである。小生の心の中にポツカリと穴が空き、人生の虚しさ、儚さを痛感した。句集「初雁」の編纂、大澤、山崎、宮崎、柳田、益子の奥州路五人旅、同じメンバーでの塩原温泉旅行等大澤君との数々の思い出を今は共に語ることが出来ない。

国文学部以来の同じ趣味を持つ僚友の一人を失つたことは、これからの我が老後の人生を導き、照らしてくれる灯りが一つ消えてしまったことになる。これからは在りし日の大澤米吉君の元気な姿を想ひ浮かべ、念ずることによつて指導を頂きたいと思つている。大澤君の遺志を継いで中村君を軸に宮崎、柳田両幹事と共に「むらさき会」を更に盛り上げて行きたい。諸君の御協力を願うこと切である。

詩

故原

武

春山の歌

春山を呼ぶと

こだまは 泣きながらまた帰る

なぜ泣きながら帰ってきたの

と尋ねると

だってあなたは無理なことおっしゃるんですもの

と眼を俯せる

だからぼくが春山を呼ぶと

こだまは 泣きながらまた帰る

(一九五四)

初めての疲労

薄明の

そのものの型の

わづかにかすむ程の

それ程の明るさがい、

微風に

たゞよう程の

そんなわづかな暑い香りが

いい

わづかにあえぐ程の

そんなにゆるやかな丘

丘の斜面

そのくさむらに初めての疲労を

探そう

(一九五七)

男の習作

冷い結晶の内て

氷河が初めての滴りとなって

谷間をゆるり下る頃

男が淋しい山の頂に向って

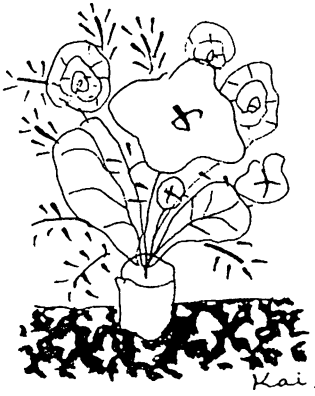
歩む

新しい登頂の道を求め

腰までの処女雪を踏みしめながら

七色のプリズムに抱かれて

破れ



白い道標のかなたから

とろとろと流れる

冷い結晶がその悉くの思想を

ひとつの罫の中に寄せ集め

たゞ一本の焦点に絞られ

燃え

男が男の習作を鏝む時に

初めての滴りとなって

氷河がおまえの額に流れ

おまえの最大の労作の影に

立ち

甘そうにあなたは噛んでいる

白き薔薇

暮れ残る

白き薔薇

六月よ

お前の花かんざしは

いったい何処に蜜をかくしている

(二九五七)

女生徒

若い花びらたちが

それぞれみんなその花びららしい

声を立て、いる

ああ何を話しているのか

楽しそうなすぐ右隣の五人の

女生徒たちよ

外は入梅だと云うのに

こゝ地下鉄丸ノ内線の

ジョン・ブリアンの車内には

ああまるでこゝは

春のお花畠のようだ

若い花びらたちよ

みんな仲良く大きくなっておくれ

(二九五八)

新しき野に

黄色い麦

青い茎の先の

白い花の葱坊主

細い道に沿って

小さな集団住宅が建ってゆく

武蔵野のだからも居ない

丘がひとつふたつと消えてゆく

林や森や

田や畠や

ふたつ みつ よつと

消えてゆく

その新しきさ、やかな家に

子供が生れたら

若い親達よ

どんなにちっぽけな庭にでもよいから

くぬぎ林の匂いのする

こ、武蔵野の面影を

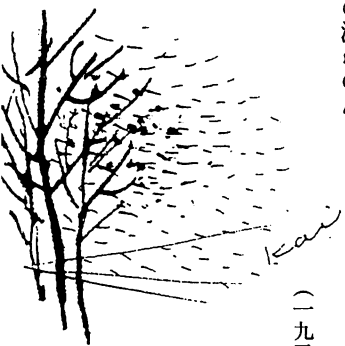
幼い君ら子供たちのために

とっておいておくれ！

そのかみの武蔵野はどこまでも行っても

野と

林と細い水の流れのある……



(一九五八)

原 武のこと

原 悦子

同期生の皆様、還暦を迎えられて、誠におめでとうございます。

平成五年二月十五日、新藤邦泰氏に、お目に掛かりましたところ、川高の思い出の文集を作るので武君の何か載せたい、とおっしゃって下さり大変感激いたしました。

詩を数篇選ばせていただきました。

思い起こしますと、昭和十八年私は東京より疎開し、志木国民学校五年に転入いたしました。男女、別クラスでしたので、机を並べて勉強はいたしません。印象には残っております。私も川女に六年間通いまして、終戦、戦後と厳しい時代で、通学路の東上線は、凄まじい買出し列車でした。高校生になる頃は、大分落ち着きを取り戻して参りました。

当時の東上線は、三両編成で、男子学生は前の車両、女子学生は後の車両と、暗黙のうちに定まっておりましたので、遅刻しそうになって、前の車両に飛び乗ったりしたら、それこそ大変恥しい思いをしたものでした。時折テニスラケットを持ったり、バイオリンを抱えている彼の学生服姿を見掛けることがありました。テニスは学年の中でどうか、チャンピオンになったとか。バイオリンは中三の時から、N響第一提琴の岡見温彦氏に師事、ピアノは独自に練習していて、音楽会等にもよく出掛けていた様です。

家業の薬局を手伝う為、東京薬科大学へ進学した頃から、絵をかき始め、詩作や日記も付け始めました。大学二年の夏結核を発病、十月には東大病院木本外科にて手術、退院後は、大学を中退して、自宅での療養生活に入りました。堀辰雄や立原道造等を愛読し、詩作にも励み、原稿用紙に自分で装丁した詩集十一冊、日記は、昭和二十六年四月から三十三年一月迄四十九冊が残っています。

二年程たった二十九年頃から再び絵をかき始め、三十二年、第七回全日本学生油絵コンクールに「武蔵野の町」が、埼玉県展に「愛と風景」が入選、それを契機に生涯絵に生きようと決心し、二科会会員斉藤三郎氏に師事することになり、原貝二郎という画名にいたしました。三十三年には画名を原貝次郎と改め、第四十三回二科展に「十七才」が初入選いたしました。翌年には「華と群れ」、翌々年には「薔薇の群像」が入選いたしました。三十四年結婚、三十五年長女が生まれて、人並の幸せも短い期間味わったことでした。

この様に三十三年から三十五年の三年間は、二科展連続三回入選、その間斉藤先生を中心に、二科出品の方々と現代美術家協会展や、県展、アンデパンダン展に出品、銀座櫛廊での二回の個展等、美術を志す青年として、最も充実した時期でした。しかし華やかな活躍の陰で、身体は蝕まれていたのでした。

東郷青児氏が「薔薇の群像」はよい絵だから特選に、と推賞して下さったのですが、年齢をお訊きになって、まだ若いから来年にしようとおっしゃったとのことでした。その後二度と出品することなく病再発し、三十七年一月七日、二十九歳で帰らぬ人となってしまいました。残念という他ありません。

結局、彼にとって川中、川高での六年間は、一番健康で闊達な、良き時代だったのでないでしょうか。

拙い一文を、添えさせていただきありがとうございました。

皆様の御健康と御多幸を心より祈りつつ……。

大島君の海外便り

故・大島和道君の奥さんから岩澤富世君を経て、彼の存命中の手紙が寄せられた。その際、その手紙に添えてあった岩澤君の手紙から一部を転載し、説明とさせていただく。(編集室)

前略 ここに同封しました手紙は、かつて大島和道君が元気だったころ、外国から愛する妻の慶子さんへ送られたものの一部です。ご承知かとは思いますが、彼は本田技研に勤務中、一九六二年、海外への出張を命ぜられて暫くの間、アメリカ及び中米各国を歴訪しました。

多趣味の彼は、とくにオートバイをはじめ登山や俳句を好んでおりました。そこで今回の文集について俳句の遺作でもなにかと探していただいたところ古い記念品の中に、こんなものが出てきたと届けてくださいました。

かつての旧友のいく人かの方に、こんなことがあったのかと、彼を偲んでいただければ、とのことでした。

海外出張の際、日航の牧田君にルノーを預けたり、羽田で奥さんと別れた際に寂しさのあまり奥さんが失神してしまい、牧田君に抱きかかえられて医務室に運ばれるなどいろいろありました。

その彼が帰国してまもなく、不運にも下請け会社のトレーラーに激突して、短い人生を終わるなんて夢にも思いませんでした。

(後略)

平成五年四月十二日 岩澤富世

COSTA RICA

San José ホテルバルモラルにて

暑いニカラグアを昨日、十七日の夕方暗くなってからPAA機で飛び立ち、ここコスタリカのサンホセの街には、夜の八時すぎについた。途中雨で、大分飛行機は揺れたが、十五分くらいのおくれて、どうやら雨の上があった、飛行場に降り立つことが出来た。このコスタリカは僕が入国手続で手間どっている間に、荷物は関税をフリーパス。出迎いのルコーニさんの車でサンホセ市に向う。以前はサンホセにあった飛行場が危険になった為、ココという所に移したとか、大分サンホセの街からは離れている。

ホテルバルモラルに着いたのは九時すぎだろうか？ ここはニカラグアのマナグアのホテルとは異なり、大分綺麗なホテルである。

すぐにシャワーを浴び洗濯をする。テトロンとかホンコンシャツはすぐに乾き、ノーアイロンで着られるので便利である。東京を出る時に着てきたのは、アメホンにあずけて、洗濯に出して貰うよう頼んで

COSTA RICA:

SAN JOSE
ホテルモラルにて



暑いニカラグアを昨日、17日の夕方暗くなってからPAA機で飛び立ち、ここコスタリカのサンホセの街には、夜の八時すぎについた。途中雨で、大分飛行機は揺れたが、15分位のおくれて、どうやら雨の上があった。飛行場に降り立つことが出来た。このコスタリカは僕が入国手続で手間どっている間に、荷物は関税をフリーパス。出迎いのルコーニさんの車でサンホセ市に向う。以前はサンホセにあった飛行場が危険になった為、ココという所に移したとか、大分サンホセの街からは離れている。

おいたが、どうなったか？ 今の所はホンコンシャツの二着だけで、他のものはまだ着ていない。

さて、ここサンホセの町は海拔千二百メートルとか、大分涼しい。夜はホンコンシャツ一枚では寒い位で、オーバークートを着ている女の子の姿が見受けられる。

朝になって出発（販売店）の直前に、日本人を見かけた。近づいて来てイキナリ How do you do だって、そして俺はパナマ領事の丸山だって、でかい顔してやあがる。一寸カチンときたが、知らん顔して名刺を出したところ Timing よく、販売店の親爺が来たので、うまく逃げ出した。

ここコスタリカは、中米一美しく？ 感じられる。昨日迄のマナグアに比べ、サンホセの町はずっときれいであるが、やはりここにも、裸足の靴磨きの少年や街角の乞食を大分見受ける。やはり、その点では、日本の方がずっとままと考える。

貧しいクラスと富めるクラスの差がひどく、黒人はやはり貧しいクラスが多いと見受ける。今日は昼飯に、コスタリカ カントリークラブに連れて行って貰った。非常に美しいゴルフ場であったが、今日は全て白黒の写真しか撮っていない。

販売店、ガリーノルコーニは大した所ではないので、仕事は早めに切り上げる事にした。

昼食から帰る途中、ルコーニ氏の経営する鶏舎に立ち寄った。九万羽の鶏がいるとか。ヒヨコから育てて、大きくなった奴は、ベルトコンベアーに乗せて、殆ど自動的に処理して、羽をむしり、きれいに何回も洗い、冷してビニールの袋に一羽ずつつめて、最後に大きな冷蔵庫に入れて冷凍して出荷するとの事（オートバイより鶏の方がもうかるだろう！）

帰途、自宅に立ち寄り、奥さんに会った。オヤジはいい加減な年齢なので、奥さんも美しいが年はやはり出ている。二人共イタリア人なので、家の中もイタリア風で、落ち着いて静かであり、バルコニーから見下ろす庭の池のはしにレモンがなったり、バナナがなったりしていた。

夕方、シャワーと洗濯、今夜は晩メシ抜き……。

夕方、セルフサービスの食料品店でコーヒーを二ポンド買った。日本の金で四百円一寸、ルコーニがコスタリカのコーヒーは中南米で一番うまくて、安いというから買ったのだ。ナベさんがバナナを買うというので、一房(大きい奴が七本位ある)買い、まけさせたら、五・五センチシモ 約三十円位で、あまり安いのにビックリした。

コスタリカとか、ニカラグアとか、中米の国々には、殆ど四季がない。暑さは年中同じ位とか、ただ、雨期と乾期があり、雨期は五〜六月頃から十一月頃との事。午後から夕方にかけて雨が降るが、今日はパラっただけ。

陽の当る場所は暑い、日陰に入るとスーッとすする。一年中同じだから、バナナ、ヤシ、コーヒー、パイナップル等が豊富である。しかし、何も大きな産業がなく、コーヒー位なので、貧乏なことは日本以上だ。日中は相当暑い、大分冷えて、せいぜい腹巻をして寝るか？

和典やオフクロは元気かい、

俺が帰る頃は、涼しい事と思うが、身体を大切に、明日は昼頃の飛行機で、今度の旅行で一番暑いパナマへ行く。それでは K. Oshima 9/18 (本人のサイン)

新河岸へは、まだ何も書いていない。ヨロシク伝えてくれ。自動車どうなった。

(手紙はまだ数通あるが一通のみ紹介した)

いつかある日

故三友善夫

私もこのがんセンターに移って一年になる。この間にかんという病氣は極めて厳酷なものであることを痛感させられている。なかでも私の三十年来の友をがんで失ったことはショックであった。彼の父親も術後再発したがんでこのがんセンターで逝き、その後八か月も経ずに父親の後を追った。古い山の友であり、山賊会のメンバーであった彼が背痛を訴え、胃の検索を繰り返したが、神経性胃炎がその診断であった。幼くして母親を失い、苦勞した彼は忍耐強く、山でも信頼が厚く、チームワークの中心となつて行動していた。その男がよくならない背痛に耐えながらも、愚痴をこぼすのはよくよくのことであつたと思われた。私も彼の性格をよく知っていたので、その背痛の奥に何かがあると疑つて、再度、胃の内視鏡検査を頼み、顕微鏡下にかん細胞を見つけた時には、一瞬寒気を覚えた。父親をなくし、県議選に文字通り死力を尽し、当選もない彼とその家族にかんを告げるのは何ともやるせないかゝつた。ただ、よく理解し実の子や弟のように面倒をみている義兄がいたことは救いであつた。がんを病人自身に告げるかどうかはよく問題になるが、救いの可能性のない場合には本人に知らせないのがよいと言われている。私どももこの常識にしたがつて、手術をし、一時退院、再入院という経過をたどつた。再入院からが、がんと患者の酷しい闘いであり、疼痛のみをみて、睡眠を妨げられ、嘔吐、嘔気には吸引で対しながら、四六時中挿入された鼻管は邪魔であつたらう。それでもよく耐え、頑張つた。丁度、山で頂上をめざし、重いリュックに喘ぐように、黙

って耐えていた。次第にそれらの苦痛が増すにつれて、耐え切れず、看病している奥さんに注文をつけることが多くなり、医師たちも困惑させられるようになった。そして死と時おり真正面から対し始めた。毎日、病床に来て欲しいという彼の希望も、私も逃げたくなくなって行った。やがて病が底をつけばよくなるからそれまでじつと頑張れと言ったが、がんが拡がって行く彼には死以外にその苦痛からは逃げられないことを思うと切なかった。山で何度も死と直面し、それを切り抜けたことを思いおこさせて、気力を出させた。そのために病室の壁に劍岳の写真を焼いて貼りつけ、山男よ、もう少しだと言いきかせた。時には山の遭難者の屍を残して下山する錯覚を覚えながら病室を出ることがあった。

いつかある日山で死んだら 古い友よ伝えてくれ……

いとしい妻よ強く生きてゆけ 息子たちに……の歌のように何か子供たちに父親の言葉を残させてやりたいとしたが、形としては何も言わなかった。人間は独りで生きる以外ないさ、社会に迷惑をかけない人になればいいさと言っていた言葉が残っている。そして雨の降る日父親とならんで墓地に眠った。いつかある日、がんを倒し、仇を取るよ、山の友よそれまで見ていてくれ。そう念じながら墓地の穴にかけられる土を見ていた。安らかに眠れ。山の友よ。

この遺稿は「三友博士を偲ぶ」と題する三友博士追悼会が発刊した小冊子に掲載されたものである。ここに登場する患者は、県議に当選しながらまもなく病の床についた同窓生、市村栄一君の最後の姿である。ご一読の通り、なんととも痛ましく、耐えがたい。それにかかわる三友君の医師としての責任感と山男の友情がひしひしと胸に迫る。「いつかある日、がんを倒し、仇を取るよ、山の友よそれまで見ていてくれ」と、この時、決意を語った三友君は一九七八年（昭和

五十三年)の師走、最愛の久子夫人とかわいい二人の坊やを残して、卒然とこの世を去ってしまった。運命の非情に怒りを覚えずにはおられない。

彼は、東京医科歯科大学の助教授として将来を嘱望されながら、ふるさと埼玉の地域医療の仕事がしたいと、かねがね言っていた通り、新設の埼玉県立がんセンターの招聘に応じて病理部長に就任。本格的仕事が始まろうとしていた矢先であった。どんなに無念だったろうか。察するにあまりある。われわれ仲間も、健康について、ことあるごとに彼のアドバイスを頂いた。そんな時も学生時代そのまま、黙々と世話をしてくれて、少しも労を厭わなかった。あらためて心から感謝申しあげたい。

幸い、久子夫人の愛情のなかに淳君、周太君は遅しく成長し、既に社会人として活躍している。天国の三友君も喜ばれていることと思う。

岸 昌次君のこと

岸君とは地元川越の小学校の時から一緒だったがクラスが違ったため交流はなかった。たまたま、十B(高一B組)に在籍の折、座席が近くて、親しくつき合うようになった。クラスのノッポ組は最後列。佐々木、浦部、小峰、原、沼田、比留間、松村がそれ。沼田君の演ずるモチさんの出席点呼に登場するメンバーだ。二列目あたりに新藤、田中(修)、岸の諸君がいたのではなかったらうか。

その頃、ぼくは黒板の字がさっぱり見えなくなり、原因がなんだかわからず、不安な日を過ごしていた。そんなある日、メガネの岸君が彼の古いメガネを持参してきて「これを使ってみる」と渡された。なんと掛けてビックリ。世の中が突然明るくなったのだ。黒板も、先生の顔もよく見える。以後メガネは手放せないことになった。

学校をでてからお互いに没交渉のままに過ごしていたが、彼は家業を継がれ、川越のライオンズクラブで活躍している様子などが同じく川越で商売している多くの兄から聞きおよんでいた。

多忙を極めた日々だったのだろう。仕事に飛び回っていたある日、彼は交通事故に巻き込まれ四十八歳の命を落してしまった。まことに口惜しいかぎりである。その後も没交渉のままだったので後味の悪いお別れとなってしまった。岸君のご冥福をあらためてお祈り申し上げたい。

竹内 健ちゃんのこと

健ちゃんが亡くなって何年になるだろうか。彼も四十代の若さで別れてしまった。

川中、川高時代は余り親しくはなかったが、彼が立教大学に入ってから急に話す機会が多くなった。

二年先輩に吉田忠雄さんという方がいて同じ立教に通い、熱心なクリスチャンであった。彼はこの方の影響をかなり受けたようである。吉田さんは立教のチャペルで日曜学校の奉仕をされていたが彼も手伝っていたようだった。

そんな関係で私の所属している川越の松江町の教会にやってきたのではなかったかと思う。いつもスマートで、時間の正確な人だった。早くから、自営業で苦勞されていたためか経済の見通しなどには一家言持ち、論法は鋭かった。結婚も慌てず、マイペースを崩さなかったから、ご両親を含め、まわりをかなりはらはらさせていた。しかし間もなく才媛の直美夫人に巡り合い、今度はわれわれを羨ましがらせる結果となった。

結婚生活もさほど長くないというのになぜそんなに急いでこの世を駆け抜けていったのか、じっくり尋ねてみたいと思うことがある。しかし、彼にとって「現世は大宇宙に較べれば一瞬のまばたきの間に過ぎず、安らぎは天国にある」と言っているように思えてならない。魂の平安を祈りたい。

(以上三氏に就いては松村祐二記)

円空 仏

島田 真三

今から二十数年前だったか、勤務先の同僚から一つの彫刻をいただいた。それは薪を素材として作った円空仏の模造であった。非常によく模して作っており、本物と見まごう素晴らしい出来であった。自室に飾り、あの微笑みを浮かべているかのような円空仏の持つ素朴な暖かさに時々浸った。こせこせしたわずらわしいことの多い俗世間の垢を洗いおとす貴重な時であった。

そしてある時、その円空仏の微笑みに、ふと高校時代の一人の亡き友の面影を見てとった。彼との久し振りの再会だった。彼を忘れてしまっていたわけではなかったが記憶の底に埋もれてしまっていたのだ。驚き、かつ、懐かしい思いで一杯になった。四十数年前にタイムスリップした感じで、しばし高校時代の思い出に耽った。

亡き友とは高二（高一？）の時、授業中急逝した永田君のことである。

思いおこせば、永田君とはまことに短い不思議なご縁であった。

私と永田君とのつきあいは二、三か月という短いものであった。しかもその間、彼と言葉を交わした記憶がまったくない。彼について知っていることといえば、彼が指扇から川越線まで通学しているということと誰からか伝え聞いて知っていた位である。したがって彼を友とよぶのはおかしいかもしれない。しかし、別な縁があったからではなく、短いこ

しかし敢えてここに彼を友とよび彼の思い出を書くのは、別に深い因縁めいた話があったからではなく、短いこ

の世での私とのほんの短い出会いの中で、強烈なインパクトを私に与え、去っていったからなのである。

彼とはじめての出会いには、同級生となつて一か月ほどたったある日の休み時間だったと思う。私が後部の出入口から廊下へ出ようとしたとき、ちょうど前部の出入口より室内へ入ろうとした一人の級友と顔が合った。その級友はそこに立ち止まり、人なつこい親しみにあふれた笑みを浮かべ私に一寸会釈をした。言葉を交わしたこともない級友からの思いがけない会釈であつたので驚いた。私もあわてて笑顔で会釈をかえした。その級友が永田君であつた。

十数年来の知己に出会つたかのような錯覚をおこす何ともいえない懐かしい笑みであつた。なにか町なかで偶然兄貴に出会つたような感じでもあり、ほのぼのとした嬉しさがこみあげたのを今でも覚えている。この時以後永田君は、私の親友の一人となつた。勿論それは、かつてに私がそう思いこんだだけだと思ふが。

この永田君との出会いは、四十数年たった今でもどう考えても些細な出会いの一こまにしか考えられないのだが、それでもなお、今も私の脳裏にくっきりと焼き付けられている出来事であつた。これはおそらく、あの笑みと会釈の中に表出した永田君の暖かい人間性が、粗野な私の心を強烈にゆさぶつたのであろうと、ひとり理解している。永田君の死はあの日からまもなく、突然やつてきた。

その日はどんより曇つたうつとしい日であつたと記憶している。石川先生の体育の時間であつた。準備体操をし、例のジョギングをはじめた。バックネット前を通過したときに野球のマウンドあたりにポツンと一人、私たちの走っていくのを見送っている永田君の姿が気がついた。身体の調子が悪かつたのか。いつものように人なつこいあの笑みを浮かべていたが、なぜか淋しげであつた。これが私が見た永田君のあの人なつこい最後の笑みであつた。

永田君の死が伝えられたのは授業が終わる直前ではなかったか。バスケットのプレイ中、ボールを追っていき倒れた。心臓弁膜症の発作とのこと。そのまま帰らぬ人となってしまったそうである。頑健そうであった彼のことであり、つい先程まで笑みを浮かべていたのを見ていたことでもあるので、信じられず半信半疑であった。保健室に安置された遺体に焼香を終えた時、夢ではないことを悟った。午後、ご両親たちに抱かれ、降りだした小雨に濡れた楠の大樹の下を静かに車で去っていく友を私たちは見送った。

その日、私たちのクラスはそのまま放課になったのではなかったか。帰宅しても何か夢をみている感じで、夢ならば早く覚めよと願った。なにも手がつかず、すべてを洗い流そうと風呂に入ることにし薪を燃やした。パチパチとはぜて飛ぶ松薪の火の粉に、人の世のはかなさと無情を、子供心にも強く感じたのをはつきりと覚えている。

私の前に鎮座している円空仏は、四十数年前のこの出来事を、つい昨日の出来事のように鮮やかに思いださせてくれている。永田君との出会いは、私にとって、まさに「一期一会」の出会いであった。

実は私も、一昨年心臓を病み心筋梗塞で倒れた。九死に一生を得て、現在療養中で健康をとりもどしつつある。病院の床に臥す中でいろいろな思いが頭をよぎった。死と直面した恐怖も味わった。ふだん真剣に考えもしなかった生への執着の強さにとまどったりもした。

退院して家にもどり、しばらくぶりに円空仏に対面した。「あの笑み」は以前と変わらず、暖かな安らぎを与えてくれた。私は心の中で円空仏に礼をいった。「永田君、お陰でもう少し生きられそうです。いろいろとありがとう」円空仏はただ黙したまま、穏やかな「あの笑み」を浮かべつつ、今も私を見つめている。

永田君のご冥福をお祈りいたします。

亡友寸描

青柳安彦

① 塩野和雄君

塩野君とは、小学校で同級だったと思う。同級生をこんなアイマイな表現でしか思い出せないのは、何とも齒がゆいし、彼にすまないと思うのだが、私自身、軍医だった父親の帰国で疎開先の九州から豊岡町（現・入間市）に移って来たのが、六年生の二学期の十一月だったのだから許していただきたい。

そのかすかな記憶によれば、確か彼は六年中組という男女組の中で男子側の級長かなんかをやっていたと思った。誰が決めたのか、川中入学当時は武蔵野線通学の下級生は稲荷山公園駅から入間川駅まで歩くことになっており、所沢を回ると上級生にお説教を食った。それではというわけでもないのだが豊岡出身、金子方面出身者は豊岡から入間川まで自転車を使う者が多かった。

塩野、柳沢、川上、池谷、豊泉、中村君などがいつも一緒だったと記憶している。時々、入間川付近で駅まで自転車を通う人たちが合流して来たりした。このコースには上級生がいなかったせいか、何となく同志というカタマリみたいな気持ちで、後になり先になりしてペダルをこいたものだ。

そして、そのカタマリの中にも時々、言い合いというよりはカラカイ合いがあったりもしたが、どういわけか彼はいつも私と同じサイドに立っていたような気がする。やっぱり、彼が元同級生の級長として転校生の私を庇っ

てくれていたのだろうか？

在学中同じクラスにならなかつたせい、塩野君といえ、冷たい風の中の自転車通学を思い出す。

② 水村哲也君

水村君が病気で亡くなるなんて考えてもみなかった。野球部でこそ成功はしなかつたようだが、彼のカーブは、私などシロウトの受けられるようなものではなかつた。だから私は単純に彼は運動神経も健康もバツグンのいわゆる「健康優良児」だと信じていたのに。

彼とは中三か高一の頃、中庭に面した新校舎の教室で隣だつた。席の近くに小沢孝志、橋本君、前のほうに中沢稻生、永沢、小川君なんかがいたんじやなかつたかと思う。

その彼から「田園」(ベートーヴェンの第六交響曲)を買つたから聴きに来いよと誘われたことがあつた。SPレコードで五枚の大曲である。当時、レコードファンは大曲といえど同じベートーヴェンの第九に憧れていたものだが、「田園」を先を買つた人は珍らしかつた。彼の話によれば、とにかく長大な曲で、まだ全曲を通して聴いたことがないという。途中で必ず電話がかかつてきたり、御用聞きが来たりするというのだ。

彼の家で「電蓄」で聴いた「田園」はずばらしかつた。ウイーン・フィルハーモニーの音が私の家のレコードのオーケストラと全く違う音に聴こえた。最終楽章のラストをテンポを落とさずにサツと駆け抜けるように終わるやりかたは、かえつて余韻を残し、名残惜しくさえあつた。そしてラッキーなことに電話も御用聞きも来なかつた。

今、我が家にはそのレコードと同じワルター指揮、ウイーンフィルのSPや復刻盤も含めて何人かの指揮者によ

る「田園」のSP、LPやCDがある、しかも録音的にははるかに優れた盤も多い。だけど、録音が古いとは言え「田園」はワルター・ウィーンを以て白眉としたいの、あの日、水村君に聴かせてもらったウィーン・フィルの印象があまりにも鮮明に残っているからかもしれない。

それにしても私たちは今、なんと大らかにいや、せせこましくと言うべきか、なんといい加減にベートーヴェンを楽しんでいることだろう。「田園」の最中に電話が鳴ろうが、客が来ようがそれで「聴き損なった」なんて考えたこともない。それがいいことか悪いことかはさて置いて今一度、この五十分の大曲を電話にも御用聞きにも邪魔されずに聴きたいと言っていた、当時の水村君の気持ちに返ってみるのも大切なことではないかと思ったりする。

③ 中村喜代治君

彼は「キューリ」といった。彼はどちらかと言えば早口なので、自分の名前をキョジと言ったのをキョージーキューリとモジられたんだという説があった。それもあつたかもしれない。しかし、ほんとうは先生(誰だったか?)の質問から生まれたものだ。

「君はどこへ疎開しているの?」

「ヒヤーシカネコ(東金子)です」

「東金子は君ンチの何なの?」

「母のキューリ(旧里)です」

これがウケた。我々が今日、ワープロでも一発では出てこない「旧里」という言葉を知らなかったのか、それと

も彼自身も「郷里」というべきところをちよつと気取ったのか。

そういう語源だったから、もうひとつの、「ヒヤーシカネユ」のほうも通学グループ内では使われていた。「冷やし金子」とも聞こえた。「冷やしキューリ」という連想もあったかもしれない。

同じ豊岡へ入間川自転車通学のグループではあったが、控え目な存在で、むしろ学年が進んでから稲荷山へ入間川を歩くようになってからのほうが印象が強い。時々すれ違うアメリカ兵に道を尋ねられたり、物を聞かれたりしたこともあったが、比較的もの怖じせずなんとかやりあっていたのを思い出す。

そのキューリ君が卒業後、ジョンソン基地で通訳をやっていたのは知っていた。まさかその後鬼籍に入っていたとは知らなかった。

④ 原 武者

彼とは何回か同級だった。本校舎の二階、玄関の上にもちよつと出っ張った教室では隣席だったと思う。だから、三Cの時だ。彼の影響もあってピアノを習おうと思ひ立ち、比留間君といっしょに市内の東山先生の所へ通ひ始めたのがなんと大学受験直前の秋で、オフクロに呆れられたのを覚えている。

彼はヴァイオリンを習っていた。田舎モンの多かった、しかも質実剛健を「売り」としていた当時の校風のなかでは、多少キザと言えないこともなかった。彼はルックスから言っても貴公子というタイプの人だったし……。

先生はN響の岡見さんだったと思う。そのあたりから入って来たんだろうけど、彼の音楽談義は、まだ好楽心が芽生えたばかりの私たちの耳には新鮮なことも多かった。

高三の時、私や比留間、原、新井淳平、田中修君など音楽部でコンサートを企画したことがあった。最初はオケンとの合同コンサートを計画したのだが、当時はそんなことさえ許可にならず、交渉に行ったオケンで音楽の峰脇先生に門前払い同様に追い返されたりした揚句、ウチウチだけの発表会になってしまったのだが、その時ピアノを伴奏してくださる約束だった本校の末広先生が、当日になって突然雲隠れしてしまい、大あわてになってしまったことがある。

我々のへたな演奏にはとても付き合っていられないという、プロのプライドだったか、それとも美人先生に恋の事情でも急に発生したのか、とにかく途方に暮れて前記の東山先生に泣きついた。先生もビックリされ、固く辞退されたが私達のたつてのお願いに根負けして、それでは自分の弟子の分だけは弾きましよう、と言ってくださった。ということと比留間君には伴奏者ができたが、原君は無伴奏になってしまった。曲はヘンデルのソナタ。後のベートーヴェンのソナタほどにはヴァイオリンとピアノが有機的には結び付いてはいないし、練習曲として無伴奏でもよく耳にする曲だったので、無伴奏でも、さほど関係ないだろうと考えていたら、彼は司会者の私に向かって、「無伴奏は先生の都合によるものだとハッキリ言っただよ！ 私の解釈の都合で、なんて言っちゃあイヤだよ」と釘をさして来た。私はなんだか見抜かれたような気がしてギク！ ともしたが、このことで彼を、音楽に對し大変誠実な人だと受け止めることができた。

ある年の選挙で、ある候補者が「私が当選したら音楽教育を盛んにし、各家庭にピアノが一台ずつあるような日本を作ります」と公約したことがあった。原君がそれを大変喜んで、こういう人に当選して欲しいなアと言っていたのを思い出す。

日本はその後高度成長し、それに似た時代を迎えた。今はピアノが余って金をつけないと業者も引き取らないとさえ言われている。これはピアノの台数ばかり増えて、音楽が結局育たなかった日本の悲しい姿だと思うが、原君はどこまでを見届けて旅立ったのだろうか？「こんなんじゃないヨ」と言っている原君の声が聞こえるような気がする。

⑤ 細淵偉佑君

イユウと読む。「ギョロブチ」と言ったのはラクさんだった。大きい、いい目をしていた。入った年の一年二組で私の斜め前にいたと思う。その後、何回か一緒だった。

入学時から目立ったほうで、富沢君が仕掛けた例の「X大人」事件の時にも、堀君などと並んで被害者になった。発覚後、犯人の富沢君が「細淵や堀みたいな大物をからかってみたかった」と告白したくらいだった。

お金持ちの坊ちゃんらしく、当時としてはカッコイイものを一杯持っていた。ハーモニカ、空気銃、シエーフアーやウォーターマンの万年筆。レコードもお父さんのを含めて、いっぱい持っていたし、庭でローラー・スケートを履き、竹箒を持って、ホッケーの真似をする姿も何ともサマになっていた。

彼のお母さんも上品な人だったが、お父さんも素晴らしい人だった。油絵を嗜まれ、教養のある日曜画家といった感じで、私が小学校以来忘れていた絵というものを思い出させてくれたのも彼のお父さんだったと思う。

学校にライカを持って来て、カメラブームの先鞭を付けたのも彼だった。そして私にタバコを教えてくれたのも彼だった。中二の遠足で武蔵嵐山へ行った時、八高線のデッキで佐々木(良)君ほかと一緒にだった。

悪友仲間、不良付き合いはその後も続き、エスカレートした。学生の身分で飯能で芸者を上げて騒いだのはいつ頃だったろうか。とうとう歯止めの利がなくなった彼は、ヨシトラ、トクさん〳〵の大粛正に引つ掛かり、学校を追われてしまった。

その学期の終了式でヨシトラ校長がこのことに触れ「中には瀬戸際で立ち直った者もいる」と言った時、トクさんが前の方から列をかき分けて私のところへやって来て「お前のことだぞ、お前のことだぞ」とツメ寄って来た。確かに私のその前の学期の成績はビリから数えて何番といったキワドイものだった。あの時素直に反省していれば私も、もう少しマシな大学に入っていたのかもしれない。あるいはいっそ、放り出されていれば、私ももう少し苦勞のわかる人になれただろうか？

数十年の御無沙汰の後、川越プリンスホテルの同窓会で吉田君から電話番号を覚えてもらい、電話したのが、久しぶりでしかも最期の彼の声となってしまった。「大頭領（私のこと、大統領とは一字違い）から電話が来るなんて考えてもいなかったよ、会いたいなア」と大変喜んでくれた。不動産をやったり、ラーメン屋をやったり、いろいろ苦勞したそうで「世の中はカネじゃないよ」と繰り返していた。いま、日本中を旅してうまいものを食うのを楽しみにしている。今度一緒に行かないか？ とその時は明日にでも会えそうな元気な声だったのだが……。

⑥ 本田 啓君

本田ブーと呼んでいた。井戸端の教室で斎藤守弘（ドジョウ）、小野陽一（デカメン）、氏家（ウジケ）、大野春雄、小島サンヅク、小沢ライギョ、益子君などの顔が浮かんでくる。細淵、小野天、堀君などの顔も浮かんでくるのは、

もしかしたらあのへんの教室に学年を変えて一、二回ご厄介になったんだらうか？ そう言えば関根さんが復員して入ってきたのもあの教室だった。藤村の「一時間立ちっ放し事件」もその部屋だ。授業時間が始まって我々がガヤガヤやっていた時、入って来た藤村先生が、教壇に立ったままモノも言わず、クラス委員が「礼！」と言っても答礼もせず、我々も着席することもできなくなって双方、石のように凍りついたままの状態でニラメッコが始まった。

永久に続くのかなと心配になってくるほどの長い無言のニラメッコだった。多分、藤村先生も、あるいは終業ベルを心待ちしておられたのかもしれない。カッとなってやったものの、止め女が出て来るじゃなし、どう結末をつけるべきか内心迷い始めておられたんではないだらうか。お互いがニラメッコに倦んできたころ、突如、最後列に足音がして関根さんが軍隊式に歩調を取って前に出た。四角張った敬礼の後で、クラスを代表して先生に授業再開をお願いし、先生と我々を救ってくれたのだった。わア、さすがに兵隊さんはスゴイ！ やっぱりオトナにはかないわなくなつて感じだった。

さて、本田君だが、彼もあの学年の時だとしたら、同じ思い出を持っていたはずだ。あのマジメそうな彼が、どんな顔をし、どんなことを考えながら立ち続けたんだらう？ ただ、その時いたのかいなかったのか、はっきり思いつけないというところも、いかにも本田君らしいような気もするのだ。というのも彼はいつも無口でおとなしくて、私や、小野デカメンや斎藤君が他愛もないことでギヤア、ギヤア騒いでいるのに、いつもニコニコしているばかりで、それでいてちゃんと仲間には入っている、という感じの人だったからだ。

卒業後、真鶴の人で戸板の出身だったか、当時としてはハデなプレイガールという感じの人が我が家に来たこと

があつたが、その人が「川越高なら本田さん、知っているわよ」と言つたのでビックリしたことがある。彼の思わぬプレイボーイ振りを垣間見てしまったといった感じだつた。やっぱり彼は存在すべき所には存在し、遊ぶべき所ではキチンと遊んでいるんだ。恐れ入りました、といった感じだつた。そういえば、彼みたいな男がモテないわけはないな、と改めて思ったことだつた。

⑦ 氏家昭次君

ウジケといつた。井戸端の教室で私の左隣が斎藤ドジョウ、その前が小野デカメン。ウジケは斎藤君の向こうだつたか、後ろだつただろうか。休み時間には大野春雄君や松木君などと将棋ばかりしていたような気がする。私はいわゆる岡目八目でクチばかり出してウルサがられた。

数学、なかんずく微分・積分が得意で、私にくれた年賀状に「今年は人生を Σ して……」とかなんとか書いてあつて、わかつたようなわからないような不思議なものだつた。

もし、富沢君があのまま本校にいたら、お互いに切磋琢磨しあつて、もしかしたら、川高から第二の広中平祐が二人、出ていたかもしれないと思う。……もつとも、先生が追い付けたかどうかはわからない。

私が医者になれなかつたのは表向きは受験当日にヤッシャ・ハイフェッツ（この人が来たらオフクロの葬式を放り出しても聴きに行く、と広言していた大ヴァイオリニスト）が来てしまったから、ということにしているし、事実その前後はすっかりハイフェッツで上の空だつたが、ほんとうは微分・積分が大嫌いですっかり持て余してしまつたのが最大の原因だと思つている。

難しい問題が出るたびに「あアウジケがいてくれたらなア」と懐かしく思ったものだ。

(後記)

本文の人々の訃報は、いずれも卒業後だった(私が最初に聞いたのは原君だった)。

私たちの在校中に亡くなったのは、先生では鈴木楽山、学友ではバスケットコートで心臓麻痺を起こした永田君だけだったと思う。激動の時期にしては少なく、不幸中の幸いというべきかもしれない。しかし、友人の訃報を聞くことは年とともに慣れていくものだろうか？ それとも先へ行くほど寂しく感じるものなのだろうか？ いずれにしても今の時点では「何故？」「早すぎる」の思いが先に立つ。

考えてみれば人生は長くなった。私たちの小さい頃、六十歳といえども立派なお爺さん、お婆さんだった。「人間五十年……」がそのままの現実だとしたら、もう私たちの人生はとづくに終わっているはずだ。しかし、現実には私達はまだまだこれからという部分や、やり残していることがいっぱいあるような気がする。貪・瞋・癡(煩惱)との果てしない戦いは、ウカウカとトシなんか取らせてはくれないようだ。

「もう、トシだよ」という一方で、やりたいことがいっぱいある。見たいもの、食いたいもの、行きたい所、聞きたい音楽、まだまだナマ臭い借りも貸しもいっぱいある。その全てを、半ばで打ち切ってしまった人たち、さぞ無念だったことだろう。

生きている間は単なる知り合い、同窓の距離でしかなかった人たちも、この年になって思い出すと、人生のかけがえのない部分を分かち合っていたように思えてくる。もう私たちの今見ているものは彼等には見えず、私達の耳に聞いているものは彼等の耳には聞こえていないのだと思うと、何かに向かって大きな声で怒鳴りたくなる。

……心から彼等のご冥福を祈りたい。合掌。

思い出すままに

福田（嶋田） 實

大方の仲間達と同じように、還暦を過ぎた今も、相変らず与えられた仕事をしながら消日できることは幸せというべきでしょう。

決して頑健な身体ではありませんが、やや一病息災的な考え方で、我が身を過信もせず、さりとしてさほど心配をすることもなく、有り体のままに過して来たことが平凡ながら今日に至った理由でしょう。

「大過なく」という言葉がありますが、それは「何もしないことだ」という人がおります。

私の場合もこれにあてはまりましようか。中学、高校と六年間の生活を振り返って見て、これと言って強く印象に残るようなことがなかったのも、実はこの「大過なく」の見本のようなものだったのかも知れません。

加えて、高卒後の十数年は極めて限られた部分を除いて、社会一般とおよそ没交渉の明け暮れでありました。とりたてて書くこともないので……と決ってみても、そんなことは言い訳にもならず、余り頑になると、これ又付き合いが悪いということになってしまいます。

この度も、関わる方々に多くの迷惑をかけてしまう仕儀と相成り、まずは心からお詫びを申し上げる次第です。とは申しまして、まあ昔馴染みのよしみでお許しをいただける事と勝手に決め込んでいる厚かましさも年の功

というのでしようか、そんなことを考えながら、何かないかなあと、あれこれと思いを巡らすうちに、もう逢うことの出来ない人のことや、滅多に逢ったことのない人についての消息が脳裏をよぎりました。

私達昭和二十年に中学に入った者の中で、薬学の道を志した者が私の知る限りでは四人おりました。

一人は志木の原武兄であります。

絵をよくし、二科展にも入選したとも聞いております。卒業式の校歌の伴奏も兄ではなかったでしょうか。

たまたま同じ学校に入りましたが、翌年の夏だったと記憶しております、病魔に冒され療養を余儀なくされました。何回か志木のお宅に伺ったこともありませう。

暫らく在籍されましたが、その後の恢復が思わしくなく、やや長期の休養を強いられ、そのために薬学の道は志半ばにして断念されました。

時折の消息に結婚をされお子様にも恵まれたと聞きましたが、のちに夭折された旨伺い、告別式に参じた記憶があります。——もう大分昔のことになります。

数年前奥様からいただいたお便りに、その一粒種のお嬢さんも結婚されたとか伺いました。

二人目は越克己兄であります。当時川越の志多町に住んでおられました。

暫らく後になってから、第一製薬KKの研究所で研究者として活躍されていることを間接的に伺いましたが、のちに健康を害されて故人になられたとのことでした。

第一製薬KK時代前後の兄の消息は存じませんが、恐らくは立派な業績を沢山残され、今日の第一製薬KK繁栄の基礎を築かれることに、大いに寄与されたのではないかと思います。

いずれも、それぞれに大変秀れた資質を持つておられたお二方であります。

只、友人を亡くしたということにとどまらず、社会的にも大きな損失であり、今以て極めて残念な事であると思っております。

ここに謹んで、両兄のご冥福を心よりお祈りする次第です。

三人目の方は石倉俊治兄であります。平方の旧家に生まれて自転車で通学しておられました。

同窓会名簿にのつておりませんので、何時の頃か他校へ移られたのでしょうか。その間の詳しいことは承知をいたしておりません。

話は大分逆のようですが、昭和二十六、七年の頃、山手線池袋駅でばったりお逢いをし、その時の話に東京大学へ入られたと伺った記憶があります。

後年、東海大学病院望星薬局の総責任者であられ、その道では極めて高名な、石倉千代治大先輩にお目にかかる機会がありました。たまたまご出身が平方で川中のご卒業とのこと、又東松山市の醸造元に親戚がある等々、色々な縁で話のはずむ中で、俊治兄が氏の令弟で薬学を専攻され、東京理科大学に籍をおかれている由承りました。

数年前、私達の職場に理科大卒のフレッシュマンが参りましたが、その者の話では石倉教授はなかなかの酒豪であり、学生とのつきあいもよく、学生間には大変人気のある教授ですということでした。

数日前、目にした雑誌にも論文を発表されており、東京理科大学薬学部教授としての兄の健在振りを垣間見た次第です。

わが同窓のご活躍まことにおめでたい限りで、更なるご精進を陰ながらお祈りいたします。

さてシンガリを務めます某^{ソレガシ}はと申しますと、比企丘陵のはずれ、鄙びた田舎の大変静かな生活環境の中で、のんびりとマイペースで仕事をいたしております。

時に刺激を求めて、都会の雑踏に足をふみ入れ、汚れた空気を存分に吸ってくるという、大変恵まれた日々を送らせていただいております。

誠に有難いことと感謝をしております。

六十年の歳月は長いようで短くもあり、短いようで矢張り長いということになりました。

「歳歳年年人不同」同窓諸兄の一層のご健康を祈念する次第です。

耳順雑感

吉田景美

六十にして耳順^{しんが}とは、人生の節目のあり方を示した名言である。しかしその六十歳を迎えた今の私には、何となく違和感を覚える所がある。現代は平均寿命が八十歳を超える高齢化社会である。四十、五十は鼻たれ小僧とも

言われる中で六十歳をどう位置付けたらよいのだろうか。

年金生活を送るにはまだまだ先は長いし、しっかりと働かなければ余生を楽しむどころの騒ぎではない。世の中は耳順うと悟るにはまだまだ耳逆うことが多い。六十代はまだまだ生臭い年代なのである。

ともあれ、仕事の面でも健康面でも、又、生活の上でも六十歳は一つの区切りの年であることに違いはない。どう区切るかは人様々であろうが、私は自省、自戒の年と理解している。

記念文集の案内をいただいた時、何か一つ書こうと考えたのだが、いざ原稿用紙を前にすると文才のない私にとって文章をまとめるということが如何に至難の業かということをお願い知らされるだけで、一向に筆は進まない。

水口兄をはじめ、とりまとめの衝に当っておられる諸兄には大へんなご迷惑をおかけすることになってしまった。紙面をかりて改めてお詫びしたい。

私にとって川越における六年間の中・高校の頃は、既に浄化されたメルヘンの世界となっているからかも知れないが、どの記憶をとりあげても懐かしく、且つ鮮明である。この頃のことを想い浮かべると心が和む。そんな記憶の断片の中から二つ三つとり上げたものをまとめて拙い文章をしめくくらせていただきたいと思う。勿論、私の記憶違いもあろうし、偏見も含まれるかも知れないが、現在の私の記憶の断片ということでご容赦いただきたい。

永田君の死

キーワードの中にある永田君の死は、早過ぎた死ということだけでなく、一つの事件として私の記憶にとどめられている。

それは、心臓に持疾を持ち過激な運動を禁じられていた同君が体操の授業、それも運動量の多いバスケットボー

ルに参加し、その最中に発作を起し不帰の客とられたことに對する疑問と、たまたまその時は担任不在の自習時間であったことが結び付いて、監督教官の責任問題にまで発展しかけた事件となったということである。当時の体操の担任は石川先生であり、いろいろと物議を醸したが結末がどうなったかは詳らかではない。級全員が校門前に整列し遺体を見送った情況は鮮明に想い浮かべることが出来る。

永田君の死という事象は級友の記憶に残り、当然ながら彼の名前は名簿にはない。

天狗

忍田豊作先生の幾何の授業は、私にとって忘れられないものである。達筆だった先生は、定理を口頭で述べられた後、必ず板書されたものだった。その文字の見事なことはいうまでもないが、フリーハンドで画かかれる図形は、直角三角形であれ円であれ、後で定規をあててみると寸分の狂いもなく画かれたものだった。温厚な先生が自らの板書の癖を生徒達に逆用され、ご自分のニックネームである「天狗」を黒板に大書させられ、憤然として授業半ばで退室されたという逸話は、生徒のユーモアと、先生の性格を示すものとして今では伝説となっている。ただし、何回成功し、何回失敗したかについてはさだかでない。

細淵偉佑君のこと

細淵君について何か書けとの青柳兄からの要請があったのだが、よく考えてみると、エピソードというものがない。

川中に入学した当時、私は上級生は勿論、級友にも大人が多いなという印象が強かった。その頃は高等科一年を経て入学して来た人も多く、また私が貧弱な体格だった故もあってそのように感じたのかも知れない。

そんな大人に見えた級友の一人が細淵君だった訳である。彼は東京との県境にある元狭山村の出身で、村長の息子に生れ、恵まれた環境に育ったいわゆるボンボンタイプで、硬軟併せた性格の持ち主だったような気がする。中学二年の頃だったか、私は彫刻刀を使ってリノリウム板に蔵書印を篆刻するといういわゆるゴム印彫りに夢中になった時期があった。篆字体の持つ不思議な美しさにとりつかれ、自分のものばかりでなく、頼まれて級友の蔵書印も彫ったりしていた。字体を調べたり、配置を考えたりで完成するまでには結構時間もかかるのですぐ出来るというものではなかった。そんな或る日、彼から突然自分のも彫ってくれという依頼、それも彼独特の強引さで無理矢理引き受けさせられた記憶がある。

やっと完成して彼に手渡した時、喜んだ彼の顔がとてもやさしく、ふだんの突っ張った表情とはまるで異なったものだったことが強く印象に残っている。又、その時の報酬が、大判の封筒一ぱいの煎り大豆だったことも食糧難だった当時の世相を反映して懐かしく思い出される。

次に会ったのは、彼の母校である元狭山小学校だった。私は入試に失敗し、やむなく代用教員として赴任したのが元狭山小学校で、五年生を受け持っていた。一学年上の六年に彼の妹がいたことから私のことが伝わったのだろうが、一度彼が訪ねてくれたことがある。彼の当時の評判は正直のところ余り芳しいものではなかった。訪ねてくれた時かなり派手な衣服でどこなく玄人っぽい感じがしたが、久闊を叙した程度で大した会話はなかったが、その時も私よりも大人という印象だった。中学・高校を含め、これまでの長い期間で、彼との接触は極めて数少ないものである。にもかかわらずその数少ない出会いが鮮明に残っているのは今でも不思議な感じがする。進学の為、小学校を辞めて以来、全く彼と顔を合わせる事がなかったが、同窓会で青柳兄から彼の消息をたずねられ、たま

たま、私の教えた級の同窓会に担任教師の一人として招かれた時、調べて連絡した訳である。その後時日を経ず幽明境を異にされたと聞いてびっくりした。良いにつけ、悪いにつけ自分の思う通りの生き方をした彼だが、本質は時代に敏感なシャイなシャレ者だったという気がしている。心から彼の冥福を祈るものである。

豆事典・万年筆池ポチャ事件

佐藤先生が授業中に万年筆をいじっているヤツを見つけた。矢庭に近付き、万年筆を取り上げてポイと抛つたら、運悪く窓の下の池へポチャン。……大慌てで全員を動員し、池をさらったがとうとう見つからず、青くなって詫言を入れられた。当時、万年筆はそれほどの貴重品だったわけだ（窓から頭を外に出して逆さ吊りにしたら……という説もある）。

X大人

中一・二組の富沢君。東京の人。入試の時の短棒投げは二メートルだったが数学は大天才だった。ある朝、クラスの「名物男」たちの机の中に「本日〇時、××駅に来い。X大人」というメモが発見され、それが数日続いて大騒ぎとなった。これがX大人事件だ。数日後、富沢君の自首で解決。曰く「クラスの大物を一個所に集めてみたかった」だと。

川中時代のこと

金子 勇 二

初めに、記念文集を作るといふ機会を設け、私如きにも寄稿の誘いを下さった発起人の各兄に厚く感謝を申し上げたい。

他の人達と同様、戦争に関しての体験や思い、そしてそのショックは、今思い返しても語りつくせない。今語るとすれば、厳しく痛烈であつた体験も風化が大きくて誰もが知っていそうな気がしてとても語る気がしない。

私は、中学・高校の六年間、同期生の多くに接しながらいろいろ世話になつたままである。

その後、成人してから、仕事を通して幾人かの同期生とつきあい、助けられ励ましあつて今日に到っている。

この時、記念文集への寄稿の幸運が与えられた機会に当って、在学中一時期を共にした友人——未だに心のどこかにあり、時々想い出す友達であつたと思う人物について書きたいと思う。それは、市村栄一君、小鷹邦彦君、田中修君の事である。

市村兄は、四十歳余りで県議會議員の身分のまま早逝したが、山岳部員として、幾度か山行を共にしたばかりでなく、更にはクラスを超え、いろいろな時間を共にし議論めいた言葉を交わす事が多かつた男である。

彼は複雑な家族関係の中に育ち、多くの姉弟の中で苦勞を重ねていた。当時の山の仲間の集まりの中で、いつも核のような形で我々の青春の取り止めない生き方に場を作る役割を果たしてくれたと思う。

苦勞人の故か、大人びた考え方で我々を驚かす半面、恐ろしい程の感傷的な面と、ロマンを追い続ける多感な若者の面を感じさせる万年青年であった。

大学の農学部（茶業経営の夢を果すため）を憧れていたにも拘わらず、高卒のまま家業を継ぎ、政治家として留守勝ちな父を助け、地域4Hクラブのリーダーとして頑張りながら、茶業の店の拡張に努力していた。

県議であつた御父君の病死後、地域から推され体調思わしくない中、県議選を闘い、若くして埼玉県議会議員に当選した。選挙戦中、時々顔を出した事務所で数分「金子悪いな」といつつ「この人は川高の時から友達なんだ」と運動員に紹介してくれたり、「一寸体調がおかしいが」と付け加えながら、また元氣よく選挙カーに乗りこみ出かけていった姿を今でも忘れる事ができない。少年の頃から世話好きの上、頼まれると否と言えなかつた彼の姿がそのまま見えたようであつた。

ハイネの詩、ワーズワースの詩のノートを見ながら口ずさんでみせた彼のそばで、私も思わず感傷的な想いにくけつたものであつた。

彼の死から二十有余年、今生きていたら、県政から国政へとロマンに満ちた政治の流れがこの地方にもあつたのではないかと思う。

小鷹兄について、私にとって遠縁に当るが、その存在は中学へ入学してからお互い初めて知つた事である。

蒙古派遣軍の砲兵隊の司令官という職業軍人であつた御父君は、敗戦により内地へ復員後、彼が中学二年生のとき、亡くなってしまつた。

小鷹君は敗戦と父の死というショックの故もあつたのだろうか、およそ職業軍人の子とはとても考えられない程

瞑想的であり、静かでありながら人恋しがり屋であつた。田舎育ちの私はそんな彼がとても好きであつた。

いつも友人達といながら一人でもの思いにふけり、自分でよく咀嚼したものを突然問いかける事が多かつた。語りあう中、私の知識や判断力を超えるような内容で驚かされあわてさせられた事が多い。彼は私に対し、私の読書の量、読書の範囲の狭さをいやという程思い知らしめた最初の男である。ロシア、フランスの文学作品、自然科学の事、そして哲学に関する事、それ等の世界の事を教えてくれたのは彼であり、私も負けたくない一心で少し蓄る事ができたと思う。

彼は遠い亀井村（現鳩山町）のはずれから、八高線、越生線、東上線と乗り継ぎ通学していた。

御父君の生家の一角の離れを借りて住んでいたが、伯父御の無理解か、また当時の事情もあり、夜遅くまで電灯を使えなかつたという。本は図書館で借り、大部分電車の中で読んだという。

私の生活の中、登山中の思いの中で中学、高校、大学を通して中味が豊かであつたのは、彼のお蔭であると思う。二人共、はからずも教師になつた。彼は教員生活の中、才能豊かであつたにも拘わらず管理職を目ざさなかつた。酒の世界のあやしさに憧れ、あまり強くないのによく酒を飲んだが、飲めない私を相手によく言つた言葉は「お前は似あうけど、俺は苦手だ、平ひらの方が余程毎日楽しいよ」と、その彼も定年を前に五十九歳で逝つた。二人はお互い会いたがつていたにも拘わらず、私の都合で時間が取れずにいる間に、ほんとうに知らぬ間に休職していて、ひっそりと黙って逝つてしまつたのである。「金子よ、お前がもう少し飲めればもっと気が合うんだけどなあ」、二人が教師になつたばかりの頃、すっかり酔つた彼の言葉であり、今でも時々想い出す言葉である。

田中修君の事。田中君と知りあつたのは高二の初め頃であつたと思う。山歩きの事ばかりが中心で単純な生き方

ばかりであつた私は彼に惹かれた、私の周りによく見られた勉強好きや、楽しい学校生活、部活動熱中型とは違つて、或る独特な雰囲気を感じられたのがその理由であつたと思う。平素進学向きの勉強をさぼつて先の見通し暗く、内心不安だつた私にはびつたりの出会いであつたのかもしれない。私の憧れであつたバイオリンを上手に弾きこなす彼の音楽部の練習のない日の帰り道、さぼつて見る映画、買い食いをしながらの下校、よく一緒に帰つた。小鷹君とは全く異質の時間であつた。私にはよく分らなかつたが彼は一方的に家庭の事を暗く見つめている感じであつた。何一つ不足ない私の家族の感じからは全く取り付けないで、ただ何となくそんな彼を見ているだけであつた。彼の口から出て来る哲学の話題はキエルケゴールのような人間性の否定のようなものが中心であつた。私の知つたか振りした哲学とは、カントやパスカル、プラトンといったようなオーソドックスのものであり、私の理解からかけ離れたものでありながら、彼の暗いかげの感ぜられる持ち味に、畏れと憧れを感じたものだ。

特に三年の後半、入試の勉強がはかどらず落ちついていられた事が思ひ出される。私と異質なニヒリスティックな彼としゃべりあつてるとき、不思議に落ち着いていられた事が思ひ出される。

異質な二人が、二本の白線の入つた破れた帽子をかぶり、受験生としては不思議な程現実離れた、おしゃべりし続けながら卒業した。やがて彼はスーツの襟元に「Sophia」のバッジをつけ上智大の哲学科へ進学した。

大学へ進んだ彼の下宿を訪ねた後、空腹だという彼と新宿でチャーシューメンを食べた。その時、代金に取つてくれといつて、革表紙の独和の辞典を押しつけた。今、少し縁がめくれ、そり返つたヒゲ文字の辞書が手元にある。その後少し経つて、新宿柏木町の下宿を訪ねたが彼は転居してしまつたと、若い女の人が出て来て言つたのは四十年前の事であろう。その後の消息は途切れたままである。

或る時、同窓の誰からか「田中は独訳の仕事をしている」という話を聞いたが、その後健在なのだろうか。この記念文集発刊の機会に消息が辿れば逢いたいと思う。何と勝手な思いかもしれぬが、何か中途半端のまま途切れた事が気になってしかたがないこの頃である（その後、編集室の連絡により相互健在を確認し合えた）。

想い出いろいろ

金 島 壯 行

その一 昭和二十一年の中二の頃かと思う。校庭を挟んで、教師と生徒が対峙した……という大袈裟なのだが、その日、次が体育の時間で、皆晴れ晴れとした顔で中庭に出て来た。ところが「この時間は初雁球場（当時整地されていなかった）の除草をやってもらう」という指示が来た。「またーっ？」と皆、しきりに不満を鳴らす。I先生は遠く校庭の向う側（武徳殿入口）で我々を待たされた。突如、我々の群の中から「おーい、アッサカー」と戦国時代の武将のようなどら声が、あなたへ向って送られた。ふり返ると、堀陽君が手の平をラッパにして頬をふくらませて怒鳴っていた。アッサカーとはアダ名であったから、面と向かって言える代名詞ではない。堀君も、声変わりのした自分の声が向うへ届こうなど夢にも思っていなかったに違いなかった。ところが、地獄耳とも言うのだろうか、耳敏く罵声らしいと察したI先生は、ゆっくりこちらへ向かって校庭を横切ってこられた。緊張して佇立している我々の間に入られ、「誰だ、今大声で叫んだのは」とじろりと見廻された。しかし先生の顔は意外とポーカーフエースだった（と思えた）。今の時代では全く考えられぬことだが、堀君が一步進み出て、「私がやりました」と控

え目ながら、きっぱりと名乗ったのだった。I先生は大して怒られなかった。それが堀君だったせいか、それとも代名詞を認めるのを憚られたのか、未だに判らない。

その二 私は疎開組として四月半ばだったろうか、川中へすべり込んだ。体操の時間はひどく緊張した。「右へならへっ」鋼のように遅しく、型の決まった仲間の中で、どうにも決まらない自分、さらに運の悪いことに中一の時はクラスで一番背が高く、先端をつとめねばならなかったのである。二番手の平岡(泰)君は遅しかった。「おっす」「やっば、そのなんだな」など凄味があつて驚いたものだった(やっば、はストレスは違うけれど、今、日常語になつてしまつているのが面白い)。

同じ頃、朝礼後の行進の時、府立四中から来た土屋君(今、米大学教授とか)が右手に右足を添え、左手に左足を添えて緊張した行進をしていたのが目に浮かぶ。頭のいい奴は変わつていゝなと妙に感心したりした。ついでに言へば、同じ都会組の森岡君が、友に数学を教える時の言葉が「……でしよう？」から「……だんべ」に変わつていったのもこの後間もなくなつた。

その三 「文法とはだなあ……」潔癖な島崎先生の緊張した授業中である。注意散漫な私は隣の友人に何か話しかけていた。それを目撃された先生は、突然「そのやつ」と激しく叱責され、私は前に呼び出された。硬直して教壇の傍に。パシッ、右によろける。パシッ、左によろける。教室のはしからはしまでである。往復六、七回の記憶がある。きつかった。肉体的に我が人生最大の鞭だった。お陰で文法はそれから得意になつたのだった。

その四 佐藤(徳) 先生の授業中。指名読みさせられた私は、源平盛衰記と書いてあるところを源平衰盛記と逆に読んでしまった。皆がドツと爆笑する。何故だか判らず、きよんとしていた。私は小学校以来、源平衰盛記を読んでいたのである。また或る時、先生は、おずおずと手を挙げた私を指された。私は「日に日に新たです」と正解を答えた。先生は「金鳥は額の上がり具合がかっこいいからなあ」とご機嫌で、皆の爆笑をかった。喜怒哀楽の激しい先生だったが、あのめりはり、生徒への感情移入は、何よりも学問を愛された先生ならではのであった。

時は流れ、昨年十二月、朋友、小鷹邦彦君の訃報を奥様の年賀欠礼のハガキで知った。一瞬目を疑った。一昨年秋の同窓会に姿を見せなかつたので、帰宅して彼に電話をした。彼は「遊びに来いよ。駅前の酒屋で聞けば道が判るから」と今にして思えば弱い声で、しかし氣持の籠ったいつもの優しい声で誘ってくれた。行こう行こうと思つているうちの、全くの思いもかけぬ訃報だった。口惜し涙がとまらなかつた。川中時代から哲学を語り、人生を語り、よく理屈をこねまわし合つた仲だった。戦時中、川越駅が銃撃された時、直下に一緒にいた彼の沈着冷静さは見事だった。彼の父は陸軍中佐で、中国から復員された後亡くなられたが、その後を母子で頑張っていた。父君の遺品の舶来カメラで、二人して車窓風景などを好奇心一杯で写したものだつた。かけ替えのない友を失つてしまつた。それから旬日を経ずして、私の妻の入院、手当の甲斐はなかつた。平成五年の正月は失意の日々だつた。しかし、医師遠藤公平君に長年にわたる妻の医療について相談相手になつてもらえたのが何より有難かつた。

遠藤君は高校時代机を並べ、文学や未来を胸ふくらませて語り合つたボゾムフレンドである。豊かな経験に裏打

ちされた的確なアドバイスにどれだけ救われたことか。彼の句に「父恋しこたつ布団の菊模様」というのがあったが（獺祭）、あの頃、父君が他界されたと聞き、そんな荒波をくぐって、人を救う医療への初志を貫徹していったのだなと改めて尊敬の念を深めた。前出の堀君も先日電話したときの話の中で、七歳の頃父上を亡くされたのだと言っていた。何年前か、彼も大病を患ったそうだが、電話で昔に変わらぬ高らかな笑い声をたてている。優等賞をいつもいただいていた佐々木雄司教授にも、精神衛生の面で懇切なアドバイスをいただき、お世話になった。狭いながらもいろいろな交遊があった。代用教員の頃、私の職場に商用の道すがら寄ってくれて、いろいろ夢を語り合った水野洋策君、幾何の秀才でありながら、時代を予見して当時からポルノの世界に関心を寄せていた小沢（？）君、文士を目指していた斎藤清一君、いろいろな食べた仲間である。妙なことがあるものだと日記に書き留めておいた農家への勤勞奉仕の時、一緒にじゃがいもを食べた仲間である。妙なことがあるものだと日記に書き留めておいたら、その翌日、彼から電話がかかって来て、無事暮らしているか、たまたま気になったのと言う。テレパシーであるものだなと思われた。昔、NHKへ番組内容の問い合わせの手紙を送ったら、何と菅間君から懐かしい言葉と詳しい資料が送られてきたり、思いがけないことも多かった。キザな言葉だが「作家の創作活動は処女作に向かって永遠に回帰する」という言葉をNHKの何かの番組で聞いた。今還暦を迎え「還暦とは子供へ帰ることである」と聞くとなんとなく判る気もする。驚くべき記憶で、往時のキーワードを送ってくれた委員に感謝し、皆のエピソードを読める日を楽しみにしている。

一本の糸

小鷹文子

(故小鷹邦彦君夫人)

今は亡き夫は、定年を二年後に控えての退職、そしてほっとする間もなく腰痛に悩まされつつ六十歳を待てず旅立ちました。

終戦後間もなく父親を失い生活も不安定な中、長男であるが故に、家のこと、弟達のことを案じていた夫は高校生活を終わろうとする頃には胃の手術を受ける結果となりました。その後、生活を支えるためには就職の道よりなく、越生小、亀井小、鳩山中と教員の道を進みましたがその間、学びたい強い希望に支えられ勤めを切りあげての夜学に通いました。その頃の住居は越生駅から北へと遠く、最後まで講義を聞いていると越生線がなくなるのでそれが残念だったと聞かされたこともありました。今にして思えば東京は遠く感じる中、周囲の協力を得ての卒業だったことを改めて感じます。

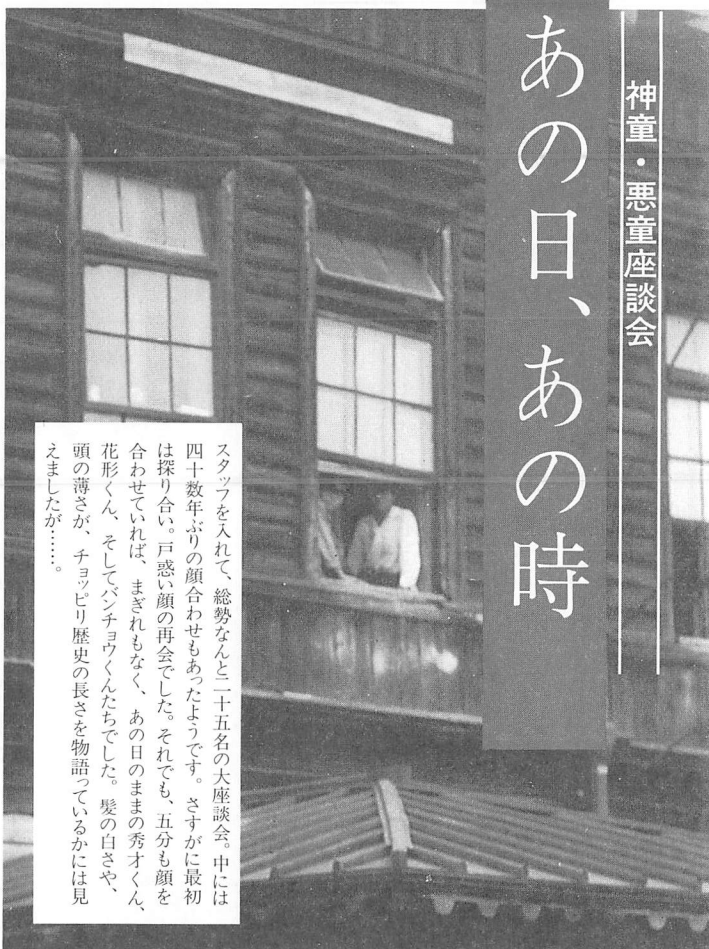
その後、中学校を三校廻りましたが、中でも飯能一中時代に、松田丑二先生をはじめとする諸先輩の方々との間に出来た交流会は、その後もずっと続いておりました。

そして遂に夫は旅立ち、先輩の皆様に見送っていただく身となりました。あの日から、一年余月、ここに改めて夫の生涯に想いをめぐらせますと戦中戦後の波にもまれながらも無口な中に、人をおもうやさしい心根が痛くさえ感じられます。

「夏爐冬扇」これは退職にあたり夫が選んだ言葉ですが、この言葉もたぶん川高時代に学び、多感な頃から折にふれ夫を支え包みこんできた言葉の一つでしょう。こうしてみますと高校卒業から四十余年、夫の中には細くともしつかりと強い一本の糸が切れずにつながっていたことが感じられます。

本特集の原稿の中にはご健在の方も登場しますが、文集構成上、ここに収録させていただきます。皆さんのご諒解を得たいと思います。(編集室)

あの日、あの時



スタッフを入れて、総勢なんと二十五名の大座談会、中には四十数年ぶりの顔合わせもあったようです。さすがに最初は探り合い。戸惑い顔の再会でした。それでも、五分も顔を合わせていれば、まきれもなく、あの日そのままの秀才くん、花形くん、そしてバチョウくんたちでした。髪の毛の白さや、頭の薄さが、チヨビリ歴史の長さを物語っているかには見えませんが……。

長島 僕は川越市内の第三国民学校出身だが入学試験をやった記憶がないだけ……。

朝久野 筆記試験はなかったが、口

頭試問と短棒投げと跳び箱があった。

山田 「B29が飛んできた。十一人乗りだ。では十一機撃墜したら何人殺

松岡 入学したのが昭和二十年四月、何といっても第二次世界大戦の最中だったわけだが、長島君からひとつ。

したか」なんて計算問題だったな。

新藤 俺の時はリングの計算。立ったままやらされたのでドキドキよ。

小野 よく憶えてるなあ。

山田 口頭試問のやり方を小学校で教わった。まずお辞儀をするとか。

あの頃の所沢町は小学校が一つだけで十人位しか受けさせてくれなかった。村の方からは一校一人だけ。だからトップクラスで川中出れば青年

団長という時代だった。(笑)

松岡 村一番の神童ってわけだ。

堀 (新藤君をさして) ほんとうのシンドウはここにいるぞ。(大爆笑)

長島 我々の入った頃は二百人、現在は四百五十人位採っているそうだから計算上は今の倍以上の競争率だったことになる。

中村 山田君の言うように多分小学校の方で絞りこんで出願させたんでしょう。だから内申書と口頭試問あたりか何かで選んだものと思う。

松岡 小野テンも山田スカチンも野

球部に入ったくらいだから短棒投げは有利だったろうね。(笑)

山田 鉄棒もやったし、跳び箱も、城壁のぼりまであったよ。そっちはお手のものだ。

東 口頭試問では尊敬する人物は誰かというのもあったよ。

松岡 東京から疎開の人達が入ってきたがその辺の話をどうぞ。

内海 東京から来た連中は試験免除だった。東京でもやらなかったけど

川中でもやらなかった。内申書は直前まで隠してあってお前はどこへ行

けとまあ多少は勉強させてね。家を焼かれて逃げ回っていたものだから

成績なんてそれはヒドイもんですよ。正木 校長が一人ずつ面接して「何

となく元気がないけど大丈夫か」とか「成績が良くないな」とかいやな

ことを言われたね。それにしても第一印象は運動(教練)の盛んな学校だ

なあという感じだった。(笑)
中村 運動なんかあまりしてないが、

教練ではトップブリしごかれたね。Y軍曹とかK中尉がいた。

朝久野 配属将校っていうのは軍では一番扱いにくい者が回されてやつたらしい。

松岡 陸軍中將の孫が言うんだから間違いない(大笑)。お父さんも少佐だったしね。

長島 乗用車の前部に中将旗を立てて学校に見えましたよね。スゴイなあって子供心に思ったもの。

朝久野 敗戦のショックは大きかった。祖父は川越市長よりも高額の恩

給を貰っていたのが、一夜にしてパアになってしまった(笑)。昨日まで

ヘイコラしてゴマすっていたのがパツと変るんだよね、人間なんて。戦

争中は先生方もいろいろ言っていたよね。軍隊を拝み奉るようなこととか。

それが一夜にして変ってしまったでしょう。人間信用しちやあいけない

と強く思った。私は日本が戦争に負けてよかったと確信している。万一

勝っていたら、私なんぞ世間知らずの全く使いものにならないボンボン

になっていただろうな。
松岡 非常に貴重な話だね。

小野 そうそう、確か関東第五軍の司令部の壕を作ったんだよね。防空

壕じゃなく木の梁の入ったもので地下三階まであった。

山田 通門を入ってすぐ左にあった土俵の下だろう。空襲警報が発令になるとわざわざ飛び込んだことがあるよ。モールス通信をやってて全

部入ってくるんだ。「只今鹿島灘上空をB29何機」とか。それを聞きたく

て二度入ったら三度目にはツマミ出されちゃった。(笑)

松岡 青木カンちゃん相撲部だったから詳しいんじゃないの。

青木 さあ。土俵の下はどうだったかなあ。

小野 モッコ担ぎやらされて、やつとできたと思ったらすぐ終戦だもん

なあ。こんどはその復旧だよ。動



左→青木、東、新藤、西川、小野

員にも行かされたよね。

長島 勤労働員といったね。日清製粉とか……。

青柳 石川蚕糸と日清製粉。

齊藤 半分は農家に行ってた。

長島 乾パン貰うの楽しみだった。

朝久野 パンを焼いたモチでしょ？

新藤 黄粉きなこの袋を落としたら中味が

コボれてしまった。皆でなめたら甘

くてうまいんだ。上から見ていた石

川アツパク先生にコテンパンに怒ら

れたよ(笑)。それと農家に行くとお

むすびがもらえた。

青木 ジャガ芋だね。皆に配って

余ったらコレ(懐にしまいこむマネ)

だよ。(笑)

松岡 日清製粉に行ってた時、P51

の機銃掃射でやられたんだね。

新藤 川越駅が銃撃され炎上した時

八幡様の所にいたが、又やられるん

ではないかと心配して志木まで歩いて

帰ったよ。

小野 南大塚駅で撃たれた。

齊藤 新河岸でB29が撃墜され、見に行ったことがある。

新藤 その時米軍捕虜二人が川中に

連行され、西川君のおやじ先生が通

訳したがチンプンカンだった。

青柳 あれは西川先生だけじゃなく、

その前の福島先生と久保田先生もだ。

通じなかったのは有名な話だよ。

小野 B29には気密室があるんで乗

組員は皆半袖だった。「見ろ。アメ公

は着るものもないんだ！」(笑)

齊藤 それを皆がマトモに受けてい

たんだからなあ。

当時の学校教育、

先生のことなど



西川ゲール先生

松岡 あの当時の教育について高萩村一番の神童ひとつ……。

東 川中に入ってからすぐ実力試験をやりましたよね。二百人の順位が公表されて百六十二番だったの、よく憶えていますね。これは秀才が大勢いるなど驚いたな。それと敗戦後の九月だったか上級生が招集して生徒集会のようなものを講堂でやったことがあったね。先生を呼んで弾劾する集会。先生にしてみれば夏休みを挟んで前と後とで価値観が変わったようなものだから苦しい局面に立たされたものだと思うね。その時どの先生だったか、私はそんな信念で教えてきたのではないと全身を震わせておっしゃったのを感動して聞いたね。

中村 木村再先生だったかもしれない。

東 川中には確かに軍国主義的なそういう教育もあったけど、そうではない教育もあったのではないかなと思いますね。もっとも私も農家に行ったりして教室では余り勉強した記



左→東、新藤、西川、小野、正木

憶はないけどね。

沼田 時間割をみると体育、作業、作業と教練ばかり。本なんかみることもないんだもの。だから俺でも保ったんだよ。(笑)

長島 担任が原田アー坊先生だった。彼は「この戦争は引分けに終ればオンの字。このままでは日本は勝てない」と断言されたのを覚えている。当時の感覚ではものすごい非国民だよ。授業のことはあまり覚えてないが……。

青柳 そのイメージはあるね。そのアー坊先生が「あれは軍閥にだまされていた」と言ったんだよね。

中村 原田先生はたしか駒沢大学を卒業しそのまま川中に来た。戦争中でもきちんと背広を着ていた。やや派手な感じのね。それと使い方の意味がわからないけどさかんに「概観的に言え」と「けい、かん的に言え」の二通りの言葉を強調していた。

青柳 あればね、「概観的」と言って

ひやかされて「けいかん的」としたんだ。

中村 こわかった先生の一人に国文法の島崎先生がいた。ピリピリしててすぐビンタやつたでしょう。

山田 生物の横田先生も。

新藤 戦争終ったらガラツと変った。齊藤 横田ゲジ先生は健在で新聞にでていたが本を出されている。

青柳 この中で佐藤徳四郎(徳さん)先生のクラスを体験していない人いるかなア。

小野 徳さんの思い出といえれば皆よく勉強したよ。宿題なんか。

長島 いま一番役に立っていると言うと語弊があるが、それは成語とか俳句だね。

山田 論語。種本がないから勉強のしようがない。相当レベルが高かった。

松岡 山田スカチン。何か論語の一節覚えているかい「子^{のたま}曰く……」
山田 本日は「朋有り遠方より来た

る亦樂しからずや」(拍手)

小熊 徳さんは専門の国漢文だけでなく、多方面の分野に精通されていたと思うが。

新藤 俺は映画が好きだったけど、

「Q」という有名な映画評論家(津村秀夫)の悪口を言っていたな。戦争中に書いてたことと戦後の文とが全然違う、一貫性がないと。

東 徳さんは良い先生でしたよ。ただ私なんかのように俳句のセンスのない者にとってはつらかったな。沼田君みたいな人が羨ましかった。彼の句を今でも覚えていますよ。

「大き蟬袋に入れてのぞきけり」

センスにはびっくりしてね。私にはとてもできない。宿題に十句というのがあったね。同級の阿川君が苦勞したらしく「古池や蛙とびこむ音がする」(笑)

青柳 あの人はいわかったから皆一生懸命やった。それが良かったのかもしれない。(笑)



左→長島、沼田、朝久野、齊藤、中村、松岡(司会)、青柳、青木、東

長島 強制されなければやらなかったね。あの頃から自主的にやっていたら、そら化け物だぜ。

内海 白文万葉集つのがあった。彼が後を向いて「君達ホトつてのを知ってるか」つてね。古事記の話だったかな。

松岡 出ましたね、ついに。「ニヌリノヤモテミホトヲツク……」

青柳 「トボツ」と「トマラ」ね。山田 俺には教えてくれなかった。

松岡 本日はせっかく西川先生の件が来ているので今度は英語の授業に移りましょう。(笑)

新藤 西川先生が小野君に「野球にゲッツーなる言葉があるがどんな意味か」つて聞いたら彼はアウトをふたつ一度にとることだと説明したら先生が感心して「あ、そう」(笑)
齊藤 さすがに親子だね。西川君の顔を見ると何かこの……。だからあまり言えなくなっちゃう。本当によく似てきたな。(西川テレル。爆笑)

山田 「よく読めるよう、よく訳せるよう、暗誦をしっかりと」が口癖だった。「オイ西川！」つて息子を指すわけだが、さすがによく下調べをしていたね。たまには怒られねえかと思つていたけど。

小野 あの頃の先生にしては西川さんは優しかったよ。

中村 同感。リングフォンをご自分で持つてきて聞かせてくれたね。あれなんか貴重品だよ。



マイ ボディの故・大島

小熊 僕は川工から転学してきたけど川中生の英語レベルは高いと思つたね。亡くなった大島和道君が西川先生の授業に遅刻したとき「My body is no good!」と咄嗟にやらか

したもんで先生もあいた口がふさがらなかった(笑)。大島の「マイ ボディ」は当時流行したよ。それと当時は西川先生、野口先生はじめ熱心な英語の先生がいたね。

長島 商船大学で教えていた木島先生とか岩波書店の英和辞典の編者だった島村先生など、疎開のため川中で教えられたのだと思うが偉い先生方に恵まれていたよ。

我こそはスター、

神童、悪ガキ



山田スカチン

松岡 本日の出席者各人から自分がスターだった話をしてもらいたい。

山田 小学校にひきつづき無欠席でガンバったことかな。優等賞は全然関係なしだったけど。(笑)

内海 実績は何もないけどバスケット。当時は籠球ろうきゅうと言ってた。それと草野球でいろいろな所へ行っただ。

長島 排球部に入っていた。卒業後運動のことを聞かれ、バレーと言ったら舞踊の方と間違えられた。(笑)

沼田 俺も籠球部。当時バスケットシューズがなく、地下足袋だった。指がなく先の丸いやつ。そんなの履いてオケン(川越女子高)の体育館借りて練習やってたんだからスタ一性なんかあるわけない。運動会の仮装行列で「山のかなた」の不良学生の役のマネをやってから、先生も挨拶してくれるようになった。(笑)

朝久野 剣道部に入っていたがスタ一性皆無。アダ名はミイラ。体育ダメ、教練大嫌い、でもあの当時は川越で一番偉かったからコレ(ゲンコツ)。お説教はやられなかった。(笑)



左↓山田、内海、長島、沼田、朝久野、
齊藤、中村、松岡、

齊藤 何の取り柄もない農家の三男坊の私はただ皆と仲よくやりたいとの一心で、毎年賀状を同窓生全員に出して住所の確認をやってきた。それと無遅刻無欠席。もう一つは西武鉄道の入社式と本年三月末の定年式の際、代表に選ばれ挨拶し、二百余名の前で川高の校歌を歌った。校歌で入社し、校歌で退職したわけだ。松岡 ツネさんは人の輪の中心だね。中村 弁論部で多少マネゴトをやったのが自慢かな。器械体操部に入ってたがその頃道具がなく平行棒から何から手作りしたもんだ。花形は新井澄夫とか牧田、長江の諸君だった。青木 川中に入学した時は相撲部、戦後は卓球部に入った。庭球と卓球は川女と交流ができるというんで。目立ったことといえば悪ガキ性が確かにあったことかな。自分では当時はそう思っていなかったんだ。(笑)東 本当は球技をしたかったんですが器具を買って貰えなかったので裸

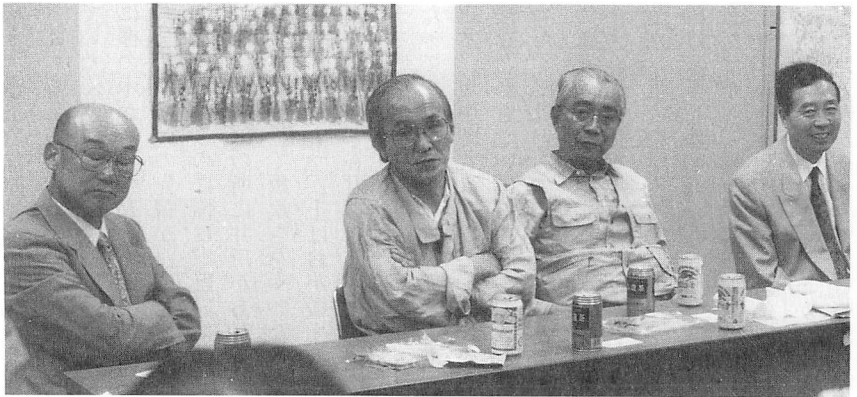
足でできる陸上にした(笑)。二年の時、インターハイの八百メートル・リレーに出さしてもらったけど、スパイクがなかったので中島キサチャんのを借りて走ったんですよ。貧困の時代を感じますね。

新藤 相撲部に入れられそうになったので泡食って剣道部に入った。戦後は生物班。テニス部時代はローラー曳き・ライン引きだけは一生懸命やった。岡田・芹沢組が全国優勝を



新藤のアブシン

した頃だ。その後吟詠部、最後は新聞部。その間に高橋(光)、青木、青柳君などとラグビー部をつくろうとしたが予算がないのとラグビーは不良がやるものだと言われてできなかった。それやこれやで昔からイタズラをする何となく新藤がと言われてしまう(笑)。最近でも地元の要人



に挨拶の中で「川中の暴れん坊」と紹介されマイった。根はきわめて真面目なんだけど。(大笑)

西川 柔道部に入ったが占領軍の命令で解散させられ、野球部には入らなかったが少年野球をやった。市主催の大会で川工に敗け石川先生に怒られ、ヤケクソになって自動車部に入った。当時の免許は小型が十四歳、大型が十七歳だった。警察に行ったら年がいかないからダメと言われ、なら無免許で乗るからと言って第一小学校の門柱にぶっつけ、巡査に見られたがお目こぼし。トラックで川商の前の坂でエンスト。道路の真中においてきた。もう一つの大失敗は雨の日、校庭でグルグル回っていたらスピードを出しすぎサッカーのゴールポストを吹っ飛ばしちやっった。グラウンドはタイヤの跡だらけで翌日運動部が使えなかった。石川アツバク先生に呼びつけられ危うく始末書になるところだった。

齊藤 西川先生の件なので許されたんじゃないの。(笑)

松岡 番長にもいろいろ苦勞があったんでしょね。

青木 こんなことがあったよ。三十近くなって会社に入ったら、学生時代にお説教した下級生が上において、「青木ッ」「ハイッ」てな調子でやられたのには参ったっけ。でも三十過ぎたら「青木さん、青木さん」って言うてくれてね。こんなのが、いま人を使う上に役立つてますよ。



青木カンスケ、小野テン

青柳 ところで小野テンの「テン」は何だろうね。

小野 「天狗のテン」コレだよ、コ

レ!(爆笑)。紅顔の美少年「ノリちゃん」なんて言われいい気分になっていたんだ。当時、武徳殿のところに櫂の木があつてね。あそこで軍隊あがりのヒゲの先輩が白球をポンポン打っているのに憧れ、野球部に入った。相撲部の所に井戸があり、合宿の際、大釜で飯炊きをやつたら下は米、中はナマ、上はおかゆ……。浅井、川合、谷君らとともに先輩にブツバされた。今つくれと言われたいのできるものではない。(笑)

正木 川中時代は未熟でしてスタリ性など今もないけど当時も勿論なかつた。けどあの時代は一番良かったなあ。ギスギスしてなく非常にアタタカかったですよ。

清水 僕は中学三年の時満州から引揚げ入学したのだが、皆より一年先輩だったし、種々の事情から友達付き合いをやるうとしてもできなかった。だから良く扱われていたとか意地悪されたとかがありません。皆から一

歩離れて見ていたという感じだ。

小熊 一つだけお役に立てたと言えるのは在学六年の仲間のうち中途退学した人を本人の了承を得て川高同窓会本部の推せん会員になつてもらえたことかな。自分が工業からの転入者で併設中学卒業生は川工の同窓会名簿には載つてないことから思いついたんだ。それにしても齊藤(恒)君の名簿管理がしつかりしてたからできたことだけだ。

我々の学年は貴重なのだ

青柳 最後に我々は先輩とも後輩ともこういうところが違うという点はどこかな。

長島 小学校に入って国民学校を卒業し、中学に入って高校を出た。この経験は我々を含めた三学年くらいしかない。

小野 その間に尋常高等小学校、併

設中学校もあった。はじめのうちは新制高校と言ってたね。

山田 旧制があったからね。

東 私はこう考える。一つはティーンエイジの十三歳から十八歳まで六年間も同じ学校にいた。第二はその間に敗戦という体験を通じ価値観の大転換があった。第三は学制改革をモロにかぶったことで、二年上の先輩までは進路が多様化できたが昭和七年度生れの我々は完全に一本の路線を歩んだことになる。最後に、川中は明治三十二年開校、昭和二十三年五月二十八日に五十周年記念行事を行っており、あと五年で百周年を迎えることになる。我々は川中・川高全体の歴史の丁度中央を生きてきたことになる。

松岡 二百人の級友に代って皆さんがここで話してくれたことは当時の社会情勢を踏まえた川越中学・高校時代の生活を語りつくしていると思います。これらは珠玉の言葉ことばとなつ

て永久に残ることになります。本当に有難うございました。

(後記)

まだまだ、四十余年分、積もる話に花が咲きました。小学校でもあるまいに、ひとつ校舎に六年間、同じ顔触れの仲間が同じ教師に叱られながら、戦争から平和へと、激動の時代を共に潜ってきた私たちです。「いま、平和しか知らない、モノを消費することしか知らない世代の後輩諸君に、平和の尊さ、モノの大切さ(学問の尊さも?)を考えてもらえるような有意義なお話を……」

と張り切っていたはずが、いつの間にか懐旧談になってしまい、当初の理想からみればいささかメロメロの観なきにしもあらずでした。

しかし、賢明な後輩諸君たちならきっと、行間に垣間見える、ある時代からのメッセージをキャッチしてくださると信じています。

●会場では、もつとたくさんの発言がありました。スペースの都合上、整理させていただきます。なお、スタッフの不手際により、聞き違いや発言者の取り違いなどありましたらご容赦ください。

左↓清水、小熊、阿部



日時・平成五年七月三日

場所・(株)川越都市開発会議室

出席者(発言順)

長島恒雄 朝久野貞郎 山田和宏

新藤邦泰 中村生秀

東 敏雄 内海俊郎 正木一男

青木勤輔 斉藤 恒 沼田芳造

西川 博

司会 松岡章次 司会(サブ) 青柳安彦

書記 小熊忠三郎 清水良平 阿部新一

進行協力 大野良三 金島壮行 平岡泰之

堀 陽 松村祐二 水口重雄 宮崎敏昭

(アイウエオ順)

発言中の挿入写真は、たまたまあったものから編集室が任意に選びました。(編集室)

川高悪童風雲録

へあるタイムスリップ憧憬

松岡章次

爆弾小僧物語

時は昭和二十五年四月、桜花落英^{ひんぷた}繽紛たる春爛漫のここ川越高校は昼下りの放課後。所はというと新井ソーへ、田中シュエの奏でるバイオリン片メヌエットの調べの洩れる講堂の東北。その昔、川越城の物見櫓の跡とかいう通称おんたけ山と、対川商戦で川合コンニヤクの放ったホームランの転がり込んだ空堀を挟んで東のはずれに建っていた、古びて今にも倒れそうな杉の木目も浮き立つ木造平屋の化学実験室の南面。猫のひたいのような平地があつて、戦争中の防空壕を埋めた跡のバスケットボールコート。

団体目指し頑張る新井ハルさん、石田ジャリ照、平井アンダヤ、峰岸ミネ公、比留間メタテ、沼田ヌマ公の面々、ひと汗かいて引つ込んだ後をうけて、入れ替りに化学実験室の窓からひらり颯爽と地上に下り立ったのは、入学ホヤホヤの可愛い一年坊主を迎えて大得意の化学部の悪童共。野次馬も混えて約百人程、新入生歓迎化学実験と称して何やら怪し気なたくらみ。内沼ジープ、越コシマキ、丸田シャチョウ、喜多キタ公、関根ワンちゃん、小島サンゾク、青木ヤッサン、松岡へんじん、それにこの春から化学室の助手に採用されて一応は先生の肩書きを持つ美少年の高橋モトゾー……等どろどろと登場。あと客分やこういう事があると自然に寄ってくる^{ひんぎんち}剽軽者などと、いろいろいた筈だが全部は書き切れないのでいた人は勝手に自分を登場させて下され。

さて部長松岡、一世一代は晴れの舞台の前口上も事なく済み、くだんの悪童共遠巻きに固唾かたずを呑んで見守る中で、関根ワンちゃんのかげ声の下、内沼ジープが人垣の中から長々と延びた電気コードのスイッチをグイとひねると、コートの中で一瞬白い閃光がピカッと走ったとみるや、少年達が生れてこの方聞いたこともない大音響一発！「バリバリ、ドッカーン！」と彼等の鼓膜を破り、体を震わし、進水式も前の股間の貴重品を縮み上らせたのであった。OH! ALL BOYS NO CHIN! いや全くの話、この僕はその日はほとんど耳が聞えなくなってしまう、直後教員室に連行され、大勢の先生方から散々つるし上げられたのだが、幸か不幸かおっしやつてることが全然分らず困り果てたものだ。

そういえばこの学校に入学した旧制中学一年の時は戦争もたけなわで、アメリカ空軍も余裕があったか、こんな田舎町にも沢山飛んで来て、P51ムスタングや艦載機グラマンの超低空機銃掃射や、米屋の岩澤トミヨちゃんと医者いしやの稲生ヨシヒコちゃんの家の中間辺りに落ちた本物の爆弾の音なんかも一応はナマで知っている僕等だったが、この音はとにかくそんなもんじゃなかった。ところで、グラマンに乗っていた奴等は十八、九位の少年航空兵もいたそうだから言わば同年代。あいつ等も今頃やつぱり還暦すぎた爺さんかな。

さて、その後はというと、籠球部の連中が丹精こめてローラーをかけた鏡のようなコートが、海面に浮かび上がる鯨の背中のようにゆっくり盛り上り、まるで戦争映画の一シーンみたいに土砂を高々と上空に吹き上げ、キナ臭い白煙が原爆のキノコ雲そっくりの形で屋根より高く立ち昇る。その後に来たのが当時の先生や先輩が、日常茶飯事でよくお見舞いしてくれたビンタそっくりの感触の爆風という奴で、ぐるり遠巻き一番前にいた連の悪い連中の紅顔のホッペタへの一撃であり、それと同時に背後の化学実験室の南側の木の木の棧の窓の一部が壊れ、あのガラス

の破片が落ちる「チャラン！ カチャン！ チャララ！」という独特の断続音は、一瞬前の轟音の余韻と一呼吸の間で見事にハーモニーして、この場を体験した悪童共に更により一層の強烈な印象を焼きつけたのであった。

すべては何秒かの出来事であったのだが、これはスローモーショョン映像芸術表現でいうところなるんじゃないか。川高百年の歴史の中で一つの記録として（長嶋監督じゃないが）、本物の映画監督になったヌマ公に、出来たらセツトを組んでもう一度クラシクインしてもらいたいような劇的シーンだったなあ。

やがて今度は硫黄臭い、黄色い濃い煙がこの場をすっぽり覆って、漢文の徳さんが言う成語の「五里霧中」となってしまう何も見えなくなったんだが、それはこのシヨックで一時的にツンボでノーチンになってしまった少年達を幻想と恍惚の世界に導き、再び煙が晴れて静寂が戻った後も、しばし誰一人としてその場を動く者がいなかった程だ。

その静けさを最初に破ったのはバタバタと駆けつける先生方の無粋な足音だったが、この当時先生もちゃんとした短靴をはいている人は珍しく、軍靴を改造した半上靴はんじやうかの足音であったと記憶する。

こういう異常な轟音というものは伝わる場所や個別の立場や条件で、いろいろな受けとり方をするものらしく、一応責任者たる僕のこの後接触した人々の反応は千差万別であった。

先ず先頭切つてとんで来たのは何と荒井実校長で、あだ名のミミズクが大きな羽を広げて文字通り翔んで来たように見えた。あの巨体、爆音に驚かれ平素の温顔はどこへやら、眼光ケイケイ。その威力をまともに喰らって小さくなった僕は丁度シマフクロウの足で捕えられた哀れな小兎のような形になってしまった。

ところがさすが校長先生だ。発した第一声は、ミミズクの鳴くような押し殺したお声で「誰も死んだ者はおらん

かったか」という有難いお言葉であった。

僕も還暦まで人生をやってきて教職という道は歩まなかったが、工場などで大勢の人命を預かる仕事もやったのでこの一言、校長先生のお気持ちはよく解る。

校長と言えはどういう異変か我が同窓は随分と先生が大量発生したねえ。そのほとんどが校長先生に出世してしまつたとやら。なれなかつたのは大学に務めてしまつた佐々木ユーちゃん、川崎タダシ、吉崎ヨシトラ、喜多キタコウ、竹内イタ公、山崎とくもん、斎藤ガイコツといった所謂教授達で、何でも「川高三期生コーチャー会」というとぼけた会まであるそう。本題とそれるが先生になった人を番号点呼をとってみようか、元気で大きな声出して返事してくれよ。1 浅井チータ、2 秋山キーチ、3 阿部タコ、4 飯田セージ、5 五十嵐モロヤマ、6 浦部電柱、7 江原ジョー、8 小川〇レン隊長、9 奥隅ズミちゃん、10 小畑のオンちゃん、11 金子カシヨ、12 金島ソーコー、13 田島ダンチヨ、14 豊田ホーデン、15 中カムカムエブリボデイ、16 根本ニッサイ、17 半田ろくさん、18 平井アンダヤ、19 西海ニユードー、20 水口こっけ、21 石井セージ、22 島田ベテイ、23 府瀬川チューホー、24 細谷のテツ、25 森田ボンせんべい、26 山下ブンチャン、27 牛窪ウツシー、28 川合コンニャク……まだいるらしいのでかれこれ三十人！ 上げえ、上げえ、社会異変として特筆すべきだな。なかには「俺は校長じゃねえ、教頭だ」「俺は……」なんて奥ゆかしい人もいると思うが今点呼とつたのは先生になつた方達だ。何？ 誰か抜けてる？ その時は勘弁な。脱線に輪をかけたがその校長の中でも金星^{きんぼし}！ 僕達の憧れのお県、川越高女いまは川越女子高の校長に収まつていた29 小林ヨーザ(子供の時は稚児さんのような可愛い子であつたが現職でもアノ童顔、多分このアダ名であろう)を代表して、こういう時のプロの本音を聞いてみたいねえ。

教頭で化学の主任の本橋信治ペーハー先生は特徴ある関西弁で「エー、警察への連絡はよく調べて私がしますよよって勝手に電話せんといて下さい！」ともつぱら校長に続いて駆けつけた先生達対策であった。子供ながら教頭ともなるといろいろ気を廻すものだと思心したものだ。

もう一人の若いハンサムな化学の教諭、木村信寿、キンタ先生は快男子の一言。僕の耳元で「松岡、これは相当な問題になると思うが俺がやらせたといいからな！」だって。オーさすがキンタ！。

佐藤徳四郎、トク入道先生。これは例によって口より手が先で「マ、松岡！ コ、コノツ！」と臭い息を吹きかけながら僕の胸ぐらつかんだところで、間に割って入ったのは意外や、ドンちゃんこと佐々木信治先生で、あの調子でのつたりと「アー、この子は私が担任ですのぞ」と来た。温厚な方だったがスジを通すねえ。

どういふ訳か先生が全員集まってしまった感があったが、いづれも物好きで飛んで来たのではなく皆様、校長室の隣で丁度職員会議中だったとかで、爆発音が長い廊下を伝って会議室のドアにぶつかり、ビリビリと家鳴り震動をしたそうぞ、咄嗟に校長が駆け出したものだから皆ついて来てしまったのだぞうだ。

爆音というものは案外ゆつくりと遠くまで届くもので、グラウンドで汗を流していた連中の方にも当然轟きわたったようだ。野球部一のハンサムの小野オノテン、名捕手浅井チータ、コンニャクのように柔軟なホームランバッターの川合、僕がジョンソン基地のアメリカ兵から失敬してきた野球帽を気に入っていつもかぶっていた細谷テツ、花形スターの谷ガン、それにおしゃれで不朽のアダ名を残した山田スカチン、ノーコンの名投手柴田ゴローちゃん、それに菅間ガンマネージャート、甲子園には遂に縁はなかったが一所懸命やっていたね、もしいたとすれば外野のスカチンとテツは近かったから真先に駆けつけたに違いない。

陸上の面々——中島キサちゃん、宮崎ゴリさん、五十嵐トーシヨ、橋本シヨーちゃん、大川ダイセンカイ、平岡マンモス、東ダン吉、岩澤ケンゾー、小沢ライギヨ、小峰コン……。

体操部は牧田ベース、新井ターザン、糟谷クマさん、長江フジちゃん、中村ナマヒデ、みんないい汗かいていたねー。

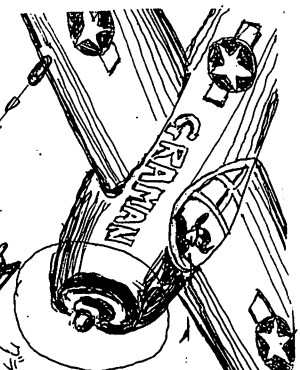
秋の県大会では涙の総合優勝だったもんね。

音は北の隅まで轟いて、バレー部は御存知、阿部タコ、中田ジンセー、桃井ももちゃん、遠藤コーヘイ、伊藤アキラ、小畑のオンちゃん、西海入道、小熊クマチュー……この時いたかな。

更にその東、変な湿原の凹地を石炭ガラで埋めて造ったテニスコートには、全国優勝・日本一の岡田タツちゃん、あとは津坂ムネシゲ、神田ヒサオに一色イサオ、斎藤ケンジ……重いローラーでコートをよく手入れしてたなあ。マッカーサーの命令で剣道部が解散した時の竹刀をラケットに持ち代えた豆剣士の末裔達だったね。

その先には喧嘩相手には事欠かない川越商業があって、僕の親しかった番長に後日聞いたが、あの音は何だろうと、川商からわざわざ見に来た奴もいたそう。この境の小道には運動部の練習を見に来ているセーラー服のお県やお市の生徒がいつもいた。その又向いの川越城本丸跡には武徳殿という江戸時代の建物があって、当時禁止の柔道を未練たらしくこっそりと稽古していた山口ヤンチ先生はじめ旧柔道部の連中、汗の中でこの音聞いたともい。最後まで柔道をやった秋山キーチはその時いたかしら。

西の方はというと田舎の学校にしては珍しく美しいステンドグラスのはまった大講堂。弁論大会、予餞会も懐かしいなあ。東が生徒会長に立候補した時の平岡マンモスの名応援演説を「歌笑！」の一声、満場十分間の大爆笑で



月 11/27 噴

入函、所沢に米軍基地
7/21 一遊星
8月5日終戦

1945
8月15日
終戦
川中入隊の日
B29
P51
飛行機

1944
1943
1942
1941
1940
1932-3
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900
1932-3
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革
月 東京 7/7 学制改革

1950
1949
1948
1947

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900



1951
1950
1949
1948
1947

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

1951
1950
1949
1948
1947
1946
1945
1944
1943
1942
1941
1940
1939
1938
1937
1936
1935
1934
1933
1932
1931
1930
1929
1928
1927
1926
1925
1924
1923
1922
1921
1920
1919
1918
1917
1916
1915
1914
1913
1912
1911
1910
1909
1908
1907
1906
1905
1904
1903
1902
1901
1900

葬った金子ユージの名野次。上級生送別劇で「坊っちゃん」をやった大川、守谷、大島、川合の迷演技などがあつたあの大讲堂だ。一応グランドピアノがあつて音楽部という軟派師共奴。市川ラット先生の奏でる危なっかしいピアノソナタに合せてどこで手に入れたかバイオリンなどをかき出してチータカタッタ……青柳大頭領、新井ソーヘー、田中シュー、比留間メタテ、原タケシ、柳田ラッキョー、内海トッパ……時にはお県まで押しかけて合奏もしたとか。爆音は目と鼻の先だったが居合わせたとすればどうしたかねえ。

そういえば南側のテラスにバリカンを学校に持って来て友達の坊主頭を刈る趣味の奴がいて、これがまた一つのサロンだった。ダイセンカイと言われた大川、川崎、双木、僕、それに徳入道も加わったりして——未完成のトラ刈りて授業に出て大笑いをとったりしたなあ。この時はもうみんな髪を延ばしていたのでここにはいなかったかな。更に西にはというところの楠の木のをびえる正門から校外に出て、当時の第一小学校と第二小学校の間にあつた川越の生んだ剣聖、北辰一刀流、間中鹿太郎七段（間中先生は我が校正課剣道の師範）の明信館道場を左に行った所の本があんまりなく、あつてもナカナカ貸さない明治調レトロ市立図書館。東大めざして頑張る自称秀才、松木ポツポツ屋、奥富コーメイ、村山ポチ、中村セーシュー、吉野シヨーブ、永島シュンザブロー、などは常連だったが。この当時受験地獄なんてない良い時代だったが、一部のけしからぬ奴等が東京へ行って買って来る「螢雪時代」という受験雑誌の影響で、純情な連中は放課後ここに集まる風であつた。つまり受験戦争のハシリだ。

図書館のガラスがビリビリ震えたそう、その一人氏家ウジケなどは物好きにわざわざ学校に引き返して見に来たとか。天才天逝、彼は既に黄泉の国に在り青年の姿で僕等待つ身だが「爆弾のタタリて東大は落ちてしまった」と後年早稲田の杜でバッタリ会った時間いた。

この分では更に西の方、慶応や早稲田の高校に転校した吉崎ヨシトラやハカリ屋の松村ユーちゃんの家のおそばにあった消防署や警察署まであの音は轟いたんじゃないか。くわばらくわばら。

転校といえはこの頃になると受験対策か、東京の学校に移る人が多くなつて寂しい思いをしたこともあったなあ。また疎開で田舎にやつて来て仲良くなつた友人達も続々と東京に帰つて行つた頃でもあった。正木カチメのおカズ、可愛いスターだったなあ。

大分間があいちゃつたが、その後爆発現場がどうなつたか僕は知らない。なぜって即時その場で先生達に逮捕されて取り調べの為、教員室に連行されてしまつたから——多分残つたみんなや、こういう時は呼ばなくても飛んで来て野次馬の仲間入りをするのが好きな連中で、跡始末をしてくれたのだらうなあ。コートの穴は誰が埋めたのだらう。

ついでにその後どんな処分を僕が受けたのか興味もあるだらうから書いて置くと、意外に粹な計らいでネ、結論からいふと三日間の校、内、謹慎、という寛大な処分と相成つた。謹慎には二種類あつてネ、自宅、謹慎というのもありこちらは重刑の方。つまり登校禁止、内申書にも記入されてしまう。次は停学、退校と順次重くなつて行くのだ。校、内、謹慎というのは一応登校は許されて進学の時の内申書には、猿ではないが反省すれば記入は免れるという刑の軽い方。じゃあ一体どんなことをするのかと言うと、こういう経験は意外(?)と堀番長や新藤アブシン、青木カンスケ級の大悪童でも経験がないかも知れないからついでに教えるとネ、放課後五時から六時まで校長室の隣の書庫の中に用意された固い木の椅子にキチンと座らされ、手を膝の上に置いて黙想を命じられるのだ。一切無言の行。何をすることも許されない。唯々、一心不乱に反省しろということだ。ナンだそんなこと、中学の時散々

やらされて何て事ないじゃないかと思うかも知れないが、いたずら盛りの十七歳のヤンチャ小僧が一時間の黙想というのは大分つらい。僕は最近ある動機があつて座禪をよくやるんだが座る度にこのことを想い出す。こりや不まじめ座禪がバレちゃったね。

ミミズク校長はたまに出たり入ったりしたが、流石に貫禄で爆弾の話は一切しなかった。三日間に交した会話は「お父さんは何をしている人か」という一言だけで何と答えたか忘れてしまった。その日僕の父親は呼ばれて散々油をしぼられたらしいが、大したオヤジで家で一言も文句を言わなかった。僕のオヤジは東京電力の技師で僕に似ず謹厳で無口な人だった。

窓の外からはいろいろな奴がのぞきに来て窓ガラスをコツコツたたいたり、扉を開けてアカンペーをしたりして薄目を開いている僕の謹慎を邪魔に来たっけ。竹沢タケ、浅見ロッパに内海トツパ、双木イチロ、西川おたまじやくし、高梨マサ公、いろいろ来たなあ。黙想といえど戦中授業前に先生を待つ間やらされたあの「黙想はじめっ！」という奴、懐かしいなあ。森田リカンが目を開いていて漢文のプーラン先生から弓の矢のムチでひっぱたかれたのを想い出してしまった。

この黙想謹慎の刑というのは銀行家になった連中清水リョーヘイ、宇都野雀狂、沢田キョード、柴崎ケン



校内謹慎

ちゃん、長島が芋あたりは知っていると思うが、例えば身内で行員に不祥事が起きると警察沙汰にすることなく、うす暗い部屋に何日も何もさせないで座らせてチャラにするお仕置きがあるとかいうね。いかにも対外信用を重んじる業界らしい罰だが穏健派のミミズク校長の情けあるご決定がこの伝だったらしい。

川高の校史の一端にもと思い、化学部誕生の歴史をこの爆弾小僧事件の遠因にかこつけて語ろう。あの残念な終戦のあと、こんな田舎中学にもマツカーサーの命令は下って剣道部も柔道部も禁止され、間中七段もヤンチ四段も失業して一時農業の先生になってしまった。農業の岡田カンちゃんと一緒に戦争中折角おんたけ山や講堂の下の谷の横っぱらに掘った防空壕を、エンピという軍用スコップで皆で埋めたっけ。掘ったり埋めたり御苦労なことだったがこれも歴史というものだ。剣を捨て土を運ぶ……剣聖間中鹿太郎七段の心中やどんなものであったことか！「敗戦の心の整理をするため防空壕を埋めてから川中を辞めたのだ」と明信館道場の門弟だった僕は先生からその御心境を聞いたものだ。ヤンチ先生はその後体育に転向し僕等を指導して下さった。

廃部時の剣道部で土橋さんというヒゲだらけで熊みたいな上級生が、物象部ぶつしょうというのを創設したのだが、その人のお小姓さんだった僕は（別にヘンなことはされなかったが、僕は一年の時は美少年だったと見え、上級生達から可愛がられた）国定忠次について行った子分みたいにくっついていってしまったのがソモソモの始まりだった。物象なんて僕等の年代でないと分らない珍妙な言葉だが、つまり物理と化学と博物と鉱物という教科を一つにまとめた戦争中からの学科名だ。それから五年の歳月が流れ自民党の派閥みたいに、物理部と生物部と化学部に分かれ、五年前あどけない子供だった僕等もあちこちにカミノケも生えてくる最上級生になり、一年生を稚児さんに従えてそれぞれ一家を創ったのだった。

物理部には東大に行つて本職の原子物理学の權威になつた森岡キリン、水村くん（アダ名で言う）と今でも本気で怒る。物理から医学に転向し、静岡で有名なお医者様になつた）、中沢マスジロー、奥平オクサンなどがいたなあ。

生物部というのはマセた人が多かつたが、田口よーせい、三友ゼンちゃん、竹内イタ公、新井サダヤッコ、朝久野ミイラ、豊田ホーデン、君塚ミミズク、吾野の材木屋のおんば日傘の箱入り息子の加藤ヤスオちゃん、意外や塩入リョーゼン僧正もいたね。

化学部はというと冒頭に述べたような秀才ぞろいだったが、僕が余りにもなりたがるものだから皆仕方なしに僕を部長にしたようだ。そうなると一年生への見栄もあり、デキる振りをしなければならぬので他の学科は全部放棄してしまい、化学しか勉強しないようになり、その一念というものは恐ろしいもので、他の学科は全部できなくなつた代りに、学科別の実力考査という奴で一度だけ化学で一番になつてしまつたことがある。そして豚もおだてりや木に登るとやら、すっかりその氣になつちまい、とうとう生涯この道をやるはめになつてしまつた。人からよく言われるよ。「お前が理工系というのはどうみてもオカシイ」って。水商売の御婦人からも「ウツソー！ マーさんは芸能カンケイでしょう」って。とにかく僕はこれをもとで向いてもいけない化学機械屋になつてしまつた。じゃあ一体今は何をやってるのかというと、あのオゾン層を破壊すると騒がれている悪名高いフロンガスを液化する装置を作る仕事（分り易く言うとなんたが）を御苦労なことに世界股旅でやつたもんだ。いろんな国に行つて暮したよ。雨ゲール先生の英語をもつとやつときやよかつた、と遠い異国ではぞをかんだものだ。

フロンと言へば皆知っているから例に出したのだが、アンモニアでもメタンガスでも風船を揚げる水素でもヘリウムでも、又プロパンとか天然ガスでも気体というものは圧縮して冷やすと皆液体になるのだ。気体なら何でも

液体にしてみせる。プロパンを扱っている新藤アブシン、吉田ばんちよよ、見直してくれ。

冷凍といえばみんな刺身を食ったりビールを飲んだり、アイスクリームをなめたりするだろう。暑い時にはクーラー使うだろう、みんな僕んところのこしらえたでっかい冷凍機のお陰なんだぜ。又宇宙ロケットの燃料だって液体水素だし、超伝導や核融合だって超低温が必要なんだ。その機械を造っているんだ、僕は。

いや変なところで会社の宣伝をしてしまったが、もう一つ僕が化学に興味をもってしまったのは御存知、木村信寿先生、キンタさんと、先生秘伝の爆弾製造法講義のせいだと思ふ。キンタさんの名の由来は、登山が好きで山岳部の糟谷クマさんをつれちゃあ方々の山を歩き廻り、足柄山の金太郎、熊にまたがりお馬の稽古がそのルーツだと思ふ。

山岳部にはクマさん、大島デシヤ（進駐軍のヤミ物資をよく仲介してくれたなあ、僕はその米軍ジャンパーを着て卒業記念写真を撮った）、小島サンゾク、金子カシヨ、田村タケ、柳下マンちゃん、内沼ジープ、市村エテムラなどいろいろいたな。

話をもどってキンタさんは東大出の秀才、三島由紀夫ばりの目元涼しい好男子で人気があり、僕はゾッコンだった。戦争中は海軍の技術士官で爆弾を造っていたそうで、授業になるとすぐ火薬や爆弾の話ばかりに熱中する。それがまた馬鹿に詳しく教える。

キンタさんの話を聞いて子供ながら解ったのは次の通りだ。酸化による化合し易い物質を混ぜて開放状態で火をつければ、空中の酸素を得て燃えるに決まっているがこれだけでは火花と同じで兵器といえるモノとは言えない。いやしくも爆弾なる代物は密閉状態の中で猛烈な化学反応を瞬間的に行わしむる装置のことであると。つまり超高压、

超高温下で正確な酸化反応を行わせると大抵のものは燃えて爆発エネルギーに代る。これ即ちボイル・シャルルの法則だ。又一般に火が付き易いものは大した爆弾にならない。アルミの粉とか鉄の粉とかTNTとかマッチなどではなかなか火が付きにくいものに強烈な酸化剤を反応方程式通りの分子量同士の目方で混ぜて密閉容器（つまり大砲のタマのようなもの）の中で信管によって着火させる。これ即ちバクダンであると……。

発足間もない平和国家日本の高校にしては大変ブツソーな授業だった。何しろ五年前までは毎日湾岸戦争みたいなことをまじめくさって身近でやっていたのだからなあ。一種の習慣みたいなもので素直に一所懸命聞いてしまつて「ようし、爆弾を一つ我が手で造つてやりましょう！」と秘かに心に決めてしまった。子供は火遊びが大好きだからその頃有名な話としては、小島サンゾクと正木スルメが、化学実験室で乳鉢の中に硝石と炭と硫黄を混ぜてすりつぶしている内に火がついて、天井をこがし大火傷をして包帯をぐるぐる巻いて威張っていたのを想い出す。その時の写真もあるよ。どういふ訳か僕も包帯を巻いて一緒に写っている。

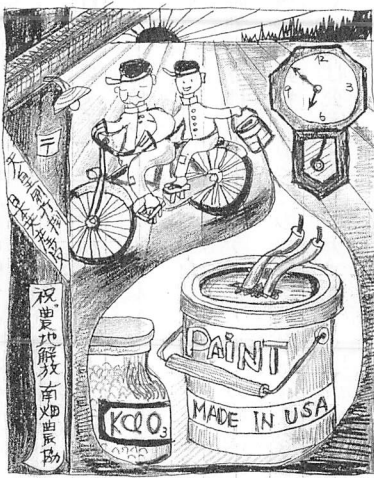
さて僕の立てた計画はとうとうこうだ。——化学部の一年生の入部歓迎式を兼ねて少少つかい音を立てて皆をびつくりさせてやろう。薬品は実験室から失敬する。信管はヒューズを電気ショートさせればよからう。会場は最初おんたけ山の下の濠とも思ったが雨で水が溜ってしまったので化学室の隣の籠球コート借りよう。当日の安全や効果を期してリハーサルは喜多院の山の中でやろうと。

喜多院と言えば僕の家のおそばにある全国でも有名な天台宗のお寺で大きな森の中にあつた。塩入りヨーゼン坊やはこのお寺と縁戚に当るアサクサの浅草寺が空襲で焼けた頃に東京の本寺から疎開して来た坊ちゃんだったが、さすが名門の出で気品があつたね。陸上競技部や卓球部において俊敏だった。大川、柴野、岩澤、川崎、阿部などによ

く押しかけては徳川様の国宝の刀や鎧を見せて貰ったりしたものだ。

又脱線してしまったが爆弾は次のようなプロセスで出来上っていった。一見岩塩のような結晶、塩素酸加里。これが一番入手し難い代物なんだが(今では革マル派や連合赤軍でも手に入らない)、化学室の助手先生に収まった高橋モトゾーに頼んで大きな瓶二本を持ち出し、中味の大部分を失敬して家にあつた岩塩とすり替え元の棚に瓶を戻すというとぼけたことをやった。このくだりを書くのは少々躊躇されたのだが法曹界に進んだ中村弁護士、奥平判事、時効の方は大丈夫だろうか。アルミの粉は大島デシヤの家には軍の隠匿物資がいろいろあつて、その中に特攻機に塗つた銀粉があつたのに日頃目を付けておいたので難なく手に入った。硫黄は僕の家の近所に農薬の工場があつてその頃は公害なんて平チャラでくさい硫黄の屑が沢山捨ててあつたし、炭の粉はその頃の生活燃料が薪炭そのものだったから言うまでもなく楽勝だった。TNTとかピクリン酸とか二酸化マンガン、その他少量でややこしい物はモトゾーに鼠のように引いてもらつて薬品の方は全部そろつた。

装置の方はというと別に人畜殺傷、施設破壊を狙う兵器が目的というのではなく、ただなるべく大きな音を立てて一年生をびっくりらせてやろうという、タワイない企みなんだから破片が飛び散らないような材料で何重にも包めばよからう、又その方が温度も圧力も上るだろう……と考え、蓋付きの大小の缶を集めて来て、順々に火薬をつめる事にした。つまりダルマの木製玩具を次々に開けていくと、中に小さなダルマが入っているのがあるだろう、あれと同じ要領だ。一番芯は七味唐辛子缶(これが信管でヒューズが仕込んである)、次がカレー粉の缶、その次はラッキーストライクの缶、みかんの缶、桃缶、最後がペンキ缶と六重にし、缶と缶の空間に苦心の火薬を入念に詰めこんだ。大人になって知つたが水爆もこの要量で造るらしいね。重水素を普通型原爆で包むのだがこれがこれと同



ヨネさん、爆弾を運ぶ

じことをやった僕は天才だな。その頃水爆はまだなかったしね。

薬品の量は小島サンゾクのように唯データラメに混ぜたのでなく、起こるべき化学反応方程式通りの分子量通りの計算をまじめにやって計量して混ぜた。計算はワンちゃんや喜多ユウのような秀才に協力して貰った。調査や組立て中の振動や衝撃でよく小規模の爆発もやらかし火傷もしたが、子供のことで余り危険とも思わなかったらしい。

四月のある雪の降った夜、爆弾は僕の部屋で完成した。外見は直径十五センチ、高さ二十五センチのアメリカ製のペンキ缶。重量にして二貫目（約八kg）。蓋には信管のコードがニヨロリと出ていて不気味な代物だった。

本番前にこの十分の一位の小型のものを造って喜多院で一人でリハーサルをやったりしたが、静かなお寺の境内だけに音はすごく響いたし、山火事でも起こすと大変なのでリウゼン坊やは立場上誘わなかった。その日、僕の

家の隣にTさんという新婚の若い刑事さんが住んでいて、家に別用で来る場面があり、ドキッとした覚えがある。爆弾は自分の部屋に何日か置かれ、僕はこれを枕にして毎日寝ていたことになるが、今考えるとゾッとするなあ。時々夢の中でうなされることがあるよ。

さて実験当日となり、朝南畑村から自転車で通う大澤だんごのヨネさんが迎えに来て、彼の自転車で二人乗りし私が持つて学校に向かった。ヨネさんは六年間一日も休まず今の富士見市、当時の南畑村から五里の道を雨にも負けず風にも負



風の前の静けさ

けず、花も嵐も踏み越え、毎朝僕を起こして川中を通った村一番の神童である。その日そんな危いものを運ばされた事は露知らなかったのがあった。

学校に着くとそこは本館二階、東端の三年A組の僕等の教室で級長は菅間アキラ。岡田カンちゃんを失業から救おうと実習課目に農業を選んだ変り者の集まった級である。肥桶かつぎは面白かったなあ。進学学級DとE組、グレン隊ばかり集ったC組、秀才とグレン隊まぜこぜのB組と教室は横並び。ズラリ二百人のガキ共がここに集う。

かつての紅顔の美少年達——埼玉県西南、遠くは秩父、奥武蔵、飯能、所沢の山奥から東は大宮、北は寄居あたりまで、村一番の神童のなれの果てだ。この頃は上も下も生えそろい、弁当は二時間目に食って教室の床は踏み抜き、一階の下級生の教室にゴミの雨を降らせる悪童に成長していた。

爆弾はカバンに入れて僕の机の上にあったが、休み時間ともなると口コミで伝え聞いた各級のワル共続々と見学にやって来て、僕が制するのも聞かずヤバいことをやる。青木カンスケ、新藤アブシンなどは、爆弾を持ち出してバスケットボールのパスワークみたいなことまでやり出す始末。教室で爆発しないで本当によかった！

そんなブツッなものがあるが教室にあるとは露知らず、掛象の解析、ゲールの英語、ドンちゃんの国文、キンタの化学、タローさんの世界史、徳入道の漢文と各先生方の六時間の授業を居眠り半分ですごし、待ちに待った放課後が

やって来た。

実験場には最初にも書いた化学実験室の南の籠球コート借りたんだが、僕はバスケの連中とは仲良しだったから二つ返事で協力してくれて、コートのある場所にあった木の柱を引っこ抜いて爆弾をその穴に深く埋め込むのまで手伝ってくれた。破片が飛び散ってはヤバイと思いきや、結果は圧力が上ってかえって大変なことになっただけだった。

爆弾から安全圏までの電気コードは、入間川の藤田クロが提供してくれた。彼の家は入間川の大きな電気工事屋で旧航空士官学校や米軍基地で拾って来た(?)軍需物資が倉庫に山のようにあり、そこから俵が又拾ってくる位は造作なかった。入間川の基地によくいろんな物を拾いに行ったりした。皆も思い出があるだろう。終戦直後の日本軍のこわれた兵器、その後は米軍の物資、そしてギブミーチョコレート、チューリングラム……特に飯能、豊岡から来ている連中は稲荷山公園から入間川まで広い飛行場の横を歩いて通ったものだなあ。拾うと言えば終戦直後航空士官学校跡に学校から集団で机や椅子を拾いに行き、炎天下五里の道をかっついて川中まで運んだのなんかは一つの「歴史」だなあ、あの頃は一億総拾い屋の観があったな。

午後四時三十五分、内沼ジープが運命のスイッチを入れた後の顛末は先に書いた通りだけれど、僕等化学部苦心の集大成、いろいろ詳しく書いたからこの爆発エネルギーがいかに巨大なものだったかお分かりだろう。それにしてもこれら一連の出来事を脱線もしながら振り返ってみるとこの当時の背景や世相が結構よく出てくるねえ。自分で書いて感心した。

僕に対する取調べはペーハー教頭、キンタさんが検事代りとなって行われたが、お二人共平素僕に厚意を持って

下さったせいか、極めて寛大だった。キンタさんはこれは自分の指導でやったことだと証言してくれた。要するにいたずら半分に火薬をつくり、無知にも密封して土中に埋め発火させたので予想外の爆発となった。薬品を勝手に持ち出し、学校を壊した件には罪と罰が成立するとし、まあ死人や怪我人がなくてよかった、という事で三年生担任教官会議、すなわち佐々木ドンちゃん、掛原ボヤ象、木村キンタ、佐々木ギリシ屋タロー、西川雨ゲール(シブ六)各先生による陪審員(?)が結審してくれたらしい。

僕は高橋モトゾーがクビになると、壊した窓ガラスの弁償がうちに来るのではないかという事に秘かに心を痛めていたのだが、有難いことにこれは杞憂であった。又塩素酸加里をそんなに大量に失敬した事は最後まで言わぬで済んだので助かった。後年川高で化学実験が行われ薬瓶の中に代りに岩塩が入っていたことが分つたのは何年後のことだったろうか。くだらない話を長々と書いたが、このオチで僕の「爆弾小僧物語」は終る。

記念出版に何を書いて出そうかと皆さん同様いろいろ悩んだのだが、僕にとってこの事件が一番思い出深かったし、こうやって書いてみると、くどくなつたが、それに伴って次から次へと記憶が蘇り、書いているうちに忘れていたみんなをすごく身近に感じ何だかすつかり楽しくなつてしまった。あの頃は食い物がなく、日本中が貧しく、現在のような物質文明がゼロの状態で、何の楽しい思い出もないと正直な話思つたりしていたんだが、本当に考えが変つてしまった。

還暦！ 五周目の干支えとに還り、つまり少年に戻る日の記念出版の意義ここにありだ。企画を立てた幹事諸公に心から感謝をするよ。あの爆発のあつた日から四十余年、互いに自分が六十歳のお爺さんになることを誰が想像した

ろう、そして歴史や世の中がこんなに変わることを誰が予想したろうか。

最近僕も本業の冷凍機械の仕事とは別の仕事もやるようになってね、セミナーと称して少し変わった勉強会なんかもやるんだが、そのテーマにターミナルケア関係のこともあってね。ある権威が言うには、人間は禅宗でいう九識の悟りや、インドの瞑想チヤクワのような境地に修業を積んで到達すると、自分の一番気に入った時代を彼岸の地、つまりあの世に永遠に固定することが出来るのだそうだよ。

当今パソコンやワープロが普及し、中にはマルチメディアのようなものまで現われて、中にはこれらを日頃仕事に使っている人もいるだろうが、あのコンピュータ情報編集が終った後の文字や画像や音をセットボタンを押して固定してアウトプットCDROMにするのと同じ要領らしいよ。究極の悟りというのは……。そういえばこの分野の人達として精神医学界の大権威になった佐々木ユーちゃんや川崎タダシ、喜多キタ公がいるね、又校長会と同様我が同窓には偉いお医者様が沢山出たね、これも異常発生か。番号点呼が必要だね。相田アイさん、稲生イナゴ、遠藤コーヘイ、関口スイッチョン、関根ワンちゃん、竹内イタさん、中田ジンセー、水村かばさん、宮崎ギセン、道又シヨータツ、中内ヨーチ、君塚みみずく、吉崎ヨシトラ、まだいたらごめんね。それに宗教界では佐々木リョーユー、塩入リョーゼン、山崎十哲の三御尊住。皆さんにご意見を聞いてみたいね。

僕の言いたいのはこうだ。つまり自分の気持一つで彼岸の世界に永遠にセットしてみたい時代を自分で選べるんじゃないかという事だ。今、僕はすっかりその気になってしまい、もし出来るとすればどの時代にしようかと本気で考えたんだが、この度の企画にみんなの原稿が集まって出版された暁、これを全部読んだら「この時代に俺の彼岸をセットしよう」という気になっちゃうのじゃないかなあ。究極のタイムスリップ憧憬だねえ。

そんなことを言うに僕の人生にもっと長く付き合った女房や子供に悪いけれど、あの十二歳から十八歳までの少年期は時代そのものが波瀾万丈、新旧の文化の激動の渦、みんなも書いている様に、生き甲斐なんていう贅沢なものでなく「過ごし甲斐のある六年間」だったと言えるんじゃないか。その時少年として過ごせたことは素晴らしいことだったと思うよ。

そこに登場する人々は皆忘れ得ぬ人々だよ。よく考えてみるともう既に黄泉の国におられる方々が多い。知識を授けて下さった先生方、そして三十人近い友人達……。ひよっとしてこの僕が彼岸の世界に旅立った後、まだこの世でうろろろしている人がいた場合は自分の永遠時間を川中・川高時代を選んでセットし、先に逝った連中もこのタイムトンネルに呼び戻して、例の調子で面白いことを企画して僕が待っていることを忘れないでくれよ。

追記

永遠に皆さんと遊びたいので文中なるべく多くの友人に、あの時代で登場してもらおうべく強引な努力をしましたのでお読みにくい点はお許し下さい。

又爆弾造りはあれで卒業してしまい、その後全くやっております。世界のあちこちで起きるタチの悪い事件とは全く関係ありませんので警察などへは通報しないようお願い致します。

平素は女房と一男二女に囲まれ、川越は喜多院前で意外にまじめに暮しております——。